しずおかの女たち

第八集

特集　市原正恵の残したもの

静岡女性史研究会

はじめに

二〇〇五年に『しずおかの女たち第七集』を出版してより八年が経過しました。その間に私どもの会が中心になって聞き書き集『静岡の女性』を上梓しました。失われた一〇年とも言われ、女性を取り巻く環境もまた停滞している様相が見えます。しかし家庭における男女共同参画はかなり実現され、イクメン、カジダンが話題になるなど、課題は徐々に変質してきております。

労働環境の悪化、離婚率の上昇、一人親世帯の増加、ひいては子どもの貧困と、解決されない課題が顕在化してきております。そして意思決定場面への女性の参画は遅々として進まず、日本の男女平等（ジェンダー・ギャップ）指数は二〇一三年には一三五カ国中一〇五位、先進国とは言えない状況にあります。

二〇一一年三月一一日フクシマ発の原発の問題は、澱のように人心を疲弊させております。

一方、消費税増税と二〇二〇年のオリンピック開催決定はデフレ脱却への試金石となるか否か、女性の力活用が世の中を変える力となるかなど、新しい施策が試みようとされています。

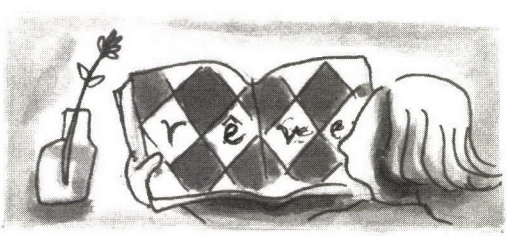
今回、女性史研究会では、会員がそれぞれの温めてきたテーマを中心にして一冊にすることに致しました。中世の武家社会から、明治大正昭和を生きた女性に光をあて、またアメリカのジェンダー潮流など、幅広い分野にわたった記録を第八集にまとめました。

それと同時に、二〇一二年七月、亡くなられた市原正恵さんの足跡を掲載いたしました。

静岡県にあって女性史研究の先達として、県史編集においては女性・文化面を担当し、女性の歴史をたどる仕掛け人として生きた彼女の人生を追いました。

このような作業の蓄積が県内女性の蓄積となることを祈っております。この本を発行するにあたり「静岡県男女共同参画地域活動パワーアップ事業」の交付を受けたことを付記しておきます。

静岡女性史研究会　　二〇一四年二月



カット N.N

目次

はじめに／1

第一章　講演録

平塚らいてう　孫が語る素顔……奥村　直史　8

第二章　ライフヒストリー

戦前・戦後・八九年を生きて／小長谷澄子……勝又千代子　32

市川房枝氏に学んで五〇年
今九四歳　余生を楽しむ／金原愛子……勝又千代子　66

女性教師として四〇年を生きて／栗田富貴代……佐野　明子　86

思い出——俵萠子さんのこと——……西澤　功子　100

新たな地平を目指して
——女性の拠点づくりとネットワーク／近藤美津江……川井　陽子

〈寄稿〉近藤美津江さんと「婦人係」のこと……大塚佐枝美　107

人権弁護士・海野晋吉の母——海野はる小伝——……高野　康代　120

……尾崎　朝子　127

海野厚とその母遊佐――「背くらべ」の歌に寄せて……大塚佐枝美 151
中国・内モンゴルに暮らして……川井　陽子 177

第三章　研究ノート

記録　谷津カトリック教会……尾崎　朝子 204
戦後の女教師たちの思いを綴った『婦人教師』を今読みなおす……勝又千代子 240
『源平盛衰記』を読む――武将の妻の役割と自覚――……大橋　聖子 261
アメリカ女性史研究の歴史に思う
――ジェンダー、人種、階級と権力関係――……上杉佐代子 271

第四章《特集》市原正恵の残したもの――近代史に女性の足跡を紡いだ人――

〈市原正恵エッセイ集――青春の軌跡〉
あの頃……激動の時代（一九四五～一九五二）の私……288
リードイン静岡ことはじめ――一つの場が生まれた――……295
記憶と記録について……298
私記・宮本百合子……300
シュザンヌ・ヴァラドン……304
映画街育ち、今も……307

書物的なめぐり合い……310
静岡の女性を掘り起こし未来につなげる（聞き書き）……315

〈市原正恵　追想〉

【寄稿】

亡き妻を偲ぶ……原口清／318　母について……市原健太／322
弔辞……牛木琴／323　先を歩いた大きな女性（ひと）……奥田利子／326
リード・インの市原さんなど……川村美智／329
正恵さんとの数々の思い出……小泉亮子／333　正恵さんを思う……小長谷澄子／338
市原さんの思い出……谷川昇／341　静岡県の女性史をうち立てた人……平井和子／344
シャンソンを共に……丸山みよ子／346　「たまき」と呼ばれた少女……望月正弘／350

【静岡女性史研究会会員】

市原正恵さんとの出会い……大橋聖子／363　カサブランカ……尾崎朝子／365
心に残る色々な市原さんのこと……勝又千代子／371　愛しかないとき……鍋倉伸子／374
静岡女性史研究の先駆者……大塚佐枝美／377
市原正恵さん関連の新聞記事／381
静岡女性史研究会三五年のあゆみ／383
編集後記／385

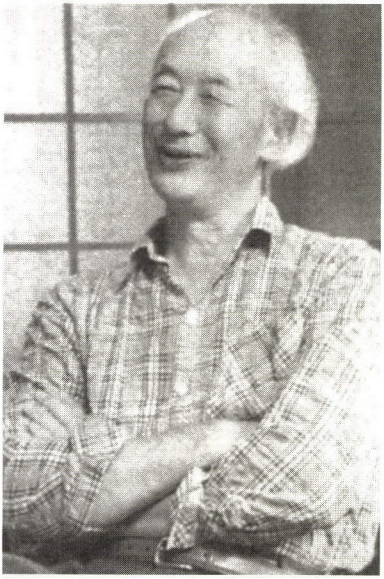
凡例

一、年号は語り手の語りを尊重したが、元号・西暦をカッコ内に付したものもある。
一、本書の記述は現代仮名づかい、常用漢字、漢数字を用いた。
一、方言、語り口については話者の記憶、表現を生かした。
一、書名・雑誌・新聞名は『　』、映画名、論文名は「　」とした。
一、「三ヶ月」に見られるような「ケ」は使わず、「三カ月」のように表記した。
一、末尾に聞き取りの年・月を記し、調査が数回にわたる場合は第一回目の日付とし、聞き取り者名を記した。
一、地名は、原則として当時における地名、町名を用いた。
一、本文中の人名については、原則として敬称を省略した。
一、職業の呼称など、記述のなかには今日の人権意識に照らして必ずしも適切でない用語があるが、本書の主旨から歴史的用語として当時の表記を用いた。
一、脚注は語り手の話を補うために執筆者が補足した。

第一章　〈講演録〉

平塚らいてう　孫が語る素顔――奥村　直史

80歳の誕生日に（1966年2月10日）



奥村直史さん

「奥村直史氏プロフィール」

一九四五年、東京都世田谷区生まれ。一九六八年、早稲田大学第一文学部哲学科心理学専修卒業。一九六八―七三年、芳野病院に、一九七三―二〇〇五年、国立精神・神経センター国府台病院に心理療法士として勤務。以後、東洋学園大学非常勤講師、千葉県浦安市メンタルヘルス相談員等を経て、現在、千葉県市川市南八幡ワークス心理相談員。

著作『平塚らいてう―孫の語る素顔』平凡社新書、「平塚らいてうと一五年戦争」『平塚らいてうの会紀要』第六号。

【講演】

今日、私はらいてうの孫という立場からお話しすることになります。らいてうというと「元始女性は太陽であった」という言葉だけがあまりに有名になってしまい、それだけでらいてうがわかってしまったような気になっている。小学校、中学校の教科書にも『青鞜』のこと、らいてうのことが出てきますが、このあいだ小学校の先生に話を聞いたら、「らいてうと言ったら『青鞜』で〝元始女性は太陽であった〟と線でつなげば大体それで事は足りると思っていたんだけれど、それが大正、昭和に入っても色々な活動を展開し、戦後は平和運動にまい進するというのは全く知らなかった」と、私の本を読んで話してくれました。どうも一般にはらいてうは、「元始女性は太陽であった」で、おしまいというふうな印象があるようなのですが、らいてうのやった仕事をつらつらと考えながら、私の感じている祖母について少し話させて頂きます。

らいてうは一八八六（明治一九）年に生まれ、亡くなったのは一九七一（昭和四六）年です。祖母が五九歳のときに私は生まれました。そして八五歳で亡くなっているんですが、私はそのとき二六歳でした。二歳から一三歳までは成城の駅前の家で、祖母と祖父と私の両親と私の兄弟三人とで生活しておりました。

一三歳で、成城の奥の家に引っ越し、祖父母と別居しますが、ひと角違いの住宅ですから、しょっちゅう行き来もあり、とくに祖父が亡くなったあとは、祖母は晩ごはんには家に来て一緒に食べるか、それともおかずを届けるかで、ずーっと連続して接点を持続していました。そんな生活体験のなかで見える祖母のイメージと、世間に流布するらいてうのイメージがずいぶん違うなという印象があって、それをまとめたのが、今回の本です。（『平塚らいてう　孫の語る素顔』平凡社新書）

祖父母が成城学園に家を建てたのは昭和元年でして、まだ小田急線は引けてませんでした。その頃の成

城は全くの松林とすすきの原っぱ、ただそれだけの所でした。そこにぽつんと建ったのが祖父母の家、そこで私の父は小学校からずーっと生活することになりました。私も二歳から一三歳まで祖父母と一緒に生活しましたが、その頃は商店も建ち並び、自動車が走りやすいように駅前の松も次第に切られるという頃でした。祖母がらいてうというペンネームをもっていて、なにか活動しているらしいということは小学校に入る前からなんとなく知っていましたが、私はらいてうの孫だと言われるのがすごくいやで、そんなものはふり払いたいほどでした。そんな思いもあって、なるたけ祖母のことはしゃべらないし、避けていたい、そんな思いが私のなかにはありました。

らいてうと4歳の直史さん（左）
（1949年）

祖母は昔の人なんだ、らいてうというのは過去の人だと、ずーっと思っていたんです。祖母の書いたものもたいして読んだことはなかったんですが、祖母が亡くなってしばらくした頃、一九九八年に祖母の記念碑が茅ヶ崎に建つことになって、その「記念碑を建てる会」の皆さんから、私の父である奥村敦史（あつぶみ）に出席の要請があったんです。けれど、ちょうど父親が心臓の手術をした直後でしたので「おまえ行ってこい」と言われたんです。私はしぶしぶそこにでかけて行くことになりました。過去の人だと思っていた祖母ですが、びっくりしたんだけれど、行ってみたら何百人という人が参集していたんです。へぇー、こんなに今でもいろんな人の心の中に祖母の活動が生きているんだ、いろんな人がいきいきと祖母の存在を感じているんだと知っ

て、あーっそれじゃ祖母のことをもう一度考え直してみなくちゃいけないなと思いました。通勤電車の中で祖母の自伝や著作集を読んで勉強し直したり、祖母のことを思い出したり、はじめて祖母のしてきた仕事に関心を向けたのは私が五〇歳を過ぎてからでした。それまではまったく、ある意味、らいてうとしての祖母を無視していた、そんな生活だったと思います。

祖母をそんなふうにみつめ直す中で、たまたま旧友にすすめられて本にまとめるかたちになりました。その本のおかげで、今こうして静岡の地にお呼び頂けるようなことになりました。まさか、こんなふうに祖母のことを話すような自分になるとは思ってもいませんで、今、面食らっています。

世間に流布する「らいてう像」と違う「日常の祖母」の姿

今日の催しのビラにも「女性運動の先駆け」といった表現があったと思います。『青鞜』の発刊が明治四四年、一九一一年ですが、当時の明治、大正の頃のマスコミ、当時はもっぱら新聞・雑誌ですけれど、マスコミの扱われ方も女性運動の闘士とか女傑とか、表現されていたようです。その延長での「新しい女」という呼び名はひじょうに揶揄を込めた言葉だったようですし、ときには警察の署長が「色欲の餓鬼」とまで『青鞜』の人々を呼んだこともありました。そんなふうに皆からたたかれ批判される、それは逆に言えば、らいてうや『青鞜』の女たちがひじょうに勇ましく、大声で自己を主張する猛々しい女というイメージがつくられ流布していった、今回のこちらのビラにも「雄々しい」という表現がありますよね。雄々しい女としてのらいてうが今でもイメージされているんだろうと思います。

当然そのことは大柄で声を大きく発して演説するようなイメージにつながります。でも実際のところ祖母は小柄でひ弱なんです。祖父は背が高くって一七〇セ

ンチの半ばぐらいあったと思います。明治の男としてはひじょうに大きかった。けれど祖母は、一五〇センチないと思います。小さいです。ちびで骨格もきゃしゃでひ弱です。頭痛持ちで、自家中毒でしょっちゅう吐き気の発作におそわれたりして、病気がちな人でしたから、ひじょうに虚弱で、弱々しい。立ち居振る舞いもおとなしくスローモーで、雄々しいとはとても言えません。

大体、大きな声で話すことができない。極端な話、おーい、って大きく人に呼びかけることができない。家のなかで食卓のまわりで話し合うことは別にそんなに不自由することはないんですけれど、大きな声で人に呼びかけることができない。私の母親が買い物に出ようとする時に祖母がそれを呼び止めようとする時、声では届かないので、やったことは、手をたたく（ポンポンポンポン）。それで母親が振り向いて近くへ来てから「この葉書出しておいてちょうだい」というふうな頼みごとをするみたいな状態でした。

手をたたいて人を呼ぶ、というのは女中を呼びつけるみたいな感じで……女中という言葉はすでに死語になっていて差別用語かもしれませんけれど、当時のイメージとしてはそうだったと思うんですが……母親も、そんなふうにして呼ばれることをいやだったと言っていますけれど、でもそうしないと、なにしろコミュニケーションがとれないということがあって、祖母は仕方なくそんなふうにしてたんだろうと思います。だから、祖母は大勢の人に向かって演説なんかできません。三〇人くらいの小さな集まりに私も出席したことがあって、祖母がそこで挨拶に立って一所懸命話したんですが、だけど声が聞こえるのは周りの二、三人の人だけだったと思います。表情をみれば一生懸命何かしゃべっている様子はみえるんだけれど、会場のほとんどの人には声が聞こえない、それくらいの声しか出ない、そんなことがありました。

それぐらい声が出ない。ですから講演を頼まれると事前に原稿を書いて誰かに代読してもらう、その傍に

じっと立ってる、そういうふうな講演の仕方しかできなかったようです。ところが、原稿が間に合わないと自分でしゃべらなければならない事態になっちゃって、という記録もあります。そんな時は、きっと誰も聞こえなかったんじゃないかなと思います。ですから演説するようなことは最も苦手で、いわゆるディベートというか、多くの人数で討論し合ってということも、本当に苦手な人だったと思います。声がでないだけじゃなくて、内向的な性格がひじょうに強くってとじこもりがちでした。

だけどね、そればっかりだったら、らいてうという名が小学校の教科書に載るはずないわけで、文筆活動の〝書く〟ということにおいては、ひじょうに歯切れがいいわけですよね。「元始女性は太陽であった」という言葉は素晴らしい言葉だと思います。なかなか衝撃的なコピーだった。素敵なコピーを彼女はつくりだしていると思うのです。「わたしは新しい女である」という宣言の仕方もその一つだった。いくつかそういう言葉があるようです。だから、文章で筆を通して表わす世界と、自分の肉声で他の人とコミュニケーションする世界と、まったく違う両面をもっていました。

自伝の執筆を手伝って下さった小林登美枝さんは、「外柔内剛」という表現を使っていますけれど、外に柔らかく内にはひじょうに強い面を持っている、確かにそういうふうな両極端を併せ持った人だったろうなと思っております。社会的な活動をしたけれども、根本的にはひじょうに内向的で内省的な人だったんでしょう。

一八歳で日本女子大学校に入って、その頃に「神とはなにか　人とはなにか」ということを思いつめ、哲学書や宗教書を耽読する。そんななかで、最終的に禅に没頭し、その禅で最初に与えられた公案は、「父母未生以前の自己本来の面目」、お父さんお母さんが生まれる前の自己の本来の姿は何かというような問いかけのようです。禅のことは私わかりませんからはっきりしたことは言えないんですけれど、そういう問いか

けに対して考えてこいというのが最初に与えられた課題だったようです。それを考えて朝五時、六時に起きて座禅堂で座りこむ生活を一年近くしてようやく見性が許される。その回答をなんとか見つけることができた。そこで得た「我」とか「自己」とかいうことに対する体験が、祖母らいてうの、それからの生活の根本をなしたというふうに言えるんではないでしょうか。

今日は、その「自己」についての、らいてうの心の中での変遷、流れを少しお話したいと思います。

日本女子大学校２年の頃、「海賊組」の仲間と。立ち姿がらいてう（1904年）

一生座禅を続け、沈思黙考し、自分の中に、中に入っていくような人だから外向性は乏しい、ほかの人に気軽に声をかけるということもしにくい人、感情をぱっと発散するようなことはできないような、そんな人でした。ですから、孫である私と一緒に同じ家のなかで生活していても、祖母は晩ごはんを我々と一緒の机について食べますけれど、それ以外の時間は孫の私たちのところへむこうから近づいてくるということはほとんどなくって、自分の部屋にとじこもって、座って読んで書いてという生活ばかりだったように思います。

自分から子どもに近づき、ちょっかいだして遊んだり、孫と一緒にいることで毎日の生活がほとんど過ぎる、孫を自分のまわりでちょろちょろさせているのが嬉しくてしょうがない、というおばあちゃんが世の中にはたくさんいると思うんですけれど、祖母にはからっきし、そういうことはない、祖母に遊んでもらったという思いは私にはないです。抱いてもらった思い

もたぶんないんじゃないかな。だからといって祖母が冷たいと思ったり、私が疎んじられていると思ったことはありませんけれど、なにしろ部屋にいていつも静かにしている人だなあ、ちょっととっつきにくいなあというのがずっと私の印象でした。

座禅を通して、祖母は自己というものをみつめ、考え、二〇歳で見性を許されたけれど、社会の中で自分がどうやってこれから生活していくのかってことは未だに分からなかった。女子大を卒業しても、その後の身の振り方を決めかねて、英語、漢文の学校に通い続けるモラトリアムな生活を続けることとなります。そういう意味でアイデンティティを確立できずにいました。

社会の中で自分をどう位置付けるか、それを明確に自覚的に形作るのがアイデンティティの確立だと思いますけれど、それが十分出来ずに数年の迷いの時期を過ごして、二五歳で『青鞜』の創刊に参加し、青鞜での活動を通してアイデンティティを祖母は確立していったんだと思います。その最初のアイデンティティというのは、あくまでも「個」としてのアイデンティティだったろうと思います。

青鞜発刊時は「個」としてのアイデンティティ

一九一一（明治四四）年に、女だけで編集する雑誌『青鞜』が出されて、二五歳のらいてうは「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である」と書きます。これが活字になった最初の文章でした。

この冒頭のところを聞き及んでいる方は多いでしょうが、全文をちゃんと読み下した方はこの中にも何人いらっしゃるか？　と思います。長文でなかなか難解です。抜粋ですけれど資料に載せました。そこで、らいてうが言いたかったことは、「真正の人」にならな

ければいけない、今の自分の生き方っていうのは本物じゃない、それは偽りの姿だ、本当の自分の姿というのを自分はさぐりたいんだ、本来あるべき自己というものが、女であるがゆえに、現状の世の中ではゆがめられてしまっている、そういう認識が祖母のなかにはあったと思います。

「私の願う自己解放とは何だろう。いうまでもなく潜める天才の偉大なる潜在能力を十二分に発揮させることに他ならない」そう書いてます。あらゆる人がその人の潜在能力を十二分に発揮すれば「天才」たりうる。私もその一人になるだろうし、あなたも、あなたも、あなたも全てのあなたが本当に自分らしく振舞うことができれば「天才」となり、それは素晴らしい姿になるはずだ、それを私は求めたいんだ、というふうなことだったと思います。

『青鞜』第一号表紙
(長沼智恵子絵)

後年その事を「自己実現」とか「自己発揮」とか「自己完成」とかといった表現を祖母はしていますけれど、これはなにも女だけの問題ではなくて、男にとっても、決して明治の時代の問題だけではなくて、平成の現代でもあらゆる人にとって大きな課題で、自分が本当に自分らしくあるか、そのことを問うなかで自分が十二分に自分を発揮することを求める、そういう思いが、『青鞜』創刊の辞のときの言葉にはこめられていたと思います。

現実問題としては、当時の明治の時代は儒教思想が濃厚で家制度が厳然としてありました。儒教の三従思想、生まれては父に従い、結婚しては夫に従い、老いては子に従う、というのが女のありかたとしては最もふさわしいものだという考え方、女は家のなかにあり、家長である夫に支配され、その指示のなかで動くことが当たり前、住むところも活動も仕事も家長の指

示のなかで為されなければならないし、財産相続の権利もない、子どもが生まれても子の養育権もない、結婚の相手も親が決めるという時代であったわけで、そのなかにいる自分は、自分本来の力をそのまま発揮させているとは思えない、だから他から来る光によって初めて姿をあらわす月でしかないだろう、自分が選んだ色で、内からあふれる思いで光輝くことを主張する太陽に自分はなりたいんだ、そうすることが自分の今やるべきことなんだ、という思いが強かったんだろうと思います。そんななかで「個」としての自分を押し出す、主張する、そこにらいてうはアイデンティティを発見し、そのアイデンティティのなかでその後の生活をつくっていこうとした、それがいわゆる自我の覚醒・確立と言われたりしたものだと思います。

それにつづいて、自分の恋愛を尊重する、自分の中に生まれる感情に従って連れ合いを選びたい、明治時代の結婚制度というものは個人的な感情の問題ではなくて、家の取引としてなされていた結婚だったんだけれど、自分はそれを拒否する、あくまでも自分は、自分が一緒に住みたい人を自分が選んで、自分らしい生活をつくりたい、そういう恋愛感情の主張があって、結婚といっても明治の民法に縛られた結婚はしたくはない、だから法的な手続きは取らない「共同生活」というかたちで五歳年下の画学生奥村博史（おくむらひろし）と一緒の生活を始めました。今だと、結婚前に好きな男と女が同棲生活をするというのは当たり前の世の中になっていると思うんですけれど、当時は恋愛にもとづく結婚というのは〝野合だ〟と言われ批判された時代だった。そのなかで、自分は自分で自分の生き方を決めるんだという思いで個の主張をし、自分らしさを主張するということを頑張りとおして奥村博史と共同生活を始めました。

まずは「個としての自己」があった。共同生活を始めるにあたって、らいてうは子どもなんかつくりたくないと言ってたんだけれど、できちゃったんですよね。子どもがね。最初はひじょうにとまどって堕胎も

考えたらしいし、里子に出すことも考えた。自分が自分を教育し自分を修練させるためにのみエネルギーを注ぎたい、とても子どもにエネルギーを注ぐひまはない、そういう意味では子どもは自分の敵だと思う心も祖母の中にはあったようです。それでも、恋愛の中で生まれた結果である子どもを受け容れることを決断し、出産し、子育てをするなかで、自分のなかに子どもに対する特別な感情が湧き出てくることを体験せざるをえなかった。「母性」というものを自分のなかに発見することで、新しいアイデンティティが生まれてくることになってきます。

千駄ヶ谷の家で（1923年頃）

新しいアイデンティティ「母性」としての自己

それまではまったく個人主義的なエゴイズムにもとづいた生活をしてきたんだけれど、他の人を愛するという他愛主義アルトルイズムに通じる体験を自覚し、自分のなかに発見する。自分のなかに潜在していた「母性」を発見する。そうすると、自己というものが、個人的な自分だけではなくて、つれあいである奥村博史であり、その子どもである曙生（あけみ）であり敦史（あつぶみ）であり、子どもたちを含めた自分であり、その延長で自分の家族だけではなくて、あらゆる母親と子どもが安心して住めるような生活をどうやったらつくれるだろうか、といった発想のなかに自分のアイデンティティを移していく。

アイデンティティがだんだん広がっていくという体験を持ったように思います。そして、ものを生み出す

労働には賃金が支払われるけれど、次世代を産み育てる労働、即ち母が子を産み、育てるという労働には経済的な裏付けがない。これにたいする批判がふつふつと芽生え、そういう社会の現状に対する疑問が広がって「母性保護」を主張するということになってきます。

「家庭労働に子を産みかつ育てる母の仕事に経済的価値を認めよ。国庫が母の仕事に対して報酬を支払うことを要求しよう」という主張になってくるんですが、現在の時代では、育児手当だとか児童手当という形で国が家庭にある程度の経済的な支援をするということが制度的に、とても充分とはいえないけれどなされようとしていますが、当時は全くそんなことはないわけで、すべてが夫である男と妻である女との家庭のなかでまかなわなければならないという時代だったわけです。それを国庫が母の仕事にたいして報酬を支払うべきだという主張は、ひじょうにとっぴに聞こえたんだろうと思います。

与謝野晶子は、それは国家に寄食する「依頼主義」だとらいてうを批判して、母性保護論争が展開されることになりました。その延長で新婦人協会の活動もでてきます。一九二〇（大正九）年には、らいてうは三四歳ですけれど、新婦人協会を設立してその雑誌の創刊の辞にこんなことを書いてます。「婦人が男子と異なる点において、即ち女性である点において認められ、尊敬されるのでないかぎり、やはり婦人は永久に本当の意味では無視され侮辱されているよりほかありません。」

子を産み、母となる、そういう女のあり方を尊敬するようなかたちで認めてもらわなければ、女としての自分は窒息してしまうんだ、それを主張し運動として組織をつくって展開しようとした最初の女性の社会的組織「新婦人協会」が設立されました。だけどその当時は、婦人参政権はいまだない時代でしたから婦人参政権をめざしての活動になる、婦人参政権以前に政治集会に婦人が参加することが認められていない時代でした。治安警察法第五条に政治集会に婦人の参加が認

められないと書かれている。その修正を請願する取組になります。

さっきも話したように、祖母は内向性が強く、はにかみやで、人を訪ねることなんてものすごく苦手なわけで、自分から人の家を訪ねるなんて大仕事だった。人の家の玄関に立ってベルを鳴らしていながら人と顔を会わせる恐怖と緊張がつのって、出てきてくれない、不在だったらどんなに有難いだろうと思う。どうしても電話しなければならない、呼び出し音が鳴っているときに、受話機をとってくれなかったらどんなにほっとするだろう、とそんな思いを抱く人ですから。人に頼み歩く請願運動を展開するといったことは、一番苦手なこと、それを無理やりやらざるを得なかった。自分で自分のはにかみやと闘いながら、孤独な生活をしたい、静閑を求めたい、という思いを抱きながら、そうした性格と戦いながら、自分の性格を無理やり抑え込みながら走り回るといったような一年、二年があったようです。

婦人思想講演会。新潟県柏崎にて(1920年11月7日)。洋装姿がらいてう

そんな無理なことをやったから、吐き気と頭痛の発作におそわれて、途中で挫折し療養生活に入ることになります。そんなようなことを一生懸命やってた時も、自分のアイデンティティは、あくまで「子を産み育てる女としての我々」「母性」が自分のアイデンティティであり、そのアイデンティティを守り拡充するために活動せざるを得ない思いだった。らいてうは病気で請願運動の途中で動けなくなりますが、奥むめおさ

ん、坂本真琴さん等の仲間が持続的に動いてくれて、治安警察法第五条の修正案は可決され、政治集会への女性の参加が初めて認められたのは一九二二（大正一一）年でした。

新婦人協会は祖母が三四歳の時ですけれど、一〇年後に「我等の家」という消費組合をその時住んでいた成城で作ることになります。「相互扶助的な平和な台所の変革運動から資本主義経済を切り崩す」これが女性の生活と信条とに最もふさわしい運動だという思いで、消費生活運動を展開します。クロポトキンの『相互扶助論』に影響されて、協働自治社会の建設を考えて、その前段階として消費組合運動を展開しましたが、戦時体制の統制経済のため昭和一三年に閉じざるを得ませんでした。その途中で高群逸枝さんの無産婦人芸術連盟に参加して、「婦人戦線に参加して」という文章を書いてます。それもコピーしておきました。そこで相互扶助論に基づく協働自治社会の建設を一所懸命説いています。あらゆる母と子を含めて、どうやって自分たちがより豊かな安定した生活をのびのびとつくっていったらよいか、共同自治社会というアイデンティティのなかで動いていた昭和一〇年台でした。

その前、第一次世界大戦が一九一四（大正三）年から一九一八（大正七）年まであります。世界規模での人殺しがなされた。生命の愛育者である「母性」を主張したらいてうは、最も憎むべき戦争を批判して「武力偏重の思想を排す」「世界民であり、宇宙民である私どもは」軍備縮小を願うという文章を書きます。軍

成城の家の庭で博史と（1927年頃）

備縮小を願うのは第一次大戦を経験した我々みんなの思いであるのに、国家間の話し合い――当時は国際連盟の時代です――国家間の話では軍備縮小という話が一向に進展しない。そうだとすれば、現実の国家は我々人類の敵なんじゃないか、我々は国家のなかの人民としてあるのではなくって、「世界民」「宇宙民」だと主張します。要するに、ひとつの国という単位ではなく、もっと大きな単位のなかに自分を位置づけなくてはならないのではないかと、そんな発想をしています。

そのあと、ご存じのように一九三一（昭和六）年に満州事変が始まり、一九三七（昭和一二）年には日中戦争、一九四一（昭和一六）年に太平洋戦争が始まるというような時代をくぐっていき、国家総動員法が施行され、消費組合「我等の家」も立ちゆかなくなる。「我等の家」は成城の小さな組合で、仲間と一緒に育ててきて一〇年活動を継続してきたわけなんですが、祖母はガリ版を切り、特売日のビラを刷り、小学生の息子も販売を手伝ったりして一〇年続けて来た。それが戦時の統制経済の中で立ちゆかなくなり閉じざるを得なくなります。その後、社会的な活動かららいてうは全く遠のいてしまうということになりました。

らいてうの経済的な基盤は、博史と一緒の生活を始めて以降、もっぱら、らいてうの原稿収入に支えられていました。祖父・博史は全く自分で稼げなかった。画家なんですが、絵は描きたいけれど絵を売ることは全く自分ではできない。東郷青児に「君、絵を売るんだったらね、ねばらなきゃだめだよ。いらないって言われそのまま引き下がってきちゃだめで、ねばって、ねばって、ねばるんだよ」って言われたけれど、「そんなことを言われたら俺はもう、絵をドブに捨てたくなった」というふうなことを書くような、気の弱い男なんです。祖父が成城学園の絵の教師になった時期もありましたが、それはほんの四、五年のことで、それ以外は定期収入は祖父は全くあてにできない。ですから経済的には祖母が書く原稿料でなんとか生活してい

たというのが実態のようです。祖母の原稿収入も不安定で、経済的には逼迫した生活だったようです。成城学園に、私の親父も叔母も小学校、中学校は通っていたんですが、〝しばらく学費を待って下さい〟という手紙を学校の事務所に何度も何度も持っていかされたようです。

疎開期間の沈黙

一九四一（昭和一六）年一二月八日に真珠湾攻撃がありますが、翌四二年三月にらいてうは茨城県戸田井に疎開し、終戦後の四七年まで、丸五年間そこで自給自足的な生活をします。その間、祖母はほとんど原稿を書かなくなります。書かなくなったのか書けなくなったのか、両方だと思うんですけれど……。だから経済的に大変なピンチになるんです。そんなふうに原稿を書かなくなったのは息子・敦史がその年（昭和一六）に大学を卒業し扶養家族が減ったということがひとつはあったんだろうと思うんですけれど……原稿を書かなくなりました。戦争が始まってまだ三ヵ月ぐらいですから東京が空襲されることを誰も話題にしなかった頃に、ポンと東京を離れて茨城県に疎開しちゃうという、これもひじょうに特異なことです。原稿も書かない。成城の家は人に貸してその家賃が唯一の収入ですから自給自足に近いような山羊を飼い畑を耕す生活を始めます。そういうふうな戦争時代を過ごして敗戦を迎えます。そのあいだ社会的な発言をほとんどしていない、原稿を書かない。農婦として畑で野菜をつくっているといった生活だったようです。

敗戦後、一九四五（昭和二〇）年には選挙法改正があって、婦人の参政権が棚ぼた式に進駐軍の命令のなかで日本の女性に与えられました。それにともなって一九四六（昭和二一）年の四月の選挙では三九名の女性議員が当選し、日本の社会が大がわりした。その時、以前の仲間である市川房枝さんだとか、奥むめおさんだとか、新婦人協会で一緒に活動した人たちは、すぐに戦後の民主化運動の中に組織を新しくつくろうとい

う形で動き始めます。しかし、祖母は全くそれには反応しない。茨城県の戸田井にとどまったままでした。動かなかった。動けなかった。でも、一九四六（昭和二一）年一一月三日に新憲法が公布されて新しい憲法を読むなかで、祖母はまた勇気づけられ、動き出す契機となったようです。

ご存知のように、憲法一四条には「すべての国民は法のもとに平等である」ということが謳われている。二四条では「婚姻は両性の合意のみに基づいて成立し、両性の本質的な平等を制定」している。若い日からの念願であった婦人解放の門口にようやくたどりついたという感慨を、祖母は書いています。自分たちが一生懸命願い願って運動をすすめて、身体を消耗させながら頑張ってきたことが、ある日ひょこっと与えられ、虚脱感もあったようです。でもそれと同時に九条の非武装非交戦条項にすごくひきつけられて共鳴したのです。一九四七（昭和二二）年に東京成城の自宅に帰ってきて祖母がしたことは、平和論の勉強でした。エマヌエル・カントだとかバートランド・ラッセルの平和論や内村鑑三の平和論を読むなかで、この戦後をどういうふうにしていったらよいのかを一生懸命考えた。

もともと、母性保護論争以来、次の世代を育てるという生命にかかわる母性の仕事を尊重し、人間の未来にかかわる生命を育てる母性の仕事を公的に支えることを主張してきたわけですが、戦争はそれと全く対立するわけです。まさに戦争というのは大量殺人ですから、母性が産み育てた生命をないがしろにする。そういう戦争が起こらない状態をつくりたい。反戦平和の主張が濃厚になってくる。らいてうはもともとスウェーデンの思想家エレン・ケイの影響を受けてますが、エレン・ケイは、「いっさいの婦人運動は、平和運動をもって完結する」と言ってます。そんなことも影響したんでしょうが、反戦の問題を一生懸命考えて、たどりついたのが「世界連邦制」でした。

それまでずーっと文章を書かなかった時代が長かっ

たんですが、一九五〇年に突然祖母は動きだします。昭和二五年です。終戦後五年、東西冷戦となり、朝鮮戦争が始まったその翌日のことでした。「非武装国日本女性の講和問題についての希望要綱」を祖母は書き起こして、野上彌生子さん、上代たのさん等女性五人と一緒になって発表する。それが戦後の祖母の社会的動きの初めでした。

当時、戦勝国である中国、ソビエト、アメリカ、イギリス、フランスという列強のなかで、日本は講和条約を結んでいない占領下にあったわけですが、片側だけのアメリカ、イギリス、フランスとの国交を回復しよう、講和条約を結ぼう、ソビエト、中国という共産圏とは一線を画すという片側外交を吉田茂首相は始めようとした。それに対して全面講和を主張して「非武装国日本の女性の講和問題についての希望要項」を来日中のダレス特使に手渡した。

西も東もない、自分たちは戦争というものをなんとしても抑えるための中立国であることを主張していきたいんだ。非武装中立というのが生やさしいことではないことはわかっているけれど我々はそれを貫きたい、という主張のなかで戦後の活動が始まっていきます。そのあとに「再軍備反対の婦人委員会」を結成し、「原水爆製造・実験・使用禁止の世界婦人にあてた日本婦人の訴え」を出したりして、世界的活動を次々と展開し、一九五五(昭和三)年には「世界平和アピール七人委員会」の結成に参加し、国際連合を世界連邦にまで磨き上げることが今、世界の平和

世界平和アピール７人委員会　記者会見
(1962年10月27日)

にとって必要だという主張を湯川秀樹さん（ノーベル賞物理学者）だとか、茅誠司さん（東大総長）とか、下中弥三郎さん（平凡社社長）とか、上代たのさん（日本女子大学長）とかの人達と一緒に戦後の活動を展開していきます。

その時、一九五五（昭和三〇）年というのは、祖母はもう間もなく七〇歳です。かなりの高齢になっていますが、その後一九六〇（昭和三五）年には安保婦人組織全国婦人大会へ激励電報を送り、一九六六（昭和四一）年には、「ベトナム侵略戦争をやめさせるための全日本婦人への訴え」を出したりして反戦活動を継続しました。

こういう活動を話すと、積極的で活発、外向的じゃないかと思われそうですが、祖母は、そういう運動体を組織し統括して引っ張っていくというふうなキャラクターじゃないんです。さっき言ったように、内向的で社会性が乏しくって、他の人と議論することはへたで、ひとりでじーっと考えて、こうである、ああであるっていうまとめあげた思想を文章にすることはできるけれど、みんなと一緒に活動をわさわさつくっていくようなことのできる人ではないと思います。でもいろんな人に助けられ、要請され、日本婦人団体連合会の会長に就任したり、国際民主婦人連盟の副会長になったり、世界に平和をアピールする委員会の委員になったり社会的な組織の要職につくようになっていました。

日米安保条約の破棄を訴えて成城の住宅街をデモ行進。（1970年6月23日）

けれど、くり返しになりますけれど、社交性が乏しくて声が出な

くって、人前で話すことの苦手な祖母にとっては、社会的な運動を組織することはすごくやりにくい仕事で、身体がついていかなくなり体調を崩すことしばしばでした。会議へも病気のために欠席ということがくり返しくり返し多かったように思います。祖母の弱々しい声の電話では相手に通じなかったものだから、私の母が代理をして欠席の通知の電話をしていたのを、何度も聞いてます。

祖母はやっぱり気軽に外には出ませんでした。年をとると老人性早朝覚醒で、朝早く散歩する人がいますが、祖母は宵っ張りの朝寝坊でした。夜中は、原稿書かなきゃいけない時には、一時、二時、三時まで起きていることがしばしばだったし、逆に朝は一〇時、一一時にしか起きない。おふくろに言わせると、私たちを小学校・中学校に行かせるため朝ごはんは六時何分に起きて弁当をつくる、ようやく子どもたちのごはんが終わったと思ったら、おじいちゃんが起きてきておじいちゃんのご飯を用意して、あーやっとと思ったら、今度おばあちゃんが起きてきて、おばあちゃんのご飯を用意してと、一日中食事の世話ばっかりして大変だったと言ってます。

らいてうが、話すのが苦手というのは一般の方はなかなかわかんないのかも知れませんが、らいてうという人の性格はやっぱりかなり特殊だと思います。八百屋に行ってかぶと大根と人参とごぼうを買わなきゃと思って入るけど、それを気軽に言葉にできない人だった。極端に内向性が強かった。感情をぱっと発散することもできないし、言葉にすることもできないし、おたおたおたおたしてて、面と向かってのやりとりは非常に乏しくなっちゃう。だけど自分ひとりで座禅して考えて——座禅は終生してましたね。私が小さい頃も時々お線香立てて座り込んでいた。そういう姿がぽつりぽつり想い浮かびます。そうやって静かにして気持と身体を整えてそこで落ち着いて煮詰まった思いを文章にするという生活がずーっと続いたんだろうと思います。文章には出来るけれど、声には、言葉にはなか

なか出来ない人でした。

一緒に活動した市川房枝さんや奥むめおさんは、戦後には参議院議員を長いこと続けましたから、身体もよく動かしていろんな集会に出席するし、いろんな集まりを主催して社会的活動を推し進める力を持った人たちでした。能動性は非常に強いし、社会性外交性にもたけていたタイプだったと思います。そういう人たちと全く性格が違うので、一緒に活動ができたというのがひじょうに不思議な気がします。祖母にとっては、いつも内向的なはにかみの自分の性格と闘いながら、無理しての社会的活動だったと思います。

「命」をまもるたたかい
――反戦・反核・平和運動

そんな祖母が一九七一年の元旦にこんな色紙を書いています。

「命とくらしをまもる　みんなのたたかいの中から平和な未来が生まれる　新しい太陽がのぼる」

実はこの一九七一年五月に祖母は亡くなるわけです。前年の一九七〇年一一月から祖母は胆道ガンで入院してて、正月外泊して自宅に戻りこの色紙を書いた。「命とくらし」というときの「命」は、人間、人類だけの生命ではなく、生きとし生けるもの自然界の動植物をも含めた命だったと思います。そういう思いを祖母はもって書いたのではないかと思っています。人間の生命は勿論最優先して平和を訴えなきゃいけないという思いであると同時に、自然を対象にして操作しようとする科学技術を過剰に評価し、不遜にも自然を支配しようとする人間のあり方を批判する思いが祖母の中にはあったんじゃないかと私は思っています。

その少し前の一九六二年、「平和を願うすべての婦人に」という文章の中では、「今日の世界危機は、わたくしから言えば、何千年にわたる男性中心の文化――力の支配による男性文化の作りだしたもので……生命の原理に反した文化、殺人文化の終着点の寸前にわ

たくしたちは立たされているのだと思います。」こう主張しています。力による支配を「男性文化」の特性として批判し、憤る思いが祖母の中にあった。武力や、物理的な力や、経済力によって人を、弱者を支配し、他の生物を始めとして自然をも支配しようとする姿勢に納得がいかなかったのでしょう。これと対峙するものとして「母性」をとらえて、「元来母性は生命の源泉である」と主張し、「女の女性としての生活は個人的なものではなく、人類の中に宇宙の中に大きな生命そのものの中にひとつになっている」という発言につながったのだろうと思います。

男らしさと女らしさを対比させて、男だけの力の支配でこの世の中を形づくっていくのは、結局は自然を支配し、他民族を支配し、戦争というような形になる。それを批判して男性性というものを批判している。女性性の尊重をあくまでも主張する。そういう思いが死ぬ前に書いた色紙の中にあったわけです。力の文化を批判しているのは、暴力、武力による支配ばかりを言っているのではなくて、科学技術を過信して生きとし生けるものを含めた自然を支配しようとする不遜な対応に対する警戒の言葉でもあったというふうに私は感じています。つまるところ、原水爆反対だけではなくって、原子力発電、原発反対につながる主張を、祖母は潜在させていたと、今、私は感じています。

こんなふうに考えてくると、祖母らいてうのアイデンティティは、「個」としての自分から始まって、「母性」、相互扶助的「地域共同体」、そして最後には「生きとし生けるもの」「命」としての自己へと、だんだんと「自己」というものが大きくなってきたのではないかと私は思っております。

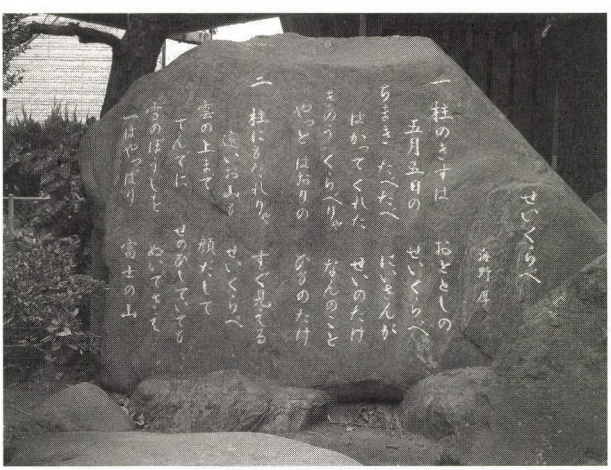
追記：本論の後、戦中のらいてうの沈黙期間について検討しました。以下をご参照いただければ幸いです。奥村直史「平塚らいてうと『一五年戦争』――一九三一年～一九四一年を中心に」（二〇一三）『平塚らいてうの会紀要』六号

《参照文献》
『平塚らいてう著作集　全七巻』平塚らいてう、大月書店、一九八三〜八四
『平塚らいてう自伝　元始、女性は太陽であった　全四巻』平塚らいてう、大月書店、一九九二
『写真集平塚らいてう人と生涯　わたくしは永遠に失望しない』奥村敦史監修　らいてう研究会編集、ドメス出版、二〇一一
『平塚らいてう――孫が語る素顔』奥村直史、平凡社新書、二〇一一
「らいてうの夢、一枝さんの夢――思いつくままに」『平塚らいてうの会紀要』五号、奥村直史、二〇一二

（記録　奥田利子）

＊本稿は青鞜創刊一〇〇年記念講演会・静岡女性史研究会創立三五周年（二〇一二年三月二四日）記念講演録を加筆修正したものです。

第二章　ライフヒストリー



海野厚の「せいくらべ」歌碑（静岡市駿河区、西豊田小学校）

戦前・戦後・八九年を生きて

小長谷　澄子（こながや　すみこ）一九二三（大正一二）年生まれ　静岡市葵区在住

聞き書き　勝又　千代子

小長谷澄子さん

父と母のこと

私の父純一（岡部町出身）と母きく（丸子出身）はお互い再婚同士でした。母の先夫は静岡で代書屋をやっていて裁判所にも出入りし、女中もいて裕福な暮らしであったようです。夫婦仲もよかったのですが長い間子供ができず、好き合って結婚した夫が夜中に女中部屋に通うようになり、母はそれを許せず心残りがあったようですが、家を出てしまいました。

母の弟が金座町で「梅月」という菓子屋をやっていたので、そこに身を寄せ手伝っているとき、父と知り合い結婚しました。父は、銀行員で中国の大連に勤務

していましたが、一時帰国しているとき母との再婚話が決まり、結婚して海を渡り新婚生活を始めました。

一九二三（大正一二）年六月二七日、私は生まれました。父母がともに四二歳の時で、当時（四二の二つ子）は縁起が悪いと言われていて、一度子供を捨てるといいという習慣がありました。そこで一時隣の家に預け、そこの人が「ほれこんないい子を授かった」と言って連れてきてくれたそうです。

高齢のうえ初産であったのでなかなか生まれず、一晩中苦しみ、鉗子で引っ張りやっと生まれたそうです。結婚後も父も母もお互い前の連れ合いに心が残っていたので、何かにつけわだかまりがあったようです。母の折々の話の中で聞きましたが、母がつわりで苦しんでいるとき、父は「医者に行って来い」というくらいで母に対して優しさがなく、出産のときも母をいたわる気持ちがあまりなかったようです。時折「前の暮らしの方がよかった」と口に出したり、母が裁縫の裁台を欲しいと、父に買ってもらった時も、「前の時には自分も若くて収入が少なかったから、買ってやれなかった」と言われたりしたそうです。

父は人に対する思いやりという気持ちがあまりなく、家で使っていた中国人の少年が、ある日、私の守りをしていて泣かせてしまい、父は怒ってその子を追い出してしまいました。当時、一般の日本人は中国人を馬鹿にして軽蔑していましたが、父もまた中国人を「チャンコロ」と言っていました。まじめ一方で酒は飲まず、経済の本を読むくらいの人でした。その頃の中国人は一様に貧しく汚らしくて、燃料の石炭の配達を頼むと、荷車の荷台から石炭をぽろぽろ落しながら運んでいる、それを子供たちが拾う、それを承知で運ぶ人もわざと落としながら運んでいる、という光景もよく見られました。

幼いころ　父との確執

昭和の初め、私が三、四歳位の時、父の勤め先の銀行が倒産してしまい、静岡に帰ってきました。母の話

では、一足先に澄子と二人、バイカル丸という船で神戸に着いたとのことでした。間もなく父も帰国して一家で御器屋町（現西草深町）に住みましたが、仕事もなく貧しい暮らしでした。たった一間のウナギの寝床のような細長い家で、裸電球が一つの我が家でした。

御器屋町は馬場町の裏通りにあり、私たちが住んだ家は時代劇に出てくるような長屋で、端に屋根のついた車井戸があって、女衆がそこに集まりおしゃべりをしながら煮炊きして家に持ち帰る、流しの按摩やアイスキャンデー屋が住み、皆その日暮らしの人たちばかりでした。時には夜逃げがあり表戸に斜めの貸し家札が貼られていました。

父は荷車を引いて八百屋の行商をはじめましたが、以前の仕事にこだわり、髭を剃ることができず、「髭の八百屋さん」と言われて商売には向かない人でした。母も父に付き添い私をおんぶして一軒一軒回りましたが、「おちぶれて袖に涙がかかるとき、人の心の奥ぞ知らるる」とよく言っていました。母は、後に乳母車に私をのせ、マルセル石鹸の行商を始め、細長い石鹸を相手の求める寸法に元結で切り分けて売っていました。

幼いころから父に対してのわだかまりがありました。私は蒲柳（ほりゅう）の質（弱い体質）と言われ体が弱かった事もあり、母に可愛がられ母にばかり懐くので、父としては鬱屈した思いもあったと思います。いつのことだったか、父に激しく叱られ、背中に無理に乗せられ「安倍川に捨ててくる」と言われました。「安倍川」が何のことか分かりませんでしたが父に恐れを持った原因のひとつです。

五歳ぐらいの時、父にやっと仕事が見つかりました。上桶屋町の銀行集会所の留守居役です。手形交換所も兼ねた鉄筋二階建てで、そこに付属していた二間に住むことができました。伝馬町の質屋に預けた荷物をリヤカーで請け出してきたときは、押入れの片側一杯分もあり嬉しかったことを覚えています。

貧乏な暮らしはあまり変わりなく、昭和の初めで景

気は悪く失業者は増え、押し売りの訪問は増えるばかりでした。母が用事で出かけると、父と二人でいるのが苦痛で、集会所の車寄せの広場にゴザを敷いて、ひたすら母の帰りを待ちわびていました。貧乏で毎日が精いっぱいの暮らしなのに、父のしつけは厳しく、毎晩寝るときは父母の前で、「お父さんお母さんおやすみなさい」と挨拶させられました。いろいろなことがトラウマとなり、段々と父を避けるようになっていきました。

父の先祖への誇り

父の先祖は川根の出で、岡部で作り酒屋を始めた家でした。分家でしたが昔は街道筋で繁盛していたそうです。小高い所に先祖代々の墓があり、長く続いた家柄で、祖父弥平は入り婿でした。当時、東海道はトンネルがなく宇津谷峠を越えなければならなかったので、弥平は隧道を作ろうと志太郡長とともに同志七人を集め工事を始めました。相当な出費で完成し賃取をして回収しようとしましたが、間もなく東海道線が開通して目論見が外れ、多大な借金を背負って倒産し、小長谷家は没落してしまいました。川根本町には一六世紀ころ小長谷城があったそうで、榎本武揚が由緒を書いた碑があると聞いていました。ずっと前行ってみたら小学校の入り口にその碑が立っていて驚きました。

子供のころの暮らし　戦争の道へ

一九三〇（昭和五）年、一番町小学校に入学しましたが、小さい時から体が弱く両親には心配をかけました。四年生の八月、当時、大岩の臨済寺で花火大会があり、それを二階のベランダから見た翌日、脳膜炎になってしまいました。落合医院にかかりましたがよくならず、違う医者にと言っても父は聞き入れないので、金座町の叔父が「親類からの見舞い医者」として、松岡病院の院長に往診を頼んでくれました。見舞ってくれた院長に「たちの悪い脳膜炎で、頭を氷で囲って

冷やさなければ駄目だ」と言われました。脊髄から水を抜いたが茶碗一杯あったといいます。回復が遅く一〇月まで休みました。母は一人娘の命の瀬戸際に必死で安立寺の鬼子母神様に、三年間、お茶とタバコ断ちの願をかけて祈ってくれました。二学期が始まり一一月に登校しましたが、勉強が遅れてしまい、父に対して余計に距離感を持つようになりました。

病後、家で休んでいるとき、ねだって『母いずこ』（母を訪ねて三千里）という本を買ってもらいました。毎月取っていた講談社から出版されていた『幼年クラブ』に連載されていたのを、まとめた本でした。宇野浩二が文章を書き、岡本一平の挿絵で、表紙が木綿の布張りで、当時でも立派な装丁で三円六〇銭もしたと覚えています。嬉しくて何遍も読み返し、大切に大事にしていました。

二年生のとき（一九三一年）満州事変がはじまり、日本は軍国主義の道を加速化していきました。小学校も軍国教育が浸透し、教育勅語や歴代天皇の暗記や書き取りが日常化して、会礼（朝礼）では校長先生が朗々と明治天皇の御製（天皇の作った詩歌）を朗誦しました。みな素直にそれに従っていましたが、私は何かそんな空気に違和感を感じていました。戦地の兵隊さんに慰問袋を送ったとき、新聞に載りましたが、その袋の数が送った数より多く書かれていて、小さいながらも「新聞て嘘を書くんだ」とマスコミに対して疑念を持ちました。衛生室（保健室）に行って看護婦さんに「人間は何のために生きているの。生きていてもつまらないね」と言ったことがあって、看護婦さんに「あんたそんなこと考えているの」と言われました。

今思い出すと、学校へ持っていく弁当は、六年間、おかか（鰹節の削ったもの）が上に乗っただけのおかずでした。それを当たり前と思い、周りの子どもも何も言いませんでした。弁当を持ってこられない子供もいて、学校でパンを支給していました。

若竹座の怪事件

そんな中でも母とよく若竹座（以前は小川座といい、自由民権運動家がよく演説会を開催した）へ芝居を観にいきました。東京から色々な役者が来て芝居をやり、楽しい娯楽の一つで、入場料は子供で一五銭ぐらいだったでしょうか。その若竹座で忘れられない事件がありました。「赤穂義士銘銘伝」が連続で上演され、みんな楽しみにして毎日小屋へ通いました。いよいよ最終も近くなり、芝居がはねるとき、役者が「いよいよ明日は討ち入りの日、賑々しくご来場を」と、宣伝し客を出口まで見送りました。翌日、わくわくして若竹座に行ってみたら、一座は夜逃げしてもぬけの殻、詰めかけた客もただ呆然。どうしてそうなったのか分からないままでした。

女学校時代　芽生える戦争への疑い

高学年になり進学する生徒への受験授業が始まりましたが、その頃、県全体で受験競争が激しくなり、朝も放課後も勉強勉強で、行き過ぎが問題になっていました。視学が視察に来たりして、入学試験が県の命令で筆記試験は無くなり、口頭試問のみになりました。男女二組ずつでしたが半数は受験組で競争も激しく、想定問答や教科書の丸暗記に必死でした。五年、六年生のときが一番勉強し力がつきました。そして一九三六（昭和一一）年、県立静岡高等女学校（現城北高校）に入学しました。

県立高女は、入学時には末広町にありましたが、二年の時、北安東の現在地に引っ越ししました。女学校に入った時に「なんて自由でのびのびしているんだろう」と身にしみて思いました。学校の雰囲気は小学校のようにうるさく締め付けるようなことはなくのんびりしていました。運動はテニスもバスケットも他の競技も盛んで楽しくやっていましたが、私はスポーツはあまり好きではなかったので、嫌いな授業のときは文庫本をもって学校を抜け出し、山に登って読みふけっ

ていました。

当時の女学生の髪形は、長く伸ばして後ろで二つに分け、結び目から五センチ以上なければなりません。その頃は「新しい女は髪の毛が短いもの」と思っていたので、それが嫌で家に帰るとすぐさまバサッと、ほどいていました。

勤労奉仕で、農家へお茶摘みの手伝いに行ったり、陸軍墓地の清掃や丁度県営の草薙球場が拡張工事をやっていて、その整地作業にも駆り出されました。周りはお茶畑で、引き抜いたお茶の木を片付けて、球場の地ならしをやりました。男子学生も一緒でしたが、かなりきつい作業で、学生たちの奉仕で出来たようなものだったと思います。一年を通じて皇室関係の行事が多く、元日に始まり、紀元節、天長節、明治節と学校での式典も頻繁でした。校庭の横の道路には三十四連隊の兵隊が行進してきて、よく小休止して休んでいました。

一九三七（昭和一二）年の南京陥落の提灯行列、日獨伊の三国同盟、ヒットラーユーゲントの訪問やドイツ映画の上映など、段々と軍事色は強くなっていきました。新聞やラジオでは皇軍の赫々たる戦果ばかり報道されていて、大東亜共栄圏、正義の戦争、膺懲（ようちょう）（打撃を与え懲らしめる）支那とうたっていました。しかし私はそれらを心からは信じられませんでした。

三年生の時、旧満州国から帰国した友人から、「日本は良いことばかり言っているけど、中国の人は日本人にひどいことをされて、とても恨んでいる」という話を聞きました。報道の陰で沢山の人が虐げられ苦しんでいるんだろうと、漠然とだが想像しました。そういう時代の中でも、恋人が治安維持法違反で静岡刑務所に入っているという友人もいて、一緒に下校していたら、これから差し入れに行くからと言われてびっくりしたこともありました。

二年生まで同じ授業で三年になると英語科と商業科とに分かれます。自分は当然働かなければならないと思っていましたから商業科に進みました。五年で卒業

しそのあと女子師範や補習科というコースもありましたが、上に行く余裕などなかったからです。

卒業前、先生に相談したら教員の資格を取るまで、助教として勤める道があるということを聞き、三か月の講習を受け、試験検定の上、助教員の資格を取りました。一九四一（昭和一六）年三月三一日のことです。しかし辞令を見たら代用教員と書いてありました。

静岡大火でほとんどの街なみが燃える

卒業の前年、一九四〇（昭和一五）年一月一五日、この年は日本ができてから「紀元二六〇〇年」ということで、新年から国中を上げてお祝い気分で華やいでいました。一五日は小正月で女正月でもありのんびりとしていました。そのなかで静岡大火が発生しました。

新富町から出た火は折からの強風で、あちこちに飛び火して一五時間も燃え続け、中心街を総なめにして駅南まで飛び火しました。五一〇六戸が焼失し、街中は荷物をかついで避難する人、子供づれやリヤカーや大八車を引いて走る人、消防隊とごったがえしていました。

私たちは当時二番町に住んでいましたが、呉服町の方に火が燃え広がったというので、叔父の家があり心配なので見に行きました。一面の火の海で近づけず、御用邸（現葵区市役所となり）の方に行ってみると、大勢の人が塀越しに荷物をポンポン中へ投げ入れているのです。御用邸ならどんなことがあろうと守られるだろうと皆思ったのでしょう。周りは焼けましたが御用邸は焼け残りました。後であの荷物はどうなったのだろうと考えたりしました。

自分の家も駄目だろうと帰ってみたら焼け残っていて、大多数の人たちが一月の寒空の下で震えあがっている中で幸運でした。全国からも「大火見舞い」として色々な品物が送られてきました。焼け出された呉服町の叔父たちとしばらく同居しました。街中の人たちはその五年後、また静岡大空襲で大被害を受けることになるのでした。

教師となって　差別にびっくり

伝馬町小学校に就職が決まったとき、まだ一七才でお下げ髪だったので、校長先生に「そのお下げを何とかしなくては」と言われパーマをかけました。六月に一度退職し、国民学校職員修練講習会を受け、検定に合格して訓導になることができ、給料も二八円から三六円に増えました。

しかし同時期に奉職した男性教員と、女性教員との扱いが全然違うのには驚きました。いい小娘が来たとばかり、お茶出しから男性教師の体操着の洗濯など、あたり前のようにやらされました。宿直室で生乾きのものにアイロンをかけていると、男性は寝転びながら下からじろじろと眺め、時には「もっと可愛い娘が入ってくればいいのに」とか言われたこともありました。

伝馬町小学校の受持ち学級には朝鮮人の子供が五、六人いて皆日本名を名乗っていました。親はゴミクズ拾いとか、肥え汲みとか日本人が嫌がる仕事をやっていましたが、教育にはとても熱心で日本人に負けたくないという気持ちが強かったです。周りの日本人は朝鮮の人を馬鹿にしていましたが、敗戦になったら手のひらを返したように態度が変わり、面と向かって「日本負けたろう」とやっつけられました。

日本人は世界一優秀な民族で、中国人や朝鮮人は劣等民族と教えられていましたから、差別やいじめは当たり前のことでした。戦後大分たってからツアーで韓国へ行ったことがありましたが、一行の中には戦中の差別意識をそのまま持った人たちがいて、とても嫌な気分を味わいました。

大東亜戦争という戦争
戦時下教えることの苦しみ

一九四一（昭和一六）年一二月八日、アメリカとの戦争が始まりました。大本営の赫々たる戦果の発表を聞きながら、その日の日記の中に「私はこの中で割り

切れない気持ちに悩まされている。解決のつかない虚無的な私の心に、日本人の血が沸くのを感じる。どっちつかずの宙ぶらりんの私。（略）いっそ弾雨の真っただ中に飛び込んでいきたい。何日も何日も続く行軍に意識の無くなるまで自分の体を苦しめてみたい。それで澄み切った心が得られるなら。それで一つの動かない信念がつかめるなら（後略）」と揺れ動く心境が書いてあります。一三日、この戦争を「大東亜戦争」と呼ぶことになりました。

教室の正面には二重橋の写真が掲げてあり、朝夕にそれに向かって「海ゆかば」の歌を歌い、教師たちには銃の射撃訓練が行われ、大谷の射撃場に連れて行かれ、一人五発の射撃訓練もさせられました。

女学校のときから、今の戦争や中国や南方の人たちのことなど、情報も少なかったのですが、何となく疑問を持っていました。日本の誕生の天孫降臨とか天の岩戸の話、八咫（やた）の鴉（からす）などは、神話で本当の歴史ではないとわかっていましたから、歴史や地理を教えることが苦痛でした。それを子供たちに本当のことと言えませんでした。「八紘一宇」という言葉があり、全世界が一家のように睦みあう、そのための聖戦と言われ、自分でもそれを信じようとしても信じられないで、悶々とした中で悩んでいました。敗戦までの四年間苦しみました。

学校生活も軍隊式のやり方が取り入れられ、体操は裸足、組単位で毎日必勝祈願の軍人社への参拝、警報が鳴ると直ちに校舎の下に入り耳を塞ぎ、口を開けて地面に伏せるという訓練を欠かしませんでした。子供たちが職員室に出入りするとき、高学年は、兵隊のように「何年何組、誰だれが入ります」と軍隊調でした。

当直もそのころになると女性にも当番が回ってきて、男性一名女性二名と小使いさん（用務員）の四人態勢でやりました。当直の最重要の仕事は、空襲のとき奉安殿に安置してある天皇、皇后の写真を守って逃げることでした

疑問に思った一つには食べ物のことでした。衣食住

はひっ迫し、特にお米は一人一日二合三勺の配給で、今ならそれでも十分ですが、当時はお米だけでお腹を充たし他のものはなかったから、いつでも空腹でした。満員列車に乗ってヤミの買い出しに行っても、取り締まりが厳しく見つかり次第すべて没収される。取り上げた人たちは一体どう食べているのか。一九四五年二月二五日の日記に、「買い出しを追っかけまわるおじさん方、一体あなた方のお宅はどうしてやっているのですか。二合三勺に満たぬ主食、一日一本あるかないかの葱、これだけでやっていける秘訣があれば教えてください」と屈辱と怒りをぶっつけています。列車への機銃掃射と取り締まりに怯え、必死に家にたどり着いた日の日記です。生きるために買い出しはどうしても必要でしたが、教師としてはやってはいけないことであり非国民です。

せめて子供たちに戦争に関係のない時間をと、昼休みの前の時間に「母いずこ」(原作　エドモンド・アミーチス)を読んで聞かせました。マルコ少年がイタリアのジェノバから、アルゼンチンへ出稼ぎに行った母を探す物語です。子供たちも楽しみにしていましたがある日盗まれてしまいました。ずっと大事に取っておいた思い出の本であったから本当に残念でした。盗まれた本の中に「霧社事件」(一九三〇〈昭和五〉年、台中州能高郡霧社〈現南投県仁愛郷〉で起こった台湾原住民による日本統治時代後期の、最大の抗日暴動事件)の物語もありました。小学校四年の時でしたが、なんて可哀そうなと思う非常に印象に残る物語でした。戦争については子供たちに戦争の悲惨さだけを教えたと思いますが、矛盾に苦しみ生きることが苦しいと思う日々でした。

男には分からない女の気持ち、悩み

勤め始めて二〇歳のころは日本は戦争一色となりました。その頃痛切に思ったことがありました。「紅(口紅)をつけたい!」。生活用品は欠乏し食料も遅配して、皆ギスギスに痩せて薄汚く顔色は悪く病人のよう

でした。そういう中で紅をつけたいという気持ちは一層強くなっていきました。女たちが紅をつけたいと思うのは、男たちに見せるため、よく思われたいという気持ちではない、自分自身のモチベーションを高めたいためにつけたいのだ、しかし男たちは自分たちに見せたいのだと思い込み、ふしだらな考えだ、白粉ならいいが紅はならんということでした。でも白粉は若い肌には要らない、紅をつけてみたいという強い願望がいつもありました。

もう一つの悩みは生理のことでした。何よりも困ったことで、綿花は無いし木綿でなければ吸収しないから、いろんな布地やボロ布までかき集めて使っていました。丁度その頃、父が銀行の書記兼留守居を辞めた後、脱脂綿の会社に勤めていてそこから少し持ってきてくれたのを、惜しがって大事に大事に使いすごく助かりました。T字帯というのを作りその上にあてがい、ズロースをはくだけだったので、粗相のないよう気を遣い緊張の日々でした。

娘が一番町国民小学校の先生だった人の母親から聞いた話で、静岡大空襲の夜、一番町小の生徒の犠牲者は八〇人を超すとも言われましたが、大勢の人が学校へ避難してきて、一斉に学校のプールに飛び込みました。その方の娘さんはプールまで来たが入らずにそのまま裏門から出て行き、（そこまで見た人がいた）それきり帰らず消息不明になってしまったそうです。お母さんは「娘は生理だったらしく、プールに入るのをためらったのではないか」と言われたそうです。

鬱屈し悩みながらの日々の原因は父の存在もあった。父は為政者の指導をそのまま信じ、戦争遂行に何の疑問も持っていませんでした。家庭内の父権は絶対で、口答えひとつ許されずこの父の権力と国の権力の二重の圧力に、疑問と反発をつのらせていきました。

静岡大空襲　命がけの避難

一九四五（昭和二〇）年六月二〇日未明、静岡はアメリカ軍のB29爆撃機一二三機による大空襲を受けま

した。前年一一月頃より小規模の爆撃は再三ありましたが、この夜の空襲は最大規模の空襲でした。

日記にその夜のことについて、

「油くさい風であった。砂と火の混じった風のうずであった。最後まで家を守ると動かなかった父を、母と二人で無理やりに引っぱって、いましも火に包まれようとする家をあとに私たちは逃げた。しかしすでに行く手は火の海であった。二番町の私の家から昭和通りの広い道へ出ていく角に、小さな銀行があった。逃げ遅れた人々は、めくるめくような火の明るさに取り囲まれて進みもならず、その銀行の前あたりで右往左往するばかりであった。

鼻の穴も、のどの奥も、まぶたの裏のわずかな湿りまでからからに乾上り、火の風に叩きつけられて、私は道路沿いの無蓋の防空壕にころげ落ちた。あおむけになった顔の上を炎が舞った。なぐりつけられたような衝撃であった。ふだんから意識の底にいつもあった死……それは戦いの進むにつれて積極的に『死にたい』という思いに変わっていったが、その死がいま大手を広げて私の目の前にあった。『ここにこうしていれば死ねる』との思いと、こんなにあっけなく死んでいいのか、様々な疑問の答えも出ていないのに終わっていいのか……と頭をよぎった。そして生きてもっと考えたい」

必死の思いで父母と逃げ延びました。B29の一機が撃墜され二つに分かれて墜落するのが見えた。数日後、勤め先に通う途中、安西の「魚長」のあたりに片方の残骸がそのままありました。機体の下からアメリカ兵の死体がのぞいていましたが、空襲に打ちのめされて思考が止まってしまった頭では、なんの感情もわきませんでした。

可愛がってくれた父方の伯父一家五人も犠牲になってしまいました。空襲の晩に勤務先の宿直であった為、一人生き残った従兄が自宅の前の防空壕で家族を焼きました。市の「埋火葬認許証交付簿」には載っていません。安倍川の河原で焼かれた、数知れない死体

もモノとして処理されてしまったのです。

思考が止まった頭の中では死体があちこちにごろごろ転がっているのを目の前に見ても、段々と何とも思わなくなってしまうのです。焼け焦げた死体が抱えるようにしていたのは、お米でした。

伝馬町小学校は外側は焼け残ったので、講堂は避難者であふれかえっていました。校庭に一人よちよち歩きの幼子がさまよっていた。それが後年、なんと松坂屋の展示会の時、「私がその子です」と尋ねてきてくれて驚きました。親を亡くした子、子を亡くした親、いっぱいいましたが幸運なめぐりあわせで、幸せな様子を見てこういう事実も有ったと感慨無量でした。

空襲で焼け出され親子三人、山崎新田の親類の農家の納屋に住まわせてもらいました。わらが積んである小屋で、市に出した罹災証明で敷き布団を三枚もらいました。その後、大岩宮下町の親戚に間借りしていたとき戦争は終わりました。

八月一五日を迎えて　混乱のさなかで

天皇の終戦の詔勅は、職場の伝馬町小学校で職員や近所の人たちと一緒に聞きました。雑音が多くてよく分かりませんでしたが「耐えがたきを耐え、忍びがたきをしのび」という言葉はわかり、日本は負けた！と思いました。男の人が「シュクッ」とすすり上げ、そして皆一様に「くやしいくやしい」と言い、町内の人たちもそう言いながら散っていきました。

私は心の中で「ざまあ見ろ、私が勝った！」という思いがこみ上げ、声を上げたかったが飲み込みました。口に出したら非国民と言われるのが分かっていたから言えませんでした。しかし驚いたことは、今まで「必勝の大道を共に戦い抜かん」とか「撃ちてし止まむ」とかと最後まで国民を鼓舞していた新聞も指導者も、この大転換をあっさりと受け入れてしまったことでした。戦中、丁度、袋の中に閉じ込められてその中で必死にもがき苦しみ悩み、出るときは死ぬ時と覚悟

を決めていた自分は、置いてきぼりを食ったような気持ちでした。

二学期は始まりましたが空襲、敗戦と続き混乱のさなかでした。学校の外側は残りましたが中に火が入り、直ぐには授業は再開できず分散授業です。児童の出入りも激しく実態もつかめません。焼け残った机、腰掛をかき集め、二つ並べて三人かけさせ、一クラスが八〇余人に膨れ上がったときもありました。

校長先生は「民主主義とは」に、「人に迷惑をかけないこと」と言われました。まず教科書の不適切な個所への墨塗りから始まりました。私は何の抵抗もなく受け入れむしろ良かったと思いました。これで日本はいい国になる、世の中全体が平和になる、この平和を失いたくないと、強く強く思いました。戦中はアメリカを鬼畜と言い、戦後も敵愾心を持っていた人たちも一杯いました。確かに米兵による強姦事件や乱暴な振る舞いもあり、自分も米兵に追いかけられて怖い思いをしましたが、日本の男に比べれば優しいしそれほど憎めませんでした。

各学年ではガリ版刷りのカリキュラム、ガイダンスをつくり、ごっこ遊び（買い物ごっこ）「生活学習」「施設見学」など、今でいう総合学習的な授業から始めました。学年ごとに教師が集まり、「新しい教育とは」を手探りで研究、学習しました。教師たちは、無からの出発でしたが、熱心に情熱的に取り組みました。翌年四月、「新聞紙を折ったような」仮綴じの教科書が配られ、その翌年、国民学校用国定教科書「くにのあゆみ」上下が編纂され、学校名も戦中に改名された「国民学校」から普通の小学校になりました。

教育改革の波　一変した内容に

静岡大空襲で、国民学校三二校のうち一二校が焼失し、九月に新学期が始まりましたが、中心部の城内、城内東、城内西小学校などは机も椅子もなく、堤の木陰での授業でした。焼けた学校は焼けない学校に間借りして二部授業を行い、三菱や住友の行員寮や工場を

借りたり、お寺の本堂で寺子屋のような授業もしました。城内東、西小学校はその後廃校となり駒形、三番町小は一九四九年に再開されました。

（注）アメリカ軍の日本占領は、八月二八日、厚木飛行場に第一〇空挺師団が、先遣部隊として進駐し、二九日、マッカーサーがコーンパイプをくわえて飛行機から下りてきました。静岡には一一月六日、占領軍が進駐してきました。

九月二〇日、文部省は「終戦にともなう教科書取扱いに関する件」の通牒をだし、軍国主義、国家主義、国家神道に関する教材が一斉に削除され、一〇月には、GHQより「戦後の五大改革」の指令があり、その中には婦人の解放、学校教育の自由化も盛り込まれ、一二月には修身、国史、地理の教科が廃止されました。

静岡県も堀田知事が各地で校長会を開き、戦後の新教育方針の確立のため、「軍国主義、国家主義の一掃、民主主義の涵養、画一主義の打破」など占領政策を徹底するよう指導しました。それにともない教職員の適格審査が行われ、四六年二月から翌年三月まで、静岡県では一四、五二六名の審査の結果、一六九名が軍国主義教員として追放されました。子供たちの教科書の墨塗りが始められ、新しいカリキュラムが次々に出され、教員は一気に頭を切り替え新方針を消化実行せねばなりませんでした。四七年三月、「教育基本法、学校教育法」が制定、六、三、三制の教育制度が確立しました。

戦後の暮らし　生きるのがやっとの生活

私たちは、山崎新田の農家の納屋から、大岩宮下町の親類の家の玄関わきの六畳間に引っ越しすることができました。現在の家に落ち着くまで六回の転居を繰り返し落ち着く間もありませんでした。戦後の食糧難は、戦中の統制が無くなり一層深刻な状態になり配給も滞り、南瓜の種から、いもの茎、道ばたの雑草まで食べ尽くしました。弁当を持ってこられない児童も多く、闇の買い出しで休む子もいました。

物価は高騰し餓死者も大勢出ました。給料も四五年一二月の時は五〇円でしたが、一年後は四二〇円に跳ね上がりました。しかし父が仕事を失い、私一人の収入で一家を支えていかねばならなかったので、どんな

に切りつめても満足な食事もできませんでした。

インフレが進行し、政府は四六年二月、預金封鎖と新円切り替えを強行、一人一〇〇円だけ旧紙幣を新紙幣に交換しあとは全額預金ということになりました。生活資金は、世帯主に三〇〇円、家族一〇〇円に制限し、給料その他は五〇〇円を新円で支払い、あとは全額封鎖されてしまいました。

静岡駅前、七間町には瞬く間にヤミ市が出現し、いかがわしい食品や、メチールアルコールで失明したり死んだりする人も出ましたが、日常の生活用品や食料も売買されていました。家にあるなけなしの品物を並べる人、旧軍隊に貯蔵されていた軍需物資が、敗戦のどさくさの中で一部の関係者によって、中にはトラックで運び出されたらしい品物が、ヤミ市に流され売られていました。進駐軍のたばこ、缶詰、チョコレート、ガムなど、久しく日本人が飢えていたものも並んで、買えないまでもせめて見てみようと人だかりでした。

焼け跡の七間町には映画館やストリップ小屋がたちまち出現し、好奇心に駆られて同僚教師と見に行ったことがありました。小屋の中は舞台裏の便所から漏れ出す悪臭や、男たちの体臭でむんむんとむせ返っていました。映画やはやり出したダンスホールにも行って踊ったこともありました。

二年続きの凶作、働き手を軍隊に取られ荒廃した田畑、外地からの復員兵や引揚者がどっと増え、ベビーブームの現象も生まれ、多くの人は何が何やら分からないまま、自分の才覚で生き延びるしかなかった時代でした。汽車の窓ガラスは無く、そこから出入りしてヤミの買い出しに行き、米七合（一キロ）二〇円～四〇円、芋一貫目（四キロ）五円～一〇円。背広三つ揃いと米一斗（一五キロ）等、物々交換のタケノコ生活でした。押し出されそうな満員列車で農村にたどり着き、焼け残った品物で泣きつかんばかりに頼み込んで、やっと少しばかりの食べ物を家族のために手に入れ、汽車に乗り、やれやれと思ったら、摘発で根こそぎ没収される、という切ない苦しい日々を過ごしてい

ました。

有東寮に住む　すさまじい毎日

一九四六年は元日に発せられた天皇の〝人間宣言〟によって始まりました。現人神として神格化し神話を歴史とした今までを否定し、「朕は神に非ず人間である」との改めての宣言でした。連合国や国内にあった天皇の戦争責任追及をかわす狙いでもあったと思います。

私たちの三度目の引っ越し先は、曙町にあった旧三菱の焼け残った軍需工場の行員寮（有東寮）でした。今は人家が立て込んでいますが、当時は町はずれの農村地帯で、工場は空襲で跡形もなく爆弾の巨大な穴があちこちに残っていました。

にわか普請の粗末な二階建ての木造アパートの、日の当たらない北側の一〇畳の部屋が親子三人の住み家となりました。暑い最中の八月、有東寮には引揚者や焼け出された人たちが住み、食事の支度も洗濯も風呂トイレも共同で、うっかり流しにしゃもじでも置いておくと、取りに行ったときはもう無いという日々でした。走り回る子供、裸姿の女たちの子供を怒鳴り散らす声、人のわめく声、ばくちの手入れの大騒動、近くにあった朝鮮人部落（天神の森）と言われていた男たちとの連日の大喧嘩、あまりのすさまじさに母が寝込んでしまい、私も倒れてしまいました。父も心身ともに病んで寝たり起きたりの日々で頼りにはなりませんでした。

私一人の給料では暮らしが立たず、母が敷地内の露天ではじめ文房具を売りましたが荒れた環境の中では買う人も無く、駄菓子屋を始めました。わずかの商品を並べその日の売り上げで翌日分を仕入れるという状態で、番町の問屋に毎日仕入れにいき、一〇キロ近い道を往復する日々でした。六〇歳を超えた母にはかなりの重労働で、「歩きながら眠ってしまったよ」とよく言っていました。

虱は衣服の縫い目にびっしりと入り込み、熱湯に漬

けても煮ても、翌日には縫い目に一列に並んでいます。親は子供の面倒を見る余裕もなく、子供たちは窓から出入りして終日遊びまわり、学校へも行かない子が多かったです。朝、その子たちを集めて引率して学校へ送り、休みにはお話や本の読み聞かせをしたり、何とかしなくてはと一生懸命面倒を見ました。

婦人参政権　憲法公布
やりたいことができる

一九四五年一二月、婦人参政権法案が公布され、翌年四月一〇日、総選挙が行われることになりました。一一月には治安維持法が廃止され、政治結社の自由を得て、共産党も合法政党になり立候補者が出ました。空襲の瓦礫も片付かない町の辻つじに、候補者が立ち演説をして黒山の人だかりでした。

私は初めて手に入れた選挙権というものに強い関心を持ちました。中心街の辻で行われた初の女性候補、山崎（藤原）道子の演説を聴きに行きました。びっしりと周りを取り囲んだ人々は熱気にあふれ、彼女の演説は期待にたがわず、しっかりと地についた話し方で共感しました。当時は、立会演説会といって、各党の候補者が各地域の小学校の講堂等で集まった人たちに演説するというやり方があって、頻繁に行われていました。私も同僚たちとそろってあちこちと聞きにいきました。

翌年、四月一〇日、第二二回衆議院選挙が実施され、戦後初の総選挙で、女性たちの戦前からの、「婦人参政権獲得を」という運動がやっと実現した、歴史的な選挙でした。期待に胸高まらせ心して投票所へ行った人もいましたが、まだ復興もままならず、その日の食べ物に追われて、選挙どころではない人も多かったのではと思います。山崎道子は全国最高点の一九万票余を獲得し、同時に女性代議士が三九名当選しました。

（注）憲法改正問題は敗戦の一ヶ月半後には始まっていま

した。日本側が出した草案は明治憲法とあまり変わらず、日本の民主化を望んでいた総司令部の案とはかけ離れていました。一般からの草案も出され、種々の論議の上「基本的人権、国民主権、恒久平和」を盛り込んだ現行憲法が一九四七年五月三日に施行されました。

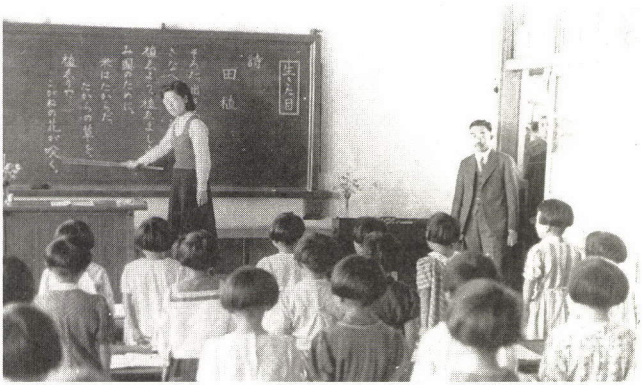
労働組合も総司令部の奨励もあり、県の教職員組合も四六年六月には発足しました。戦後、怒涛のように押し寄せた民主化の波で、あらゆる産業の中に労働組合が生まれ、私も青年部の一人として、静教組伝馬町小の分会副部長として積極的に組合活動に参加していきました。

文化活動も、歌声運動、演劇活動、青年団等が盛んになり、静岡にも合唱団や劇団がいくつも誕生しました。大岩宮下町にいたとき、その一つの「新樹座」に誘われて入座しました。芝居の経験はありませんでしたが何回か舞台に立ち、演ずる喜びと一つのものを皆で創り出す感動で生きがいを感じていました。演劇活動をする中で、仲間の人たちから様々なことを学びました。思想的なこと、世の中を見る目、考え方、生き方、その後の人生にも忘れがたい思い出として強く影響されました。心を通わす人もありましたが実らないままに終わりました。新樹座は革新的な新劇運動をめざしイデオロギー色も濃く、活動していく中で団員も考え方も変化していき、二年半ほどで解散してしまいました。

天皇巡幸を迎えたとき　六月一九日

四六年に入ると、学校では挙げて「コアカリキュラム」や「ガイダンス」などの研究に取り組み、新しい教育方法の模索が始まっていました。私は学籍事務や文化部の仕事が与えられ、父兄会や六月に迫った天皇巡幸の準備に追われていました。また子供たちに少しでも栄養をと、戦中、家庭から供出された金属類が、校庭に山のように積み上げられていたのを片付け、石のように固い地面を掘り起こしてサツマイモの苗を植え、みそ汁給食を子供たちに飲ませました。

天皇の巡幸はこの年の二月から、翌年の一二月まで全国各地に行われました。戦争遂行の最高指導者としての天皇の戦争責任を問う声をかわし、天皇を利用して占領政策を成功させたいという、アメリカの意向の一つでもありました。鉄筋校舎で外壁が残り復興が早かった伝馬町小学校が選ばれました。校長室に金屏風や松の盆栽を借りて「御座所」を作り、前日の日曜日も子供たちを登校させて、清掃や準備万端整えてお待ちしました。



天皇巡幸、伝馬町小学校での授業風景視察（1946年6月19日）

天皇を迎える私の気持ちは複雑でした。成長の過程では天皇は命をも捧げる存在であったし、天皇の名のもとに戦場に征き、天皇のために人を殺し、女子供まで殺されなければならなかった兵士たちに対して、天皇は自分の責任をどのように考えているのか、どんな思いで国民の前に立たれるのか、天皇に一言でもいい聞いてみたい、物を言いたいという強い思いが、胸の奥でどろどろに燃えさかっていました。

当日、教室にはMP、随行員、報道関係者がぎっしりと詰めかけ、カメラの音やフラッシュで、私は頭が真っ白になっていました。授業は詩の勉強で、「そろた出そろた早苗がそろた」を子供たちに読ませていました。後ろから入ってくるものとばかり思い覚悟を決めていましたが、天皇は前から入り私の後ろで授業を見ていたのを気が付きませんでした。人がゾロゾロと動きだしはっと気が付いたときは、もう天皇は廊下を

遠ざかっていきました。高ぶった気持ちががっくりと抜けていくのが分かりました。

しかし胸のどろどろは抑えきれず、翌朝、切羽詰まった気持ちでせめてお顔だけでもと静岡駅に向かいました。はるか遠くでMPに囲まれ無表情の天皇はまるで人形のよう。それを見て一瞬目が潤みました。満州国皇帝「溥儀」は傀儡というが、天皇もまた傀儡ではないか……。散っていく人々に交って急速に気持ちが萎え、ただ澱のようなものが胸の奥にずーんと沈んでいきました。

その日、校庭で体操をしていた生徒にも天皇は話しかけました。「家は丸焼けになりました」との生徒の答えを侍従が伝えると、天皇は「あっそう」と答えたそうです。この天皇の「あっそう」は当分の間、日本中ではやりました。天皇は一般人との会話の経験が無いせいか、どの返事も「あっそう」でした。

――同じ日、市原正恵さんも伝馬町小学校に在籍していて、算数の授業を天皇が視察されました。手の届くほどの近くで、先生の質問に事前に教えられていた通りに答えたといいます。金屏風や松の盆栽は、正恵さんの伯母の家から借りられたと、「あの頃……激動の時代（後述）」に書かれています――

2・1スト　占領軍の命令で中止に

（注）戦後の混乱は続き、戦中出征した男性や外地にいた人たちがどっと帰国して仕事に入り、女性の職場が奪われていき、各労働組合には首切り反対や、賃上げ闘争、ストライキが全国的に沸き起こっていった。しかし官公労働者の賃金水準は低いままにおさえられ、民間との格差が広がっていった。官公労組合は「全官公庁共同闘争委員会」を結成。越年資金要求、最低賃金の確立、不当馘首の反対等さまざまの要求を出した。運動は急速に高まり広がって民間を含む「全国労働組合共同闘争委員会」が組織され、政府に要求を出した。吉田茂首相はインフレや経済危機の責任を、労働者に転嫁し「不逞の輩」と罵倒した。拡大闘争委員会は、ついに一九四七年二月一日を期してゼネラルストライキに入ることを宣言した

県教組でもたびたび闘争委員会が開かれ、焼け残った学校に県下から小中学校の教職員組合の分会の代表者が集まり、熱い討議が続きました。青年部も参加したし校長たちも参加しました。立錐の余地もなく座り込んだ中から、「断固決行」「教育者としてストに反対」という違う意見、夜中の一二時過ぎても終わらず、会場を出てからも熱い議論は続き、何回も何回も話し合いは繰り返され、素晴らしい人たちの存在も知りました。

しかし占領下にあった日本にとって、総司令部の威力は厚く、一月三一日午後四時五三分、突如、マッカーサーはゼネスト中止命令のラジオ放送をしました。伊井弥四郎共闘議長は総司令部に出頭命令を受け、大勢に取り囲まれて、ゼネスト中止放送をすることを命令され、三一日午後九時二一分、NHKから井伊議長の無念の声涙の中止放送が流されました。占領軍を「解放軍」として規定していた共闘側の甘さであり、経済要求から政治闘争へと傾いていったことへの警戒でもありました。

二月一日の朝、八幡の踏切で、止まるはずだった列車が目の前をいつものように通過していくのを、私は感無量の思いで見上げていました。

父の蒸発　失踪

一九四七（昭和二二）年の冬、有東寮の管理者から「一〇畳の部屋に三人住まいでは、余裕があるから、もう一所帯入れてほしい」と言われました。今まで他の部屋に比べれば破格の広さではありましたが、暗澹とした気持ちになりました。

父は痔の病が悪化し手術もままならず、這うようにしてトイレに行き、寝たり起きたりの日々でしたが、他人との同居に耐えられなかったのでしょう。明日から同居という前日の一二月一〇日、母の仕入れに同行しましたが、途中で自分から「こっちの道へ行く」と別な方向へ行ったきり帰ってきませんでした。翌日から木枯らしの吹く荒れた天気が続き、母は行き倒れや

水死人の報があると、その度に警察へかけつけました。岡部の先祖の墓の前で自死しているかも、と見に行ったりしましたが、父の行方はとうとう分からずじまいでした。当時「蒸発」という言葉があり、人の生死や行方不明は日常のことであったのです。

父は人一倍気位が高く、自尊心が強い人だったから、戦災、敗戦の急激な変化に心身ともに傷つき、その上、他人との同居という事態に限界を超えた苦しみがあったと思います。幼い時から父は鬱陶しい存在で、親しく話し合うこともありませんでしたが、こうして終わりました。でも自宅のウォシュレットの便座に腰を下ろすたびに、必ず父親のことを思います。

結婚　働きつづけて

一九五一（昭和二六）年、二九歳で結婚しました。戦中、親しかった男性もいてお互い行き来して好意を持っていましたが、一人息子であったし出征してしまい、何となく終わってしまいました。その後も演劇活動や組合運動などで愛する人もあったし、世話してくれる人もいましたが、一人娘で母親付きというと話が進まず、婿に入るという考え方はまだ少数でした。いいという人にはそれなりの何かがあったり、仕事にも夢中になっていて、年齢を重ねていきました。城東町の住宅に入ることができ、やっと一軒家に入れたと解放感を味わった一九五〇年、横内小学校に転勤。翌年縁があり結婚しました。一人娘であったので夫は小長谷家に入ってくれました。

夫の実家は長野県の松本の旧家で、先祖は代々松本城の槍の指南役の家柄でした。夫の父は、戦中、台湾総督府の役人で戦後引き揚げてきた人でしたが、帰国しても生活がなりたたず、私との結婚前、夫には妻子がありましたが、単身東京に出て出版社に勤めていました。しかし事情があり、妻は息子を置いて実家に帰ってしまい、息子は夫の姉が面倒を見ていましたが、頭が良く勉強ができたので望まれて他家に養子として貰われていきました。息子は後年、私とは行き来して親

しい付き合いがありましたが、父に捨てられたという思いが抜けず父（澄子の夫）を許しませんでした。

夫は製薬会社の営業をやっていましたが、男にも女にも親切で母にも優しく、よく自転車の後ろに母を乗せてあちこちと連れていってくれました。酒とたばこを愛し世話好きで人に好かれるタイプの人でしたから、女性にもて気をもんだことも何度かありました。一九五四年、長男、五八年、長女が生まれました。

保育所もない中で、鍵っ子だった子育て

一九五九年、西奈小学校に転勤。母とずっと同居で二人の子供たちの面倒を見てもらっていましたが、高齢となり大変になったので、安部奥まで子守りを探しに行って雇いました。未だ少女なので可愛がり、体のためにと牛乳を取ってやったりしました。当時はまだ保育園も十分ではなかったので、学校に子どもを連れてきてもらい、用務員室の脇の小部屋でこっそりお乳を飲ませたり、下の子のときは千代田小勤務でしたが、学校へ連れてきて教壇の横に座らせて授業したこともありました。夫も製薬会社が倒産したのちミシン会社の営業でしたので、仕事の合間に家に様子を見に来てくれました。

その頃「鍵っ子」という言葉がありましたが、共働きの子どもが首に家の鍵をぶら下げて留守番していました。うちの子どもたちも、近所の家に遊びに行ったり、友達の家で過ごしたりしていて、みんなに育てられたようなものです。その後、保育園に入ることができました。

一九七二（昭和四七）年、戝機南小の特殊学級の担任となりました。一クラス一〇人位で三クラスあり、色々な子がいて、盗みをする子、家で持て余し母親から勝手にしてくれと言われた子など、家庭訪問をして親と話し合いをしたり、口でいうより実物を使って、目に見えるように教えた方が分かるかと思い、教材を工夫して色々模索して作ったりもしました。ここで五六歳の定年となり一九七九年退職しました。

私は、若い時から政治のありよう、社会の出来事、身の回りの事例など、いつもそれが本当のことか、真実の報道かと信じ切れず、一方だけの言い分や、声高な主張には騙されまい、組するまいと考えてきました。今も同じだと思います。東北の大震災後の原発の報道の嘘と欺瞞、政治のやり方、政治家の歴史認識の希薄さ、いつも何が真実か、冷静に見つめ考えたいと思っています。

――澄子は、自分の辛い苦しい悲惨な戦争体験を決して消し去り忘れ去ることはできない、何らかの形で残したい、との思いからの活動に後半生は力を注ぎました。それが現在の「平和資料センター」へとつながっています――

平和資料館をつくるために

戦後二六年、高度成長の波に乗り、日本中がマイカー、カラーテレビの普及に湧く中、よど号事件、田子の浦ヘドロ問題、三島由紀夫の自殺など、繁栄のひずみも現れていた。戦争の記憶もかなたに押しやられ、生き延びた自分が何もしなくていいのか、目の前に見たあの事実を忘れ去っていいのか、戦争がどのような筋道で起き、どのような関わり方をさせられ、どのように殺されたか……私は苦しんでいました。

一九七一（昭和四六）年六月一四日、東豊田小学校に勤務していたとき、思い切って朝日新聞に投書したところ、掲載されました。「静岡空襲、身内五人失う」の見出しで「昭和二十年六月十九日、それは私には忘れることのできない静岡空襲の日、伯父とその家族を失った日である。（中略）伯父の死体は数日後、神社の境内でみつかった。黒こげに近く、あお向けになった腹の上には腸が小さくとぐろを巻いていた。従兄の嫁は末の子を背負い、上の二人の子どもの手をにぎって、神社の入口の防火用水の中から身を乗り出すようにして死んでいた。四人の死体の皮膚は白く、子供たちのズックに書かれた名前がしみるようにあざやかであった。従兄は勤めの宿直の留守に家族全員を失った

のである。（中略）戦後、国の異常な成長の陰に、庶民の戦争の歴史は埋もれようとしている。三月の東京大空襲と同じような全国各地の戦争の惨禍を、今、しきりに語り残したい衝動にかられる」続いて同じ朝日に「空襲の傷跡を永久に」という見出しで、「直撃の跡が残っている歩道敷石の保存を」という杉山金夫さんの投書が掲載されました。

静岡空襲、身内五人失う

静岡市　小長谷　潔子（教員　47歳）

二十六年前の昭和二十年六月十九日、それは忘れられることのできない静岡空襲の日、何今とそ下からも死体がのびて、その脚にしっかりかかられた例からはこげた姿がとぼれ散っていた。

但父の死体は蒼白浸、神社の鐘内でみつかった。愚とげに近く、あお向けになった腹の上には腸が小さくとぐろを巻いていた。祖兄の腰は夫の子を背負い、上の二人の子どもの手をにぎって、神社の入口の防空壕の中から、身を乗出すようにして死んでいた。四人の死体の皮膚は白く、ひもたちのスックに書かれた名前がしみるようにあざやかであった。祖兄は勤めの帰宅の道中に家族全員を失ったのである。

この後の死者は千百六十九人と市の戦災復興誌にはあるが、これから数日、二防空ごう及倍川の川原では身寄りの者の手で死体焼き

朝日新聞　昭和46年6月14日付朝刊

弁護士の小長井良浩さんが、自分も中学の時、空襲を体験し生き延びたと訪ねてこられました。小長井にすすめられ、七月二六日、小長井政経事務所に事務局を置いて活動を開始しました。東京でも記録を残そうと運動が始まり、静岡でも是非という声が起き、杉山金夫、鈴木康男、蒔田平八さん等が集まり、身近の人たちに呼びかけ、八月一一日「静岡市空襲を記録する会」の準備会を発足させることができました。蒔田さんは自身が編集する『母と生活』の八月号を、「母の声」として戦争体験特集としました。

記録する会として是非、記録集を刊行したいと話し合いが持たれ、自分がどうしていいか分からずまごまごしていましたが、周りのメンバーが一生懸命やってくれました。そのため市役所書庫の管理者、鈴木雄蔵に協力を求め、罹災関係の調査を始めるとともに、当時、寺社関係の当番に当たっていた感応寺の伊藤通明氏の話を聞いたり、体験者の話を集めたりと準備を開始しました。

「静岡市空襲を記録する会」発足

翌一九七二（昭和四七）年、準備会の会報をつくり、「発足にあたって」の呼びかけを各方面に発送しました。それに応え、自営業、会社員、医師、僧侶、牧師、作家、芸術家、学者、市民、また文化団体、労働組合、諸団体と、多くの人たちが参集してくれました。

一年に渡る地道な活動ののち、同年六月三日、正式に「静岡市空襲を記録する会」として発足。しかし、本格的に資料の収集をと県、市、消防署などにいっても、空襲被害に関する資料は、ほとんどありませんでした。会としては空襲体験だけでも残すことが必要と、事実の重みを戦争を知らない世代に伝えようと、「空襲展」の開催を企画しました。

七二年八月一日から六日まで、静岡松坂屋で、朝日新聞の後援を得て「静岡大空襲――総力戦争下の生と死――」を開催しました。大きな反響を呼び松坂屋のまわりをぐるりと大勢の人たちが取り巻いて行列をつくりました。一万五千人余の入場者がありました。何よりも皆から寄せられた八〇〇点余の展示品が事実の重みを伝えました。戦後二七年を過ぎ時は流れて行きましたが、戦争体験がしみ込んで捨てるに捨てられず残されていた、防空頭巾、モンペ、国民服、衣料切符、焼けた食器等々、市民が提供してくれた数々のものが、歴史の事実として共有され共感を呼びました。会場で入会のお誘いをすると大勢の人が入ってくれました。

この成功をもとに空襲体験の記録集の刊行を目ざして原稿の募集をはじめました。しかし専従できる人は一人も無く、夜間や休日に集まり準備が進められました。その間、県民会館で映画『私たちの戦争』と同時に、残された当時の写真をスライドにした『静岡空襲』（静大教授　海野福寿氏作成）の上映もしました。

一〇〇編近くの原稿が集まり編集が始まりましたが、記録集発行には多くの困難がありました。第一は財政的な問題で、どこからも援助がなく資金繰りが大

変でした。やっとのことで一九七四年六月一九日、『静岡市空襲の記録』を発行することができました。

画集『街が燃える　人が燃える』の発行

西奈小学校奉職中、子供たちの面倒を見てくれ、助けてくれた母を七六歳で見送りました。その後、「記録する会」は休止状態となっていましたが、一九八一（昭和五六）年、会を解散し、新たに「平和を考える市民の会」を結成し代表となりました。戦争が終わり三〇数年が過ぎましたが、空襲体験者にとってはその痛みを引きずっていた年月でもありました。日本国内はずっと平和でしたが、これは多くの人たちが味わった悲惨な体験が、戦争への見えない抑止力の一つでもあったことだろうと思います。

しかし「戦争を知らない子供」が大人になり、空襲は遠い昔話となっていきました。「こうだった」と話したくても見せる写真もなく、あの地獄の様子も想像する手がかりもありません。それを伝えるためにも「あの空襲を絵で語ろう」と話し合われ、再び多くの人たちに呼びかけました。

呼びかけて二年、寄せられた絵は一〇〇枚を超え、殆どは「絵を描くのは初めて」という人たちばかりでしたが「あの時を」思い起こし懸命に描いてくれました。描きたくてもどうしても絵が描けないという人もいました。

一九八四年（昭和五九）年、静岡空襲体験画展「市民が描く静岡空襲」を、パルシェ五階で開催しました。その展示会に当時の河合代悟市長が見に来られ、深い関心を寄せてくれました。河合市長も小学校四年生の時、空襲にあい、安倍川に逃げた経験があったとのこと。以前、松坂屋で開催した大空襲展に寄せられた戦時の資料や、大切な遺品等の保管場所がなく、市にお願いしても関心がなく、会員宅に預かってもらったり、一時的に葵文庫や県立図書館の地下室に置いてもらったりと困っていました。河合市長は、話を聞いて原画の保管場所として、市立図書館の地下室を許可し

てくれました。

八七枚の絵と一八人の手記とともに一九八五年六月一九日、画集『街が燃える　人が燃える』が発刊されました。私は画集に「伯父一家の死」を描きました。

平和資料センターオープン

仕事中、休暇を利用して中国へ旅行したことがありました。日本軍の侵略や残虐の様々な事実を目にし、被害のみでなく、加害の事実も伝え続けなければならないことを痛感しました。根気よく資料の掘り起こしをはじめ、体験画や資料の展示会も、折り目節目に行われその度に市民から多数の遺品や資料が寄せられました。

また活動の広がりとともに学校や町内会から、資料や原画の貸し出し依頼も増え、同時に寄託される品々も次々と溜まっていきました。置く場所にも困り、これらを確実に保管し展示する場所が、どうしても必要でした。それで一九八八(昭和六三)年一一月二七日、「静岡・平和資料館（仮称）の設立をすすめる市民の会」を作りました。私が代表となり、故加藤一夫（前静大学長）・伊藤道明（感應寺住職）・小山守一（市戦災遺族会会長、ふしみや）・三城苑子（ピアニスト）・辻宣道（草深協会牧師）さんたちが賛同者となってくれました。たちばな会館で発足総会を開き、運動を進めることを話し合いました。

一九九〇年六月一九日、静岡空襲四五周年の日、市文化会館で「静岡大空襲展」を開催。九二年、「青い目の人形展」を文化会館でと活動を続けました。市に対しても度々公共の平和資料館建設の要望を願ってきましたが、やっと暫定的にと城内にあった中央体育館の三階の一隅を、「静岡平和資料センター」として借りることができました。オープニングフェアーは「静岡大空襲五つの不思議」「若者は何故戦場へ行くのか」などをテーマに開催。五日間で千人を超える来場者がありました。しかし、そこは狭くて分かりづらく人目につかない場所で、平常は来館者も戸惑うようなとこ

ろでした。

戦後五〇周年記念展示会で怪我をして

一九九五（平成七）年六月二〇日～二五日、戦後五〇周年記念展示会「街が燃え、人が燃えたあの日」を市と共催で市役所展示室で大規模に開催しました。マスコミも取り上げかなりの入場者があり皆で喜び合いました。

メンバーたちはこの催事にはかなり準備をかけ、新聞の切り抜きやコピー、パネルの準備と忙しい日々が続きました。ある日、準備をしようと自転車で家の前の小路を出た所で、子供が細い道から飛び出してきました。子供に怪我させてはいけないと自分から倒れ腰を強打、痛みが激しかったのですが、準備を休むわけにもいかず痛みをこらえて毎日タクシーで行き、開催中も連日会場に詰めていなければならず、ズキズキ痛むのを我慢して通いました。最終日の夜も学会の青年たちが懇談したいというので話し合い、深夜に自転車を引きずりながらやっとの思いで帰宅しました。

翌日の片づけにはもう体が動きませんでした。夫はその頃、体調をくずし寝たり起きたりの日々で頼れません。医者に行くと、第一腰椎骨折の重傷で、ギブスをつけて二か月は寝て安静にしているのが良いと言われましたが、事情を察してくれ自宅で安静にということになりました。コルセットをはめトイレも這いずって行きました。その後、二〇〇五年、一二年間の夫の看病疲れもあって、第二腰椎を骨折してしまい、色々と手術をしたりしましたがはかばかしくなく、思うように動けなくなり後事を皆に託しました。今も腰痛が治らない状態が続いています。

センター　相生町へそして伝馬町へ

体育館のセンターは手狭なため広い場所をと市にも要望を出し、前小嶋市長にも直接会ってみんなの願いを何回も訴えました。その努力の結果、市より移転の助成費を受けて、一九九六（平成八）年、当分の間と

いうことで相生町中央ビル二階に移転することができました。名前も「静岡平和資料館をつくる会」と改称しました。ここは体育館に比べれば少しは広くなり、場所としても便利にはなりました。朝日新聞に投書が掲載されてから二五年の月日がたちました。市民の間にも知られるようにもなり、支える会員も徐々に増えていき、小、中、高の団体見学も学校行事の一つとして行われるようになりました。

八月には「戦争体験者の話を聞く会」も毎年行われ、空襲の様子や戦地での体験を多くの人が語ってくれるようになりました。二〇〇五年には『市民の描いた体験画集　静岡・清水大空襲と艦砲射撃』、『静岡・清水空襲の記録――二三五〇余人へのレクイエム――』（新妻博子編集）を発刊。ニュースレターやセンター便り、記録集も発行、資料や図書の貸し出しもやれるようになりました。しかし人手が足りないのが悩みの種で、開館も金、土、日しか開けられない状態が現在も続いています。

その後もセンターの充実を願い、市に陳情したり面会したりを絶え間なく訴え続け、二〇〇八年、伝馬町の中央ビル二階に移転し現在に至っています。

『静岡の遊郭　二丁町』を出版

私は歴史も好きで勉強したいと「静岡近代史研究会」の会員として静岡の歴史をずっと学んできました。幼いころから金座町の叔父（母方）夫婦に可愛がられましたが、叔父の妻は二丁町の娼妓でした。静岡の二丁町は江戸の吉原より古く、駿府の花街として栄え、現在の駒形五丁目の一郭にありました。

叔父の妻つねは遊びに行った叔父と親しくなりうけ出されました。気立てのいい優しい人柄で、子供がいなかったので私をわが子のように愛しんでくれました。しかし幸せは長く続かず、結核になって叔父の親身な看病を感謝しながら、若くして亡くなってしまいました。小さいころ二丁町で花魁道中を見た強烈な印象や、叔母との思い出とともにどんな人だったのか、

そこに働いていた娼妓たちの生活や、二丁町のことを知りたいと調べ始めました。

二丁町では廓の中を廓内（かくない）または「なか」といいます。なかの人は、古い歴史と由緒ある町に住むという誇りと気概をもっていました。何年にもわたり細かく取材や調査をしましたが、なかの人たちは口が堅く、娼妓を辞めていった人のことや、身請けされたり堅気になった人たちのことは、軽々しく口にすることはありませんでした。聞きたいこと知りたいことのほんの少ししか聞き出すことができず、困難な思いをしました。

『静岡の遊廓　二丁町』の出版記念会（2006年12月）前列右から２人目が小長谷さん

少しずつまとめながら一九八〇（昭和五五）年から八七年にわたって「静岡近代史研究会」の会誌に、七回にわたって寄稿しました。当時はまだそこで働いていた人たちが現存していて、直接話を聞くこともでき、貴重な証言集で、戦火で消滅した二丁町の一つの記録集になっていれば嬉しいことです。

色々な事情も重なりもう少し調べたいと思いながら中断を余儀なくされました。二〇〇六年、問い合わせなどがあり、「一冊にまとめたら」ということで、『静岡の遊郭　二丁町』として出版することができました。

結び

「戦争を経験した世代は、人生をあきらめるすべをある程度、身につけていると言われる。私も戦争、空襲で焼け出され、親戚の老、幼五人は焼死した。その後、転居の繰り返し、父の蒸発と、様々な経験をして『見るべき程のことは見つ』の気持ちになっている。

しかし、少し引いて考えると江戸末期の人口三千万から四千万が、今はその三、四倍くらいだろうか。世界人口も七〇億を超えて、食べていくのが大変な状態になっている。現在起きている自殺、他殺、自然死等、多くの死は、大きな『自然の摂理』ではないかとも思う。今は只、あの戦争を引き起こし、騙された世代の一人として、負い目と申し訳なさを痛感している。ここまで生き延びて、子や孫の明日を見たいと願うのは、欲張りというものであろう」

「今日も生きていつまで続く命かな」

二〇一三（平成二五）年皐月　小長谷　澄子

お話を聞き終わり、まとめているとき、お連れ合いが澄子さんに見守られながら、四月四日、九五歳の生涯を終わられたことを伺いました。心よりお悔み申しあげます。そして夫とずっと心通わすことのなかった息子さんがお墓参りに来てくれ、長年の気がかりが解けましたと言われました。

（二〇一一年一〇月）

〈主な参考文献と資料〉

『静岡市空襲の記録』一九七四　静岡市空襲を記録する会
『画集　静岡市空襲の記録　街が燃える　人が燃える』一九八五　静岡市平和を考える市民の会
『静岡・清水　空襲の記録』二三五〇余人のレクイエム　二〇〇五　静岡平和資料館をつくる会
『静岡の遊郭　二丁町』文芸社二〇〇六　小長谷澄子
『道を拓いた女たち』第二集――静岡県女性先駆者の歩み――　二〇〇〇　しずおか女性の会「小長谷澄子」武田浩子
『道を拓いた女たち』第三集――静岡県女性先駆者の歩み――　二〇〇四　しずおか女性の会
『しずおかの女たち』第七集　特集　戦後の静岡の女性団体　二〇〇五　静岡女性史研究会
『婦人のあゆみ一〇〇年』日本婦人団体連合会編　一九七八　日本婦人団体連合会
『静岡県近代史研究』第二三号　一九九七・一〇　静岡市近代史研究会「新樹座」とわたしの戦後　小長谷澄子

市川房枝氏に学んで五〇年　今九四歳　余生を楽しむ

金原　愛子（きんぱら　あいこ）一九一八（大正七）年生まれ　焼津市在住

聞き書き　勝又　千代子

金原愛子さん

賑やかな見付の暮らし

私は磐田市見付で生まれました。一二人の姉弟でしたが、二人は小さい時亡くなり、一二人の賑やかな家庭でした。父は片桐純三、母は次枝といいます。純三は袋井出身の医者で、一八七四年創立の千葉の共立病院（現千葉大学医学部）を卒業後、住友鉱山の附属病院の医師となり、四国や九州に転勤してそれぞれの土地で姉妹は生まれ、私は六女でした。父の旧姓は伊藤と言い、子供のいない片桐家に夫婦養子となり家を継ぎました。母の父も東京で開業医をしていました。

大正の初めころ、父純三の母が病気となり、見付の

家に戻って内科を開業しました。見付の家は敷地が七〇〇坪もあり、庭には大きな湧水の池があって子供たちのいい遊び場でした。水泳をしたり寒くなると、五右衛門風呂を沸かして入ったりしていました。

敷地の中に大きな松があり、言い伝えによると、見付は天領であったので家康が鷹狩りの折か、ここで休憩を取り、植えたとのことでした。家が立て込まない頃、東海道線で通ると車窓から松が見えたものです。

当時、病院はまだ少なく地域の中でも特別な存在で、村人の尊敬を集めていました。お抱えの車夫と人力車があり、周りの村には無医村も多かったので、朝早く人力車で往診に出て、夕方遅く八時ころ帰ることも珍しくありませんでした。車夫は朝鮮の人でしたが、父を載せて家に着くと玄関で「先生のお帰りー」と大声で呼び、家族一同玄関へ出迎えたものでした。

この車夫は、最初は一人で来ましたが、少しして妻を呼び寄せ二階に住んで子供も生まれました。仕事のない時は雑用もやり、妻は家の仕事を手伝っていました。辞めてからタクシーの運転手になりました。次の車夫も朝鮮の人で体の大きい菜食ばかりの人でしたが、雨が降ると学校へ迎えに来てくれました。戦争が始まるころ、帰れなくなると困ると帰国しました。二人とも三郎という名前で呼ばれ日本語で話をして、まじめで良くやってくれました。どうして朝鮮の人が我が家に来たのか理由はわからないですが、そのころ半島から大勢の人たちが日本に出稼ぎに来ていたといいます。私たちもごく当たり前のこととして一緒に暮らしていました。

家には女中や薬局の人、看護婦、書生など、常に一五、六人位の大所帯で、書生は家から学校に通っていました。女中の一人に「あきの」という子がいましたが、この子は秋田の出で父親に連れられ、遊郭に売られそうになるところでした。当時、見付には遊廓が三軒あり、その一軒に売られそうになったのを、父が警察医をしていたので家に引き取りました。どの位お金を渡したか知りませんが、運よく苦界に売られずに

済みました。小学校へ二年しか行っておらず、白湯しか飲まないし、イワシなど頭からしっぽまで全部食べて、貧しい家に育ったのだろうと思います。風呂敷一つで来ましたが、後に家からお嫁に行くときは、行李をいくつも持って行きました。看護婦の人も高等科二年を出てうちに来て、看護婦の学校へ行き資格を取り、さらに産婆の試験を受けて開業しました。

母はみんなの食事の支度や面倒で忙しく、沢庵など一斗樽四本くらいを毎年漬け、ラッキョウ等も漬けていてよく手伝わされました。でも母は頭痛もちであまり丈夫ではなかったから寝込むことも多く、女中は戦争中もいましたがとにかく大変でした。

その頃は治療費を現金で支払うことは少なく患者さんはモノを持ってきました。支払いは年末払いだったので暮れになるとシャケが何本も吊り下がっていました。近くに店もありましたが買い物に行くことは少なく、色々な行商人が来て不自由することはありませんでした。母は「新しもの好き」で、氷の冷蔵庫も早くからあり、お風呂も屋根の上に水を上げて温めたもの使っていました。

私は子供のころはお金を持ったことはなく、お小遣いをもらう習慣もありませんでしたから、そんなものと思い、後年、自分の娘にも小遣いをやらなかったら文句を言われてしまいましたよ。一度だけ五厘玉二つを持って、近所の菓子屋で飴玉を買ったことを覚えています。

戦時体制の中の青春時代

小学六年になると修学旅行は静岡でしたが、私たちの学年は浜口内閣の緊縮政策（一九二九年）の時だったので、中止になりとても残念でした。私は見付小学校から、姉たちと同じように見付高等女学校に行きました。当時は高等科二年に行く人も少なく、女学校への進学も珍しい時代でした。すぐ上の姉が東京の親戚の養女となって家を離れていて、その姉が自分の学校の制服を送ってくれたので、一学期の間その服を着て

通いました。四年で卒業する子もいましたが、私はさらに専修科と研究科に二年通いました。専修科は古文とか経理とか一応学校の続きでしたが、研究科は花嫁修業のようなものでした。

卒業して女子青年団にいるとき、南京陥落（一九三七年一二月）の提灯行列があり、翌年は武漢三鎮占領の提灯行列もやりました。後に東京出身の人が「そんな田舎でもそういう行事をやったの」とびっくりしていましたが、日本中でやったのですね。

1938（昭和13）年、武漢三鎮占領の提灯行列。前列右から5番目が金原さん

姉の一人は菊川の黒田代官屋敷と言われた家に嫁ぎ、妹の一人は静岡の門屋の白鳥家に行きました。白鳥家は地主で「安部鉄道」を作ったことでも知られています。みな家持の人と結婚したので、家の苦労はしないですみましたが、私は家のない人と結婚して苦労したので、あとで父に「なぜ家持の所へやってくれなかったの」と文句を言ったら、長男で苦労させるのが可哀そうだからとの返事でした。

結婚して立川に住む

二二歳の時、一九四〇（昭和一五）年、縁談がありました。夫となる金原光雄は同郷の人で、立川にあった陸軍航空技術研究所に勤めていて、二年前に奥さんを亡くしていました。金原は第六研究所というところで航空燃料の研究をしていました。一時満州で寒冷地での燃料実験を研究していて、任務が終わり帰国の途

中に見付に寄り、一月一五日に見合いをして四月に結婚しました。

夫は三男で年が離れていたので先生のような感じで、手紙のやり取りをしていましたが、間違っていると直してくれました。見合いの時に会ったきりだったので顔も忘れてしまい、後年、娘に「顔も分からない人と結婚するなんて」とからかわれました。歳が一回り近く離れていて、私は弟はいましたが兄がいなかったので、何となく兄のように甘えた気持ちがあったと思います。婚礼衣装も親戚が京都の大丸にいて誂えることができましたが、その後、妹たちの結婚は戦争中だったので支度ができず羨ましがられました。戦後間もなく結婚した妹などは、お米を持参しての新婚旅行でした。母が私に新婚旅行用にと着物を作ってくれましたが、時節柄行くことができませんでした。

（注）一九三八（昭和一三）年四月、国家総動員法が公布、灯火管制規則の実施、勤労動員が始まり戦時体制がしかれました。

あわただしい新婚生活
空襲に怯えながら

結婚式が済み姑も立川に同行しましたが、汽車の中でどれくらい家事ができるかとか、いろいろと口頭試問のように聞かれましたね。半年ぐらい同居して大変でしたが、長男の嫁ではないのでそれほど厳しくはありませんで、夫もかばってくれていました。翌年九月、長女が生まれ、一九四三年次女が生まれました。

一九四一（昭和一六）年、太平洋戦争に突入した日本は戦時体制がますます厳しくなりました。家が立川の飛行場からすぐの所にありましたから、段々と空襲や艦載機での攻撃も激しくなり、ある日、グラマン戦闘機が庭木の葉っぱが千切れ落ちるくらいの低空で飛んできて、丁度、娘が庭で遊んでいるときで、命のちぢむ思いをしました。空襲警報解除で家に入ると、地震のあとのように襖ははずれ、土ぼこりと木の葉が飛

び散り、こぶし大の破片が壁やふすまに突き刺さっていました。家の中にいたらと、ゾッとしました。

防空壕も素掘りの浅いのに畳の蓋をしただけのお粗末なもので、中に敷いて湿った布団を干していたら、派手な色で空から目立つと、近所の人に怒られてしまいました。夫は空襲警報になると、すぐに職場へかけつけ当てにはできません。防空壕を出たり入ったりの日々でした。お産の時は実家のあきのが手伝いに来てくれ助かりました。

一九四四（昭和一九）年の一二月七日に東南海地震というのがありました。当時は一切秘密とかで、なにも知りませんでしたが立川でも凄く揺れました。しばらくして母から手紙が来て、多分地震の様子を書いて知らせてきたと思いますが、殆ど墨で塗りつぶされていて被害のことは判りませんでした。戦争中は個人の手紙まで検閲していたのですね。後から聞いた話でお倉が残ったのでそこで暮らしたと聞きましたが、被害は物凄かったそうです。

怖かった浜松空襲

空襲が激しくなり一九四五年三月一〇日の東京大空襲の後、四月に長野県の岡谷に研究所ごと疎開することになりました。

私は三番目の子が一〇月出産の予定だったので、ひとまず夫の実家に帰りました。日本中、アメリカ軍のB29爆撃機の来ない日はないくらい、連日の空襲が続いていました。その上、制空権も制海権も無くなっていましたから、日本の近海にはアメリカの軍艦が海岸近くまで現れ、浜松も艦砲射撃で人々を怯えさせていました。いつどこへ落ちるのか分からない艦砲射撃は、空襲より恐ろしかったです。浜松は軍需工場も多かったので、最初から最後まで空襲があり、グラマンの機銃掃射と本当に怖かったです。姑は「死なばもろともだからね」と慰めてくれました。

後から聞いた話ですが磐田に農学校がありますが、戦中そこに陸軍の通信隊がありました。そこを狙って

か、空襲警報が鳴り小学校の生徒たちが先生に引率されて帰宅の途中、爆弾の直撃を受け先生はじめ生徒多数が亡くなりました。二八人とも言われています。ばらばらになった体が竹藪に引っかかったり、その辺に飛び散ったりと、見るも無残な悲しいことがあったそうです。妹の同級生が引率していました。一九四五年五月一九日だったそうです。岡谷に一時帰っていたので知りませんでした。当時、そのことは公には誰も話はできなかったそうで、いくら誤爆とはいえひどいことです。

六月一九、二〇日の静岡大空襲のときは見付の実家にいました。同じ日に豊橋も空襲されたので、両方の空が赤々と燃え両方から灰やら紙切れが飛んできて、夜が明けても太陽が見えないくらい、空にいろいろなものが舞い飛んでいました。

厳寒の山奥暮らし

七月の末、夫と岡谷に向かいました。朝早く出発して名古屋駅に着いたら空襲にあい、地下道に避難し、やっと諏訪の旅館にたどり着いたときは、夜八時を過ぎていました。食べるものは乏しく豆の入ったご飯などが出されました。

岡谷の宿舎は、中仙道沿いの小井川という山の中の高地で、夏は涼しく雲が下に見えて過ごしやすいのですが、冬の寒さは厳しいものでした。九月になるとコタツを出し、寝るときは皆で足を入れて寝ていました。来るとき舅が心配して南瓜やら芋やら、食料を一杯持たせてくれましたが、南瓜を見た村の人に「去年の南瓜か」と聞かれました。収穫も平地に比べると随分遅く、未だ南瓜の採れる時期ではなかったようです。川の水も凍りそれを割って顔を洗うという日々で、風呂もなく耐えられず立川の家にあったのを送ってもらいました。雑巾がけをしても廊下が凍り雑巾も凍るような寒さで、おしめなど干すとぱりぱりでした。でも上の子どもは平気でお尻にしもやけを作っては表で遊んでいました。

三女を出産したとき時、父が貴重な消毒薬を一本くれましたが、お産婆さんが余り使わなかったせいか産褥熱になってしまい苦しみました。自給自足なので畑を耕して野菜を作り肥料に下肥をまいていましたが、そのせいか一〇月に三女を産んだ年の暮、熱が出てお腹が物凄く痛くなりました。一二月の三〇日でした。近くに医者もないので夫におんぶしてもらい、さらに奥の方の医者に連れて行ってもらいました。注射をしてくれ、しばらくしたら、口から大きな寄生虫が出てきて、サナダ虫だとのことでびっくり。途端にケロッと直ってしまい正月の支度が出来ました。でもここは一回の空襲もなく防空壕など掘ってある家もなく、私はのんびりと田舎暮らしに馴染んでいました。

敗戦にホッとして　戦後の暮らし

八月一五日朝、勅使が来るというので、夫に新しい下着を着せて送りだしましたが、勅使は来ず夕方帰宅して「戦争が終わったよ」と言われて、日本が負けたことを知りました。戦争について夫は軍の機密であったでしょうから一言も言いません。新聞もゆっくり読むひまもなかったのでよく分かりませんでしたが、あれだけの空襲をやり、飛行機や爆弾の物量の多さを見て、何となく頭の中で負けるかなという気もしていました。父がよく「軍人が世の中を取ると国が滅びる」と言っていました。

夫が戦争を「負けた」と言わないで「終わった」という言い方に、言い知れぬ思いもあったと思います。大家さんと一緒にラジオを聞きましたが、ガーガーいうばかりで何も分かりませんでした。ああこれで灯火管制をしなくてもいいんだと、すぐに電灯のカバーを外しホッとしたのが実感でした。幾日か経った頃、夫から黙って小さな薬瓶を渡されました。それは青酸カリの入ったもので、半年くらい持っていましたが、故郷に帰り必要もなくなったので捨てました。戦後、女は進駐軍に辱められるとの噂でその為の用意でした。

敗戦後、夫は一月まで残務整理をして、一緒に飯田

線に乗り夫の実家に身を寄せました。汽車は超満員でやっとのことでたどり着きましたが、夫の家は焼け出された人たちが大勢同居していて、手狭であったので見付の実家に移りました。その後、五年間、実家に居候していましたが、食べるものや同居で肩身の狭い思いをしました。借家が空いてやっと伸び伸びと生活することができました。

敗戦の翌年四月一〇日、戦後初めての、そして女性が選挙権を得た最初の総選挙が行われました。未だ戦後間もなくで世の中は混乱の中にあって、選挙どころの雰囲気ではありませんでした。よく覚えていませんが郡役所に投票所があったと思います。母も投票に行きましたが私も行きました。以後欠かしたことはありませんが、鶴見俊輔氏に投票した記憶があります。夫婦でもお互い誰を書いたか言いませんでした。

夫は敗戦で失業してしまいました。豊橋で事業を起こしたので単身赴任で別居していましたが、お金も自分で使ってしまって送ってくれず、居候していて苦労しました。夫の事業は「武士の商法」で失敗してしまい、案じているとき千葉大学工学部の就職の話がありました。喜んでやれやれと思っていたら、戦争中の仕事が理由で公職追放の指令がきて駄目になり、二年間職に就けませんでした。

一九四九年、県立女子短期大学が創立され、夫が招かれて教鞭をとるようになりホッとしました。見付から静岡に通っていました。その後、二人の子どもに恵まれました。

静岡に転居　同盟の活動に参加

一九五五（昭和三〇）年、静岡市に転居し安東小学校の近くの県大の宿舎に入ることができました。小学校や中学校のＰＴＡの役員をずっとやり、奥さんたちの集まり、マザーコーラス、料理グループなど友達も大勢できました。浅間町に住んでいた多尾幸子さんと知り合い、婦人有権者同盟を知りました。多尾さんの義姉が同盟の役員をしていて、いろいろ同盟の話を聞

かせてくれて関心をもちました

（注）婦人有権者同盟については後述

私は同盟に入会を勧められたとき、純粋な気持ちで社会的な目を養い、また自分なりの考えを持つことのできる会に魅力を感じました。女性独特の澄んだ心で、世の中の曲がったことに対して立ち向かい、行動することに生きがいを感じ、素直に皆さんの中に入って行くことができました。思想的にはどうのこうのはありませんでした。

初めのころは例会の会場もなかったので、よく安東の私の家でやりました。一〇数人は集まりました。市川房枝先生は常日頃、「運動は事務の堆積なり」と、会計をきちんとやるように、お金の出し入れは誰にもわかるように透明にと言われ、私たちもそれを守りました。毎月、例会をやり、支部長、副支部長、中央委員を選出するときは、みんなの選挙で決めました。当時は会員が五〇人位いました。

――以下静岡の同盟の活動記録を参考に、お話とともに記述しました――

一九六六（昭和四一）年前後、自民党を中心に相次いで政界を巻き込む大きな汚職事件「田中彰治事件」「共和製糖事件」等々が相次いで起こりました。黒い霧事件とも言われました。同盟は他の団体にも呼びかけ、各政党、政府、国会に、腐敗政治、汚職追放の陳情をすることになり、会員も大勢参加して東京に行きツタンカーメン展を見て、総理官邸に陳情書を届けました。国会で市川房枝先生にもお会いして、色々な話を伺いました。

翌年には乳化製品の値上げが発表されて、他団体と共催して、生産者、消費者、メーカーと共同討論会を公民館でやり、それぞれの立場からの意見で盛り上がりました。

そのころ地方選や参院選、衆院選が毎年のようにありました。その度に市川先生の「理想選挙」の方針を守って「出たい人より出したい人を」を目指して、チラシを手作りして街頭で配り、明るい正しい選挙を呼

びかけました。どの時か、キツネと狸の面をかぶって棄権防止のプラカードを掲げて「キツネとタヌキの化かしあい」と歌いながら、街中を歩いたこともありました。

また選挙事務所を訪問して、各候補者全員にアンケートを配り、その結果を集計して政策や人となりを有権者に知らせたりもしました。各政党の候補者自身を招いて、直接政策を聞く会も何度かやりました。自民党はあまり来ませんが社会党（社民党）、共産党は必ず来ました。

一九六七（昭和四二）年の総選挙では、自民党が初めて五〇パーセントを割り、新しい政党の公明党が二五名の当選者を出しました。七二年、この年は横井庄一さんがグアム島から帰国し、浅間山荘事件や高松塚古墳の壁画発見、日本と中国の国交回復が田中内閣で調印されたりと、話題の多い年でテレビの前を離れられないことばかりでした。しかし物価は上がり物価メーデーという名での抗議運動もありました。

静岡支部も米価値上げ反対の抗議ハガキを、衆、参議員にたくさん送りました。七六年にロッキード事件が発覚しましたときは、他団体と共催で県選出国会議員、五党の代表者を招き、政界浄化について意見交換会をやりました。関心が高く五〇人の出席がありました。

また静岡の市長選で荻野準平が六選を目ざした際、周りは荻野の親戚、縁者で占められていました。市川先生にその話をしたら、即座に「多選は駄目です」と明快にお答えになりました。

焼津に居を移して　市川先生のこと

同盟の活動であちこちと飛び回り、東京や横浜に出かけたり色々とやりましたが、夫は何も文句らしいことは言わず、私のやることを認めてくれていました。経済の話を色々としてくれ出身校の第一高等学校の親しい仲間と、最後まで親交を深め穏やかな人でした。一九七三（昭和四八）年、夫が県立女子大学を定年退

職になりましたし、末娘が大学を卒業したのを機会に、夫と相談して焼津に土地を探し現在のところに移りました。新しく開発されたところなので、色々な人がいて、人間関係が大変な時もありました。

一九八〇年から二年間、同盟の支部長をやりその時も事務所回りをやりましたが、選挙屋というプロが自民党にはいて仕切っていましたよ。こちらに来てからも同盟の仲間がいて一緒に活動しました。私の後、八二年には左近寺信子さんが、八四年から豊田春江さんが支部長となり、市議会を傍聴して公害対策や保育所の問題なども勉強しました。

一九八〇（昭和五五）年、市川先生は八七歳で参院選全国区に立候補して、最高点の第一位で当選され世間を驚かせました。最初は先生の秘書の方が出る予定でしたが、支持する「勝手連」が押し上げ運動をして当選させてしまいました。その尊敬し敬愛していた市川先生が、翌年突然倒れられました。お見舞いにと掛川の葛湯を送りましたが、二月一一日、心筋梗塞で亡くなられました。

「権利の上に眠るな、権力と並ぶな、向かいに座れ」と戦後一貫して自分の筋を通し貫いた生涯を思うと、只々残念、惜しいの気持ちでした。香典は受けないということでしたので、婦選会館へ行く道で皆とお見送りしました。亡くなられてから本部で偲ぶ会をやりましたときに、韓国から来日された「韓国婦人有権者同盟」代表の、キム・セイレイさんが韓国語で詩の朗読をされ、美しい響きに感銘しました。静岡にも寄られ懇談しました。

先生は、自分の意見ははっきりと主張なさるし、見た感じ言い方や声もさばさばしていますが、とてもおしゃれでスーツは一流デザイナーのものをいつも着ていらして、靴はヨシノヤのと、身だしなみはきちんとしておいででした。

同盟の活動が広がって

その後、市川先生のドキュメンタリー映画「八七歳

の青春」が完成し、その上映運動に取り組みました。浜松、磐田、清水、静岡、島田、沼津と映画会をやり、評判がよく三六〇〇人の観客動員ができました。

八五年一月から静岡支部結成二〇周年記念事業として、講座「したたかにしなやかに生きた女性たち」をテーマに三回シリーズで企画しました。豊田さんが支部長をしておいでの時で、幅広い交友関係と人脈のお蔭でいい講師の方をお願いできました。

①回目　島岡明子さんの「いのちの詩人　英美子」
②回目　森真佐枝さんの「はみだし人間のすすめ」
③回目　片山静江さんの「戦争の傷痕をひきずって」

をやりましたが、評判もよく大盛況でした。同時に豊田さんを中心に支部結成二〇周年記念号を、皆さん手書きの原稿用紙をそのまま印刷という形でしたが発行することができました。

同盟は、公正な立場と自由な発言を維持するため、補助金は一切貰わないという市川先生の信条を、静岡でも貫き通しました。公正な選挙運動や候補者へのアンケートなど積極的にやったためか、八〇年代のころ、普通の社会教育団体であるのに、行政は政治団体だと言って、会場を貸してくれないことがしばしばあり、とても困りました。社会問題にもなりました。「あざれあ」の初代館長の林のぶさんがよく理解してくれて応援してくれました。また今では選挙のたびに選挙公報が各戸に配られ、候補者の人となりや政策が分かりますが、同盟では白いばらの会のころからその必要性を行政に要請していましたが、なかなか実現せず、地方議員の選挙公報はやっと、一九九五年の市議選から発行されるようになりました。

平和運動にも参加

一九五四年三月一日、焼津のまぐろ漁船「第五福竜丸」が、ビキニ環礁でアメリカの水爆実験に遭遇し、放射能を浴びて帰ってきました。それを機に原水爆禁止運動が全国的に大きく広がりました。三・一ビキニデー全国集会が毎年焼津で開かれておりますが、同盟

としても参加して八二年の時、紀平会長のメッセージを豊田春江支部長が代読しました。

また原水爆禁止世界大会の折、東京の夢の島に展示してある福竜丸から出発して広島まで歩く平和行進がありますが、幾度か参加もしました。熱海まで出迎えて同盟の旗を受け取り、次の支部に引き継ぎをするのです。お墓のある弘徳院にも行って手を合わせました。

広島の世界大会へも豊田さんと一緒に行って、「ダイイン」ということをしました。地面に寝転がると背中が熱くて、焼けるということはこんなに熱いものかと、原爆で亡くなられた人たちを思いました。その時、野球場から試合の歓声がワーッと聞こえてきて、平和だ！　と実感しました。平和についての問題の集まりには、沖縄や九州にも行って勉強してきました。

静岡支部についての報告をする金原さん

ベアテさんを迎えて

一九九五年一〇月一一日、もくよう会の主催でベアテ・シロタ・ゴードンさんが来静しました。

同盟も後援会の一員として実行委員会に加わり、ベアテさんの講演会を企画しお話を伺うことができ嬉しく思いました。東京にお帰りになるとき、駅までお見送りしましたが、堂々としていらっしゃるけど小柄な方で、日本語はぺらぺらできさくな方でした。昨年の暮れにお亡くなりになり、ほんとうに残念でした。

（注）ベアテさんは敗戦後、日本国憲法が作られた時、まだ二二歳の若い女性でしたが、幼い時、音楽家の父たちと日本にきて一〇年間過ごし、日本の女性の無権利な状態を実際に見聞きしていました。

戦後、憲法草案に携わる時、絶対に日本の女性たちに、人間としての権利を与えたいと念願し、数多くの女性のための条文を作りました。多くはカットされましたが、基本的人権の享有や一四条の『法の下の平等』、二四条の『両性の平等、家庭生活においての個人の尊厳』という条項に生かされました——。

若い人にお茶を教えて
余生を楽しみながら

焼津に移るころ、県の主催で女性の「海外派遣研修事業」が毎年行われていて、それに参加しました。帰ってきて何かしたいと考えている時、県の方から地元で自主的な集まりを作ってほしいと頼まれました。そこで焼津に来てから新しい人ばかりでしたので、親睦のため「和田を考える会」という会を作りました。公民館活動として大学の先生のお話や、工作、人形づくり福祉活動や出来たばかりの公民館で、友愛セールと名付けてバザーを何回もやりました。一〇年間会長として楽しくやりましたが、段々と学習部門が無くなり趣味の会になってしまい、つまらなくなり解散しました。

一九九二（平成四）年、私のやることにもずっと理解をしてくれていた夫が八四歳で亡くなりました。私が七三歳の時でした。夫は退職後一〇年間、予備校の教師や厚生専門学校に勤めました。長い間、活動を何の文句も言わないで支えてくれたいい夫でした。子どもたちもお父さんを大好きでした。

2009年90歳。自宅の茶室で

一人になり町内の組長の順番が回ってきて、色々な方と知り合いになりました。皆さんにお茶を教えてほし

いと頼まれ、若い時やっていましたが改めて先生について修業し直し、月二回ほど気軽に若い方と楽しみながら、皆さんに若さをもらいながら教えています。有難いことです。

同盟の方は八〇歳過ぎまで静岡での例会に行っていましたが、時代とともに会員も高齢化し亡くなったり病気になったりと、段々少なくなり例会も難しくなりました。毎月開くことができなくなり今は時々集まって話し合いをしています。

沢山の人たちが、戦前から女性に選挙権を、男女平等をと闘い運動してきて、いまはそれが当たり前になり有難みを感じることもなくなりましたが、長い間の苦しい闘いは忘れないで受け継いでいきたいものと思っています。

そんな静かな日々を送っていた今年の春先、思いがけず「焼津九条（青空）の会」の方から、市川房枝に学んで」という集会をやるので、話してほしいと頼まれました。九四歳にもなり忘れてしまったことばかりなので迷いました。市川先生の『八七歳の青春』も上映されるということなので、一大決心をして引き受けました。

四月一三日、当日は緊張のしっぱなしでしたが、今までの話をさせて頂きました。質問も熱心にしてくださり、少しはお役に立ったかと嬉しく、ほっと肩の荷を下ろすことができました。

子どもは女の子ばかり五人ですが、四女の祥子が夫を亡くしたので一緒に暮らそうと家を増築して楽しみにしていたのに二〇〇一年に突然亡くなり、なんていうことかと悲しみ暮れました。今は一人暮らしも気ままで気楽でかえって元気になりました。ご飯も自分で作って三度三度きちんと食べています。その方がおいしいですね。娘たちも一人暮らしを心配していろいろ気にかけてくれるので安心して毎日を送っています。

（二〇一二年一二月）

（注）「日本婦人有権者同盟」について（和暦）

同盟の歴史は古く、戦前の大正時代から連綿と続いた婦選獲得運動から発しています。明治二二（一八八九）年の大日本帝国憲法と同時に公布された、衆議院議員選挙法により、投票資格は満二五歳以上の男子のみ、国税一五円以上納めたものしか与えられず、女性の選挙権はありませんでした。

明治四四年、平塚らいてうが『青鞜』を出版し、大正三年、第一次世界大戦、七年、米騒動と、大衆や女性たちの動きが活発化され大正デモクラシーの波がおこりました。

大正九年、らいてうは、市川房枝、奥むめおらと語らい、女性の社会的解放をめざし「新婦人協会」を発会させました。そして目的を女性の政治活動を禁じた治安維持法の改正や、男女平等、婦人、母、子供の権利擁護を掲げました。しかし会員内部の感情的なもつれや、らいてうの病気などで一一年には解散となってしまいました。

続いて児玉真子らの「婦人連盟」、一二年には坂本真琴らが「婦人参政同盟」、キリスト教婦人矯風会を基礎にした「日本婦人参政権協会」と婦人参政権獲得を目標にした団体が結成されました。これらの団体が大同団結をはかり、市川房枝、久布白落美、川崎なつその他で「婦人参政権獲得期成同盟」（一三年）を結成。この会は一四年「婦選獲得同盟」と改称。「普選より婦選を」を方針としました。

大正一一年、日本共産党が非合法のうちに創立され、一二年、関東大震災が発生。甘粕事件、亀戸事件が起きました。農村では地主と小作の対立が激しくなって小作争議がおこり、一四年「女工哀史」（細井和喜蔵）も出版され紡績工場の劣悪さも知られるようになり、様々な労働争議も頻発しました。

昭和になって

こうした労働運動の高揚を背景にして、昭和三年、日本で初めて普通選挙法による衆院選挙が行われましたが、女性たちは参加できず、同時に治安維持法の改定で死刑が加えられる結果となりました。

昭和に入っても婦選獲得の運動は絶え間なく続けられました。しかし昭和三年三月一五日、共産党への大弾圧が行われ、党員、支持者、活動家たち、女性たちも容赦なく逮捕されました。翌年四月にも一斉検挙が行われ、世界中を巻き込んだ大恐慌の波にも巻き込ま

れ、労働者階級に首切り、賃下げ、長時間労働と、しわ寄せが押し寄せました。農村、工場、繊維産業等々が多大な影響を受け、多くの工場でストライキや争議が起き、女性たちも様々な職場で先頭に立ち要求を出して戦いました。

昭和三年、田中儀一内閣は婦人公民権案を議会に提出、勢いづいた運動は活発化し全国的な署名活動をやり、三万二〇〇〇名の請願書を議会に送りました。昭和五年、婦選同盟を中心に第一回日本婦選大会を開催し、全国的に女性の結集をはかりました。翌六年、第二回婦選大会を開催。市川房枝や金子しげりらは全国を飛び回って遊説し盛り上げました。しかし婦人公民権案は衆議院では可決されましたが、貴族院では否決されてしまいました。

昭和六年、満州事変が起き、戦争体制に入った日本政府は、官制の女性団体「愛国婦人会」（一九〇一年）「大日本連合婦人会」「大日本女子青年団」「大日本国防婦人会」等体制側の団体を作り、組織と運動の転換をはかりました。昭和八年、小林多喜二が検挙されてその日のうちに虐殺されるという情勢の中で、様々な運動も弾圧が厳しくなって、殆どの活動はできなくなっていきました。議会も婦人参政権案など入り込む余地はなくなり、ついに昭和一五（一九四〇）年、婦選同盟は「新体制よ、婦人を認めよ」の声を残して解散せざるを得ませんでした。

それ以後、運動はほとんどできなくなり、市川房枝は戦争を批判し平和を求めながらも、国策に協力しつつ現状を肯定し、ささやかな母性保護法の制定や、身近な生活の防衛に方針を転換していかざるを得ませんでした。

戦後の出発（西暦）

一九四五（昭和二〇）年八月一五日に敗戦を迎えて一〇日目の八月二五日、旧来の戦争協力婦人団体や戦中沈黙していた女性活動家、婦選獲得運動家たちが中心となって「戦後対策婦人委員会」を結成。会は政治部（市川房枝）労働部（赤松常子）社会部（久布白落美）が担当、選挙権、公民権、政治結社加入権などの要求を政府、ＧＨＱに申し入れ、「一日も早く日本政府自らの手によって、婦人参政権を与えられたい」と陳情しました。実現は必至とみて組織活動に取り組み、一一月三日、市川を会長に「新日本婦人同盟」を創立。戦後最初にできた女性団体で、後一九五〇年一一月「日

本婦人有権者同盟」（会長市川房枝）と改称されました。

一九四七（昭和二二）年、市川が戦中の言論報告会理事であったことの理由で、公職追放となり三年七か月の間、表立った活動はできませんでした。

静岡支部について

一九五九（昭和三四）年、静岡の市議選での折、官制の婦人団体をも巻き込んで、大量の違反事件が発覚しました。静岡の馬場町で洋裁店をやっていた石上きみは、女性も勉強が必要と「政治を学ぶ会」を立ち上げました。石上は向学心に富み『婦人文化新聞』を発行していた、豊田春江や有田アサノと親しくしていました。『婦人文化新聞』は静岡で一九五〇年より発行された、女性による女性のための新聞で、静岡県下で千部あまり発行され、多くの読者の支持を集めていました。有田は市川房枝に熱い信頼を寄せていて、一時は市川宅に下宿していたこともありました。

六〇年代前後、世の中は、新聞代値上げ、牛乳、パン、風呂代の値上げと、庶民は生活にあえいでいました。石上は有田の紹介で市川房枝を度々静岡に招き、勉強会を開いて教えを乞うたり、自宅を開放し市川、紀平悌子らを講師に草の実会、矯風会の人たちと政治経済を熱心に勉強しました。

一九六〇年、日米新安保条約、日米行政協定調印に対する反対運動が、日本中を巻き込み、かつてないほどの広がりで、今まで政治に関心のない人たちをも含めて、大きな安保反対運動となりました。その中で東大生の樺美智子がデモの最中に警官隊によって殺されるという事態も起こりました。これほどの阻止行動があったにもかかわらず、六月一九日、自然承認となってしまいました。

同じころ、三島、沼津の石油コンビナート建設反対、田子の浦港の汚泥問題と公害に対する反対運動も激しく、基地反対闘争も各地で起こっていました。また小児マヒが流行して、母親たちは不安に駆られ冷戦対立の中で、政府が許可しないソ連の安全な生ワクチンの輸入を求める署名活動も活発化して実現させました。これらの運動には多くの女性団体も参加し、同盟も会として加わり一緒に行動しました。

石上は政治浄化、公明選挙をめざし六三年「白いばらの会」を発足させました。その後、市川房枝の勧めもあり、一九六三年五月八日、石上きみ、豊田春江、有田アサノは正式に「日本婦人有権者同盟静岡支部」

を結成しました。

同盟の立場と姿勢は、「議会制民主主義を支持し、平和と福祉を目指す」「公正中立な立場で自由に批判する役割を果たす」「全ての公務員は総理大臣を含めて、国民との奉仕者あるので、積極的に意見を言う」「発言の自由を確保するため補助金は受けない」としています。日常の活動目的としては「明るい選挙」「理想選挙」「女性の地位向上」「女性議員を増やそう」を運動の柱としました。

〈参考文献と資料〉

『日本婦人有権者同盟年表』参政権と歩いた四〇年　日本婦人有権者同盟　一九八五年
『婦人のあゆみ一〇〇年』日本婦人団体連合会　大月書店　一九七八年
『戦後史と女性の解放』絲屋寿雄　江刺昭子　合同出版　一九七七年
「静岡県歴史年表」静岡県歴史教育研究会編　静岡新聞社　二〇〇三年
『婦人有権者』支部結成二〇周年記念文集　日本婦人有権者同盟静岡支部　一九八五年
『しずおかの女たち』第七集「婦人参政権運動と日本婦人有権者同盟」河村恵子「静岡県の初期母親運動の記録」勝又千代子　静岡女性史研究会　二〇〇五年
『道を拓いた女たち』第三集「石上きみ・豊田春江」河村恵子　しずおか女性の会　二〇〇四年

〈協力者〉秋山好枝さん

女性教師として四〇年を生きて

栗田　富貴代（くりた　ふきよ）一九二八（昭和三）年生まれ　静岡市清水区在住
聞き書き　佐野　明子

栗田富貴代さん

お茶摘みさん

安倍郡南藁科村吉津（現静岡市葵区吉津）生まれ。兄（大正一二生）と姉（大正一五生）、弟（昭和一〇生）と妹（昭和一六生）のいる五人兄弟の真ん中の次女として生まれました。実家は祖父の代からの農家で、お茶を中心に米や麦、また畑では自分たちの食べる野菜（ジャガイモ、なす、白菜など）を作っていましたので、戦後も食糧に困る事はありませんでした。お茶農家の家では、当時女の子が生まれると「『お茶摘みさん』が生まれてよかったね」と言われたそうです。そのころ男の子が生まれれば「万々歳」でした

が、女の子が生まれても褒めようが無い、それでも生まれてきた事を「よかったね」と言うために、こんな言い回しをしたようです。この頃、女の子は高等二年を卒業すると、田畑の仕事や茶摘みの時期には、家の仕事を手伝い、農閑期になると、お町（静岡の町）の方へ裁縫の見習いに行く、という具合でした。

吉津の村には「お日待ち」と言って毎年一〇月中旬ころ、神嘗祭という豊年万作を祈る祝日がありました。神様に初穂を捧げるんです。村の入り口には長い幟を立て、もろ箱という木箱の中についた餅を入れたり、根菜類と大きな飛竜頭（ひりゅうず）（注1）を煮たものを用意して、たくさん客が来た時に備えたりしました。神嘗祭の時は、村はずれのお宮さんへ続く道に灯籠を並べて、皆でお参りに行きました。お日待ちの日は、何かと人が集まるんですよ。嫁いだ女性たちが里帰りしたりしてね。一一月二三日は新嘗祭と言われていました。

女子師範学校

今でも覚えているのは、通っていた南藁科小学校の教室の黒板の上に書かれていた文字です。「私の身体は天皇陛下のものです。粗末にせずに磨きます」そういった文言が五条ほど書かれていました。これを毎日、声を揃えて大声で唱えるんです。文言は今でも覚えています。

そんな私は南藁科小学校を卒業し、高等科を二年過ごした後、「お茶摘みさん」ではなく、教師になるため、一九四三（昭和一八）年、沓谷の女子師範学校（現東中学校の場所にあった）へ入学しました。

本当は、私は初め、看護婦になりたかったんです。「私の身体は天皇陛下のもの」でしょう。自分に何ができるか、考えた時に従軍看護婦になることが一番いいことに思えたのです。でも、看護婦への試験に落第してしまった。後から先生に聞くと、私の身体が痩せていたのが理由だったそうです。

そのあと、師範学校の募集の話が来ました。私たちの住む吉津の村では、それまで、師範学校というものがあることは知っていたけれど、そこに入学することなど、誰も考えちゃいなかった。ところが当時は、教師のなり手が少なく、（男性教師は戦時動員されていた）女子師範に入学する人の募集が学校にあって、私にもその話が来たのです。女子師範学校は四〇人の二クラス（甲組、乙組）が一学年という編成でした。

私は、看護師になれず、もし師範学校も落第していたら、何の疑問もなく、悲しみもせず、お茶摘みさんになったのでしょうね。そのくらい私は「どうしても、こうしたい」という意志や執着のない人間でした。

沼津の東京麻糸紡績工場

師範学校予科二年の一九四五（昭和二〇）年一月一三日から学徒動員で沼津市の大岡にあった東京麻糸紡績工場へ行き働きました。

ナッパ服と呼ばれる作業着が配給されました。ここでは、落下傘の紐やカモフラージュ用の偽装網になるという麻の生産に取り組んでいました。

仕事は製綿、粗紡、精紡の行程にわかれ、労働時間によって昼番、甲番、乙番にわかれました。製綿は一番埃が多く重労働であったので、特攻隊と言われて三〇名ほどの人が選ばれ昼番のみでした。製綿には直径二メートルくらいの円筒が廻る機械があり、その上に乗って麻の皮を梳（くしけず）るようにしてきれいな繊維にする仕事でした。埃が朦々と立ち、マスクを通して鼻の穴が真っ黒になるような仕事でした。働く時間帯の違う粗紡や精紡の人たちとは、なかなか会えませんでした。

工場には朝鮮人の女生徒がいて、女工をしていました。同じ時間に仕事をしないので、言葉を交わす事もありませんでしたが（注2）、差別を受けていたと思います。たまに、公衆風呂などで、その姿を見る事がありました。

あるとき、廊下ですれ違う朝鮮人の女工が、サンドイッチマンのように何か書いたものを背負っていまし

工場食堂前にて。栗田さんは最前列右から三番目

た。そこには「私は○○を盗みました」と書かれているのです。誰が、その看板を背負わせたのか、今になっては何もわかりませんが、ほとんど顔を会わす事もなかった日本人の女工が、そんな事をするとは思えませんし……。

翌年四月に予科二年から本科一年に進級しました。しかし、勉強の記憶は皆無、疲れで身体も頭も鈍くなり、細かい事は全て忘れ、目の前の命令された事だけ一生懸命にやり、ただ生きるための食事だけが楽しみでした。食堂に入ると大きな台の上に丼飯が並んでいて、さつま芋に飯粒をまぶしたようなものだったり、高粱だったり、中身の少ない雑炊などでした。

中でも、一番記憶に残ってる食事があります。ある日、製綿担当の私たちの朝のみそ汁に蚕のサナギがプカプカ浮いていました。私たちは驚き、食器に浮かんだグロテスクなサナギに辟易しました。しかし、中川先生は「あなたたちは、育ち盛りでタンパク質が必要なのです。これは甲府の養蚕をしているところから

譲ってもらったサナギです。これを食べなくては成長出来ないですよ」と言われたのです。私たちは、眼をつむってサナギ入りのみそ汁を飲んだのでした。一度だけ、製綿の人にだけ出されたと思います。

戦時中ではありましたが、ここでは、ひな祭りの日に演芸会をして発表会をしたりする時間もあったんですよ。と言っても衣装などは無くてね。シーツも洗濯したりしなかったですね。なんでもかんでも白い布があると、いつの間にか無くなってしまうんですよ。誰が持っていったのか、わかりませんが。

終戦、兄の死

一九四五（昭和二〇）年七月五日、麻糸紡績工場はB29の爆撃をうけました。焼け出された私たちは、防空頭巾代わりの厚い冬布団を頭から被り、畑に入りました。動くと狙われるので溝に入って、一晩ジッとしておりました。溝に咲いている小さなクサボケの花を憶えています、真っ赤でね、ああ、あそこにクサボケが咲いていたなあと思い出しますよ。その後、布団を抱えたまま、とにかく線路伝いに静岡市のほうに向かって歩くしかありません。途中に親類の家があって、そこへ一日泊めてもらったりしながら、ようやく自宅に戻り八月一五日の終戦日を迎えました。

自宅で終戦の玉音放送を聞きました。その日、放送があるので、聞くようにとの通達があったのです。何のことを言ってるのか、その時の自分はわかりませんでした。周りの大人たちをみると、泣く人も笑う人もいなくて、この先、どうなるのだろうという漠然とした心持ちになりました。

この間、二〇歳で徴兵された兄は戦死しました。静岡連隊に入ってから、家人の知らぬ間に夜行列車で何処かへ連れて行かれ、そのままでした。父の弟は駅員をやっていました。臨時列車の時間を教えてもらい、両親はその列車の通るところで遠くから手を振るのが精一杯だったようです。

兄が亡くなったとき、私自身は動員されていて、戦

死の通知がどうやってきたのかは聞かされていません。遺骨の入った箱が届けられた事も、あとで聞いた事です。

兄の葬儀では、村のお寺へ向かう道を、村中の人たちが参列し見送ってくれました。当時は車での移動という事もなくて、お寺に向かう道を歩く長い列を誰かが写してくれた写真が残っています。この後、葬儀が済んで、祭壇の前に誰もいなくなった時、母が祭壇の下に隠れるようにして泣いているのを見ました。戦争で亡くなったことは「国のため、天皇のために命を捧げる」という名誉であると言われていた時代でしたから、葬儀の間中は涙を見せなかった母でした。当たり前のように戦争に巻き込まれ、なんの疑問も憤りもなく麻糸工場で戦時動員されていた私が「戦争は、こんなに残酷なものなのだ」と実感したのは、この母の姿を見た時でした。

その年終戦後すぐ磐田通信学校跡（通信兵の部隊）に静岡第一師範（男子校）と静岡第一師範女子部の生徒が集められました。それまで物心ついてから男女混合という場はなく、これが初めてでした。

二段ベッドの部屋を充てられ、そこで短い間暮らしました。朝起きると芋畑にいき、葉っぱの茎だけ百本採らないと食堂に入れてもらえない。ここでは、自分の食べるものは自分で採ってきなさいという意味でした。

また、通信兵の使っていた部屋やベッドは蚤だらけで、裏返した寝間着の縫い目を開くと縫い目に沿って黒い蚤が一列に線を作っていて、驚きました。

私たちは、住みながらそこをきれいに掃除しました。そして、やっと蚤がいなくなった頃、一一月三日に進駐軍に接収されました。磐田を出る時、私たちは倹飩箱（注3）をそれぞれ一つずつ持ち帰りました。これは、実家の父が煙草入れなどに使い、父が亡くなってからは私が自分のものとして、今でも家にあります。

ノーパンクの自転車

一九四六（昭和二一）年五月、静岡市第一師範学校女子部代用附属国民学校（現千代田小学校・静岡市葵区）の講堂を借りて勉強する事になりました。そこは学年の境界を寄宿生の布団で仕切った急設えの教室兼寄宿舎でした。

当時私は、片道八キロを自転車で通学していました。その頃はタイヤもチューブも無く「ノーパンク」という自転車でした。父がどこからか、直径五、六センチくらいの黒くて固いゴムの管を調達してきました。それをリムに嵌め込み両端を針金でつなぐと「ノーパンク」の自転車が出来るのです。空気が入っていないからクッションが悪く、継ぎ目がコトンコトンと音を立てる自転車でしたが、当時の私にとっては、かけがえの無い通学用の足ですから、盗まれないように大切に使っていました。

この頃私は、安西橋と牧ヶ谷橋（当時は無料でしたが、その前に有料だった時があったようです）の二つの橋を渡って通っていました。

ある日、安西橋の上を走っているとき、バタンと大きな音がして目の前に大蛇のようなものが横たわっています。一瞬、何が起こったかわかりませんでしたが、私のノーパンクのタイヤだという事に気がつき呆然としました。幸い帰り道でしたので、ハンカチ（当時の事、これとてハンカチと呼べるシロモノではなかったのですが）を裂いたり、紐を使って縛りつけたりして、自転車を引っぱって家まで帰り着きました。

現在私の自宅前はバス停になっていて、時々自転車が乗り捨てられていることがあります。名前のある自転車が乗り捨てられていたので、そこへ電話したことがあります。そうしたら、盗難された自転車だったのですが「もう新しいのを買ったので、そちらで処分してください」と言われました。

私の学生時代は、昭和一八年に入学して、昭和二三年卒業、戦中戦後の物不足の真っ只中です。「欲しが

りません勝つまでは」「贅沢は敵だ」という標語を掲げて戦い抜いた私の心の中には「もったいない」という気持ちが今でも生きていて、時々うずくのです。

物不足と言えば、生理の時も困りました。お習字でつかった半紙を乾かしたのやら、雑布のようなものを使いましたが、一度友人から白い粉を紙でくるんだものをもらった事があります。たった一つだけ、一度使えば捨てるものでした。あの中の粉については、なんだったのか、わかりませんね。

富士登山

一九四六（昭和二一）年七月二八日、師範学校の女子部山岳班として、私は同じ師範学校の大谷さんと二人で富士登山に行きました。実は、前日にその企画は大雨のため中止との連絡網が実家に来ていたのですが、前日に富士宮の友人宅に泊まっていた私と大谷さんには、その連絡が届かず、二人で登頂する事になったものです。二人で歩いて三合目あたりまで来た時、トラックが上ってきたので、手を挙げてみると停まって載せてくれました。有り難く乗車して「すみません」と挨拶すると、すでに荷台にはレースのブラウスを着た女の方たちが五、六人乗っていました。そのブラウスといい、話している様子といい、私たちとは全然違います。車にいた案内人らしき人が「あんたたちは、どうしたんだね」と尋ねるので「私たちは師範学校の女子部山岳班として富士登山に来ました」といきさつを話しましたところ、先にいらしたレースのブラウスの人たちは、宮中の女官さんたちであるとの事。そんな成り行きで三合目で一晩泊まり、五合目まで同行していたのですが、「ざあます」言葉を話し、服装からして違う女官の方たちと、歩調を合わせていくのは如何なものか、と大谷さんと二人で相談して、案内人の方に「私たちは先に登らせてもらいます」と、この方たちと別れました。（注4）

そうして、頂上へと着きました。白足袋にわら草履を履いておりましたが、山肌をザーッと何度か滑るう

ちに、その乾燥した土にわら草履も大分ぼろぼろになっていました。

その際、頂上で中央気象台の富士気象台観測所を訪ねました。観測所には西川さんという男性がいまして、私たちが、これから下山する事を話すと、女性の足で、これから下山するのは危ない、ここで一泊していきなさい、と言うんです。泊めてあげるからと、言われてその言葉に従い、案内されたのは貴賓室（ゲストハウス）でした。一段下がったところには、やわらかい客布団が敷かれている部屋でした。私たちは持参したお米や野菜を提供し、この日の食材にしてもらいました。そして、翌日は火口のお鉢巡りに連れて行ってもらいました。今、この観測所の西川さんはどうされているのか、思い出すと、もう一度行きたくなったものです。戦争が終わり気持ちも開放的になっていました。本当に楽しい登山でしたね。

教師生活はじまる

一九四八（昭和二三）年に師範学校を卒業し、四月から南藁科小学校（当時は安倍郡南藁科村立南藁科小学校）で教師としての第一歩を踏み出しました。当時は教師不足だったですね。師範学校を卒業しなくても、高等科を出て、すぐに教師をする人も学級を持たされていました。

私は田舎を出て、町中の学校に行きたいと思っていましたが、校長先生から「お前は自分の母校のための教師になりなさい」と言われ、出身の南藁科小に初出勤となりました。

南藁科小で四年間（昭和二三～二七年）、そのあと三番町小で三年五ヵ月（昭和二七～三〇年八月末）、勤務しました。

小学校のクラスには、父親が戦死した子どもが何人かいました。南藁科小では、農家をしている家が多かったので、なんとか食べる事は出来たのですが、三番町

南藁科小学校３年生の教え子たちと。
1951（昭和26）年２月

小では貧しくて食糧のない家もありました。給食が始まると休んだ生徒の分の給食を貧しい生徒の家に持っていった事もあります。家と言っても、安倍川河川敷に乞食のように住んでいる、そんな場所です。安西橋の下、屋根のない囲いだけの家、そう焼けトタンで壁をつくってあって、そこにに子どもが三、四人もいてね、一番下の子はまだハイハイしている赤ちゃんでした。金物や紙くずを拾っては売って生活していたようです。家で私がそのことを話したものだから、うちの父は安西橋を渡ってどこかへ行く用があるときは、自転車のかごにサツマイモなどをたくさん積んで、その家に届けていました。これはね、父の自慢話をしてるんじゃないんですよ。うちは、柿もみかんも、タケノコも季節になれば出てくるうちだったからね。あの頃は、困っている人がいると聞かされたら、ほおっておけなくて、誰でもしてたことなんです。可哀そうだと思えば、周りがみんなで面倒みてたんですよ、当たり前のように。

結婚、母として教師を続け

三番町小にいる一九五五（昭和三〇）年四月に結婚しました。私の従兄弟が魚町（現・江尻町）というところに住んでいて、ある日そこへ遊びにいくと、従兄弟のつれあいの従兄弟の人が来ていました――それが夫でした。夫は大正一五年生まれで三歳上。年頃の釣り合う男女を夫婦にさせようかという親戚の話があって、それに従って結婚しました。結婚後、夫の家のある（当時）清水市の小学校へ転任希望を出しました。当時は静岡と清水の合併前でしたから、静岡から清水へ転勤をするためには、清水から静岡へ転勤したい人を捜さなくてはいけなかったのですが、幸いその年の九月に清水市立高部小学校への転任が決まりました。

そして、昭和三一年三月に長男が、三四年八月に長女が生まれました。長男の誕生の時は、前の日まで学校に通っていました。大きなお腹をして、自転車にも乗ってましたよ。出産のあとは、まだ二〇代の教頭先生が授業を代わってくれました。当時は、産まれた赤ん坊を行李（こうり・竹や柳で編んだ箱）等に入れて教室に連れてきた女教師もいたのですが、私は同居していた夫の母に子どもを託して、仕事を続けることができました。また、家には夫の姉が同居していましたから、女手がありました。夫の姉は一度嫁いだのですが、子どもができなくて、そのうち相手の方が外で子供をつくってしまって……そんな事情で私が嫁いだときから家には姉が同居していました。だから、仕事も続けられたし、そういうことも納得のうえで嫁ぎました。私の不在中、子どもには人工乳も与えましたが、朝と帰宅後は母乳を与え育てました。家事のいっさいを義母と義姉がしてくれて、私は教師を続けることができたのです。

そうはいっても、二人目の子ができたときは、仕事をしながら乳を与えたりが大変で、実家の母のところへ行った時に「三人目の私が生まれたときは、さぞ大

変だったんでしょうね」と聞いたんです。最初に話したように、男の子の望まれる時代でしょう、私の兄が生まれ、次は「お茶摘みさん」の女の子だった。そして、三番目の私まで女だったんですから、がっかりしたのだろうなあ、という思いもあって、聞いてみたんです。すると、母は「百姓の嫁は、子を産んでもすぐに田畑に出て仕事をしなくちゃならないけど、赤子が泣けば、おばあちゃんが乳をくれろと田畑に子どもを連れてくる。充分に乳をくれてやれと、そう言われて畦に座って乳をやる時間は、誰にも文句は言われない。農家の嫁は、この時だけはおおっぴらに休むことが出来た。三人目が女であっても、私は嬉しかったよ、あのときは」と言いました。それを聞いて、私は嬉しくなって、自分も頑張ろうと思えたんです。

教組の婦人部長

一九六〇（昭和三五）年に清水市立辻小学校へ、一九六五（昭和四〇）年には清水市立清水小学校、一九七〇（昭和四五）年に清水市立興津小学校へ、一九七七（昭和五二）年に清水市立袖師小学校へと転任。そして、一九七九（昭和五四）年からは、清水市立飯田東小学へ転勤が決まりました。

その飯田東小へ転勤する一九七九（昭和五四）年一月四日に夫の母が亡くなりまして、それまで母の介護を理由に断ってきた日教組清庵支部婦人部長（現在の名称は女性部長）への立候補を勧められました。折しも公示日は四日後の一月八日で、母が亡くなってからその四日間、選挙委員の方々が立候補を勧めに来られるので、はじめのうち夫は「祭壇も取れないうちに」と気を悪くしたようです。それでも、皆さんが通ってこられるものだから、「あんなに熱心に皆さんがいらっしゃる。おまえにその力量は無いかも知れないが、皆さんのお役に立てるのなら、受けさせていただきなさい」と私に言いました。しかし、私自身は、それまで組合活動に、たいして関心を持っていたわけではなかったので、正直どちらかと言うと、嫌々受けたよう

な感じでした。そんな成り行きで婦人部長を一年間務める事になりました。

実際に婦人部長になってみると、仕事を逃げているヒマはありませんでした。婦人部長は半専従でした。学級担任は持たず、給食の時間が終わると組合の方へ行くという生活で、今日は○○へ、明日は○○へと、アチコチの小学校の教員へ組合活動を広げる、いわゆる「オルグ」のために出かけていきました。私は四○歳の時に運転免許をとったので車の運転が出来て、あちこちの学校に行くのに、これも便利でした。興津川の奥にある小学校まで行き、先生たちと話をします。組合運動を知らなかった私が出来る事は自分の経験を話すことでした。出産の前日まで仕事をして、産んですぐ又、職場復帰をした話をしては「産後休暇、育児休暇の要求をしていきましょう」と話します。話し合いが終わると、支部長にこの話をして、要求をまとめていきます。産後休暇、育児休暇のほかに、労働条件や賃金引上げなどです。

婦人部長になった年の四月に飯田東小学校が開校、私は地元の小学校へと希望を出し、ここに転任しました。自分の子どもが通っていた頃は、赴任できなかった地元に、最後の勤め先をと希望したのです

清水市立飯田東小学校で退職の一九八五（昭和六〇）年三月までを過ごしました。

目の前にあるものに、幸せを見つけて

退職後は夫と旅行などによく出かけました。夫はJA静岡経済連の勤め人で、煙草は吸うけどお酒は飲めなくて、人の面倒をよく見る人でしたね。七○のとき、亡くなりました。三歳下の私は六七でした。仕事を自由にさせてくれた、私にとって夫は「共に生きる人」でした。

私は人前に出るのが苦手で、先頭に立って何かをしていこうと強く願ったこともなく生きてきました。教師になったことは、とてもよかったと思ってますよ。でも、それだってね、私は自分の妹や弟たちと接する

ように、子どもたちと過ごしてきただけなんですよ。私は五、六年くらいの子どもたちと一緒にいてちょうどいいんです。子育てと仕事を終えた、教え子たちから連絡があって、今でも一年に一度の同窓会に出かけていきますよ。

（注1）豆腐をつぶしたものにひじき、きくらげなどを入れて丸めて揚げたもの。がんもどきともいう。昔は小麦粉を使っていたようです。

（注2）実際にこの東麻工場で働いていた朝鮮人女性の証言を記したものに、このような記述がある。「李・姜の労働時間は七時から一八時半であった（当時働いていた日本人従業員によると日勤は七時から一七時まで、昼休みは三〇分であったという）。」また、二交代制で働いていた別の女性によると「早番の週は七時から一四時、遅番の場合は一四時から二一時ないし二二時まで」という証言もある。（静岡県近代史研究・二二・小池善之・一九九六年より）

（注3）そばやうどんなど、一杯盛りのものを運ぶ箱をけんどん箱と言う。ここでいう「けんどん」はもともと磐田通信学校に残っていたもので、通信学校の兵隊が使用していたものであろう。

（注4）当時と言えば、前年の終戦以降、マッカーサーが日本の統治をし、一九四六年一月に天皇の「人間宣言」があり、二月から一九四九年まで国内巡行が行われていた。そんな状況の中、女官たちが富士山の周辺に来ていた理由は不明。

思い出――俵萠子さんのこと――

西澤　功子

俵萠子美術館にて（2006年9月）

はじめに

先日、久しぶりに本棚に俵さんの本を見つけて読みすすむうちに激しくこみあげてくるものを感じた。それは『子どもの世話にならずに死ぬ方法』の中に「三〇年前、団地の中で二人の子どもと仕事をかかえ、誰一人も支援してくれる人のいない核家族の若い母だった私があのすさまじい日々を今ではすっかり忘れていたのに――」の一節を目にしたからである。ちょうどあの頃私も幼稚園に通う男の子を育てながら仕事を続けていたので、忙しい毎日を過ごしていた。特に俵さんは新聞記者という仕事柄、時間的にも制約があって口

では言えないほどの御苦労があるのによく続けて来られたと頭の下がる思いである。

俵さんとの出会いとその後の女性史研究会の誕生については『静岡の女たち』第五集に書いたので、ここでは要点だけ記してみたい。

初めてお会いしたのは一九七六（昭和五一）年、SBS学苑で主婦を対象にした教養講座が企画され、講師に評論家の俵萠子さんが毎月一回、つづけて六回来静すると知り私は有休を使って出席した。

やがて予定の講座も終わりに近づき数人の友人もできて「何かやりたいね。このまま別れるのは惜しい気がする」と仲間意識が生まれた。

友人の一人に北海道の北見女性史研究会会員で開拓団の聞き書きの経験もある大村好美さんがおり、私はいつか静岡でも女性史を学んでみたいと考えながら何ヵ月かが過ぎた。まもなく静岡大学教授小和田哲男氏（当時）の女性史講座が中央公民館で開かれると知り、大村さんが受講した。

やがて私たちの希望など快く相談に乗って下さり一九七七（昭和五二）年、まったく歴史に関しては素人ばかりだったが、会員八名で「静岡女性史研究会」が誕生した。

教育委員になって

俵さんは、一九三〇（昭和五）年、大阪市内で生まれ文章と絵を描くことの大好きな活発な女の子だった。一九五三（昭和二八）年に大阪外国語大学フランス語学科を卒業後、サンケイ新聞社へ入社、主に育児、教育記事担当の記者となる。一九六五（昭和四〇）年に退社し、家庭、教育、婦人問題を中心に評論家として幅広い活躍をされる。また

「俵さんは教育問題に詳しいしこれは第一回めの準公選です。大事な仕事ですから地域のためにひと肌ぬいでください」

とPTA活動をしている主婦たちに乞われて一九七八（昭和五三）年から日本初の準公選・東京都中野区の

教育委員を七年間務めた。区民が選んだ委員なら父母の声に耳を傾けてくれると期待され、中野の教育を良くする会も誕生した。

戦後の教育委員会は一九四八（昭和二三）年に公選制がスタートしたが、教職員組合員の大量当選などの問題が出て、一九五六年から自治体首長による任命制になる。中野区では区民投票による選出を求めて区に直接請求、一九八一（昭和五六）年に第一回区民投票が実施されたが、国の制度ではない自治体の条例による独自の制度なので、文部省が中止を求めるなどして四回実施後の一九九五（平成七）年廃止された。

その後委員たちは父母の開く集会や学校にこまめに足を運び、栄養士や司書を学校に配置するなどの施策を打ち出した。しかし素人の委員が現場に口出しするのを嫌い「最後は政治家の駆け引きや取引に利用されたのでは」とも言われる。

もういちど

俵さんの著書『命を輝かせて生きる』によると、四一歳のころ、急に東京がいやになり田舎に住みたい、田舎で子どもを育てたい、と思うようになった。とはいっても子どもの意志もあり、夫もたぶん田舎暮らしなんて大嫌いな人のようである。反対されて波風たてるくらいなら、今しばらく辛抱しようと思い始めた翌年、離婚することになり「なんと皮肉なことか」と。「あの時私はもう一度人生をやり直したいと思っていた。いい男に出会いもう一度私の考える男女の形を生きてみたい。いつか子どもたちが成長し学校の問題がなくなってお金の心配をしなくてもよくなるまで無理はしないことにしようと思いとどまった」

よしここに決めた

一九八七（昭和六二）年二月一八日大雪の日、俵さんは東京から前橋までタクシーを飛ばして雪の止むの

を待って赤城の裾野へ出発、不動産屋と落ち合った。女二人長靴をはき、手にはそれぞれスコップを持って、一メートルほど積もった雪の下の沢をさがす。雪の間から覗いている透明なきれいな水の流れを見て指を入れてみる。思ったよりあたたかい。その瞬間俵さんの気持ちは決まった。

五〇歳で土地探しを始めて三年、群馬の森の中に手ごろな廃居のついた土地を見つけた。群馬県は亡くなった父上のふるさとで、地縁も血縁も友縁もあり「まるで父に手を引かれるようにして、私はその家に住むことになった」と何かに書かれていた。それから運転免許証を取得し東京の家から片道二時間かけて何回も往復する生活が続くことになる。そのお気に入りの森は八四〇坪、そのうち半分は保安林で木が繁っている。赤城出身の父上が

「いい山だよ、優美に裾を引いていて富士山の次に美しい山だよ」

といつも話してくれた山である。白樺はじめ五葉松、楓、梅、ケヤキ、椿、杉などの大木も先住のおじいさんが植えてあったし、動物はキツネ、リス、野うさぎなどが住んでおり、もちろん鳥類もいろいろいて四季折々楽しませてくれた。庭園内を流れる沢の水源は二〇〇メートル上の湧水で農薬を使わないので夏には蛍がとびかうそうだ。

その頃のことを『私の選んだ第二の人生』でこんな風に書いている。

「人は私のことを評論家というけれどエッセイも小説も書くし、絵も二二歳まで描いていて五四歳で再開し、焼きものは五〇過ぎて知り合った元中学校校長先生に『いつかやりたいと思っているなら、今、やってごらんなさい』と進められて始めた。三年間独学をやってみて、今ひとつ自分の作品が垢抜けないことに悩んでいた。やっぱり一度はプロについて本格的に勉強してみたいと思ったのが熊本県八代市の高田焼窯元酒井雅女氏に弟子入りした動機である」東京からはあまりに遠いがそれから四年間、二〜三ヵ月に一回飛行機で

通った。その時は四日から一〇日休みのとれ具合で必ずホテルに滞在した。ペーパーかけ、絵つけ、釉がけとそれはそれは専門的に学ぶこと四年、念願の「俵萠子美術館」のオープンにこぎつけたのは一九九五（平成七）年七月だった。

私たち藤枝市男女共同参画推進センター「ぱりて」の会員五〇余名は二〇〇六（平成一八）年九月、大型バスに乗って片道四時間余りかけて待望のお山の美術館を訪問した。関越自動車道の前橋インターでおりて新潟渋川方面に向かうこと約三〇分、赤城山のふもとの雄大な自然の中に、絵を描き焼き物も作りたいと夢工房を作り、大勢の方が焼き物の勉強に通っているそうだ。

藤枝市学習センターにて（2005年6月）

実は一九九八（平成一〇）年初春〈書と陶芸の二人展〉という案内状をいただいた。

「乳癌手術から二度目の春を迎えました。一年間動かなかった右手がやっと使えるようになりロクロがひけた喜びはたとえようもないものでした」

と術後初めて完成させた作品を新宿の高島屋で友人の書家佐藤政忠氏と展示会をされるというものだった。早速焼きものにくわしい友人を誘ってかけつけた。あの会場に飾られていた見事なツボも並べられていて、私は嬉しさいっぱいだった。

お昼の食事はスタッフ一同お手製の食器に美味しいカレーを用意して、私たちの到着を待っていてくれた。赤いお洋服の俵さんは気のせいか元気のない様子ですぐ椅子に座る姿に少し体調が……と思った。所せましと並べられた作品は小さなアクセサリーから大き

な抱えるのがやっとのツボまで並べられていた。各々作品を見ながら気に入ったものを見つけて買うこともできて、時の経つのも忘れてたのしい時が流れた。帰りはバスの所までみんなで歩き、俵さんにも送っていただきながら、「今度は泊まるつもりでゆっくりいらっしゃい」と声を掛けていただいたが、バスの窓から姿が見えなくなるまで手を振ったのが最後になってしまった。

平成二〇年一一月二七日永眠（七七歳）。

おわりに

今になって考えてみると私の気がかりだった俵さんの元気のなさは間違っていなかったようだ。美術館訪問から一～二ヵ月経った頃、妹さんのお便りが添えられてサイン入りの著書『命を輝かせて生きる』が届いた。相変わらず忙しい日々を過ごされていると思い、簡単な礼状を妹さんに書いてしばらくそのまま日が過ぎた。

そんなある朝、新聞やテレビが俵さんが亡くなられたと報じていて大変驚いた。静岡新聞の夕刊に友人の評論家吉武輝子氏の書かれた追悼文を見つけた。〈友逝きて　冬天雲のかぎりなし〉の句で始まる五〇年来の友人であったことなど。

同じく評論家の樋口恵子さんと三人娘という形で、この頃は交流をしていた様子など書かれた後、こんな会話が紹介されていた。

「ねえ、いい時代に生まれあわせたわね。青春時代の夢が実現でき、老いては人に役立っているという実感を抱きながら生きられるのですもの」とある時言った俵さんの言葉がまざまざとよみがえり、その時ふと口をついて出たのが先ほどの俳句だとのこと。吉武さんはまた「人生五〇年時代は社会が規制する役割の優等生たらんと奮闘努力するうちに、夢は夢のままに消え果ててしまっていた。しかし倍生きられる百年時代は女は母親という役割から解き放たれた後、そして男は定年後、かつての夢を花開かせることが可能になった

のである（後略）」と。

俵さんは、『ママ日曜でありがとう』を三四歳で出版し、女性問題、定年問題、老後の生き方についてなど六〇冊ほどの著書がある。評論のみならず小説もエッセイも書き、講演も依頼されると全国各地を訪れ、いつもパワフルで何事も中途半端ではなく、真剣にとり組み、困っている人、迷っている人などには笑顔で手をさしのべる神経の細やかな方だった。たとえ社会の価値観や人々の生き方が変わっても、俵さんと会えたことに心から感謝し「どうぞ安らかにお眠り下さい」と心の底からお祈りしたい。

《参考資料》

『俵萠子の教育委員会日記』俵萠子、毎日新聞社、一九八二

『今日が一番若い』俵萠子、海竜社、一九八七

『人生に定年はない』俵萠子、海竜社、一九九二

『生命を輝かせて生きる』俵萠子、海竜社、一九九六

『癌と私の共同生活』俵萠子、海竜社、一九九七

『生きることは始めること』—七十歳の挑戦、俵萠子、海竜社、二〇〇一

『六十代の幸福』俵萠子、海竜社、二〇〇三

『子どもの世話にならずに死ぬ方法』俵萠子、中央公論社、二〇〇五

静岡新聞夕刊、二〇〇八・一二・九

朝日新聞夕刊、二〇一三・五・二五

俵萠子美術館“五月の庭”

新たな地平を目指して——女性の拠点づくりとネットワーク

近藤　美津江（こんどうみつえ）一九五一（昭和二六）～二〇一三（平成二五）

聞き書き　川井陽子・大塚佐枝美

近藤美津江さんが亡くなってまだ半年も経たないある日、静岡市三番町のご自宅にお邪魔して、ゲームをして遊ぶお孫さんの傍らで、母親の美代さんからいろいろとお話を伺いました。

近藤美津江さん

仕事一筋は父親ゆずり

語り手　母　近藤　美代（八六歳）

静岡大空襲——結婚

私の一番上の姉は、静岡市四番町で塗装業をしていた近藤長吉と戦時中結婚しました。

番町のあたりは、徳川三代将軍家光が静岡浅間神社を造営するとき、社殿に漆を塗るため、全国各地から漆工を集め、このあたりに住まわせて仕事をさせたと言われています。

工事が終わっても国元に帰らず、漆器の製造に従事

した職人たちが、この番町界隈に指し物・蒔絵・雛具・竹細工などの職人として住みつくようになり、時代が進むとともに、駿河の手工芸品の一大生産地となりました。

一九四五（昭和二〇）年六月一九日から二〇日にかけて静岡大空襲がありました。四番町に松山さんという大きいお屋敷があり、結婚会館をやっていました。その近くの防空壕で、近藤家一族郎党、嫁いでいた姉、その子どもたち三人、長男家族を含めて一七名が死んでしまったのです。当時、私は県庁に勤めておりましたが、姉や子どもたちの見るも無残な様を、忘れることはできません。近藤は幸いにも三島の連隊に出征中で、終戦と共にふるさとへ帰ってきました。近藤家の死亡した人々の霊を弔う女性がいなくなってしまったのです。このことを案じた両親の計らいで、まだ未婚であった義理の妹の私に白羽の矢があたり、一八歳で義兄と結婚することになりました。この惨状を救うのは私の役目だと思って嫁いできました。

幼少時代

近藤はこの職人街で仏壇や下駄の塗装の仕事をしておりました。私は家事をしながらも夫の仕事の手伝いに追われてました。敗戦後の医療事情の中で、誕生まもない赤子をそれからそれへと五人、名も付けられないまま失いました。そうして六人目の女の子美津江が、昭和二六年二月二五日に生まれ、やっと大きく成長しました。だから美津江は長女で一人っ子です。

幼いころの美津江は、近所の遊び相手になってくれるおばちゃんの所へ行っては、夜は九時過ぎまで遊んでくる、「手のかからない子」でした。父親は針仕事が好きで、繕いなどボタンが取れても、苦も無くやってのける人で、美津江はなんでも父親に相談してました。普段目をかけてあげられなかった分、父親の親ごころで、七つのお祝いには着物を京染に出す、お雛様は二階建ての御殿の内裏様、というふうに、最高のも

のを用意してお祝いしました。（よく整理されたアルバム帳に可愛い美津江さんの写真が何枚も保存されていました）

七〇年代はいい時代でした。父親は「一日遊ぶと一日分が稼げない。いい時ばかりではない。いい時に遊んじゃうとあとで困ることになる。無我夢中で働いて、基礎を作っておかなければお金はたまらないよ。お金は使うときにはいつでも使えるからね」「とったお金はお前が持っていればいいよ」と言って、家計は任せてくれました。娘を大学にやるにはお金がいるし責任があるなあと思っていましたね。仏壇を一週間に一〇本、ひと月に何本と計画を立てて仕事をし、面白味はないけれど、遊ばないで、よく働く人でした。近所の人に「いつ寝るの？」と言われました。美津江も医者にかかったことはない子でしたが、夫も丈夫な人でした。よく私に「人間は三時間も寝ればよい。寝過ぎると目が腐る」と言っていました。近所の人は「朝一番早く電気が点く家は近藤家で、夜一番遅く電気が消える家も近藤家だ」と言っていました。実直勤勉な仕事一筋の職人で、美津江は父親に似たのだと思います。

母美代さんと美津江さん

小中学校時代

小学校から中学に上がる時、入学式の折には代表になって、宣誓書を読み上げました。たいてい男の子が選ばれるところを、「なぜ女が？」と文句をつけた保護者もいたそうです。

末広中学校では、担任の長橋先生が用事で授業に出

られないときは、いつも「近藤、やっとけ！」と言われ、よく先生の代わりをしていました。（先生にとって、まかせられる、頼りになる生徒だったのでしょう）

高校受験を控えたころ、県立高校を目指していましたが、難関校に挑まなくても、安全な私立の雙葉へ行った方が安心と考え、教頭の島田先生のところに相談に行くと、「近藤は大丈夫だ」と太鼓判を押してくれ、「余分なお金を使う必要はない」と逆に説得されました。（素行、学業とも一級だったのでしょうね）

大学受験――東京へ

大学受験に際しては女子大も視野に入れていたようですが、やっぱり男女共学の方がよいという結論になり、日本大学を選びました。大学進学についてはすべて自分で決めました。受験料も自分で貯めていましたね。

あの子は本当に「始末屋」です。東京で一人で暮らし始めたばかりの頃、下宿の部屋の廊下にとりつけてある自分の部屋の電気メーターの下で腕組みしていたことがありました。おそらく　静岡にいた頃は家の光熱費のことなどまったく気にせず日々を過ごしていたでしょうが、一変して自分の生活費は自分で管理しなくてはならないと思ったようです。

そして、ある冬の寒い日、静岡の友だちが美津江の東京の下宿に遊びに行った折、部屋に暖房具が何もなく寒い部屋だったと、静岡に帰ってから家族に話したのが伝わってきました。びっくりして静岡の岩崎電気でコタツを買って、ただちに東京の下宿へ送ったことがありました。おそらく美津江は暖房がなくても何とか工夫すれば乗り越えられると思っていたのでしょう。

大学在学中、父親が病に倒れたことがあって、学生生活を続けられるかと心配したのか、防衛大学校をひそかに受験（学資免除でかつ合格の資格は五年間有効）。万一の時に移れる大学を確保してあったのには驚きでした。親の目から見ても二〇歳そこそこの娘としては誠に感心するばかり、幸い、父親は健康を回復

し、予定通り日本大学を卒業しました。

静岡市役所へ就職

公務員になったのは、母親の私が娘の頃県庁に勤めたことがあったということで、公務員を考えたのだと思います。三島の高校教師にという話もありましたが、一人娘だし、市役所ならば近くていいと公務員になりました。就職後も、市役所の制服が好きで、「制服を着てれば市役所の人だと思われる」「私服は必要ない」とほとんど洋服など作ることもなかったです。本当に「始末」な子でした。

通勤前に（1975年）

結婚

美津江と輝さんとの馴れ初めは静岡市内の企業と役所で働く人の研修会後の、打ち上げのパーティの席上で、たまたま隣の席に座ったのが縁で知り合いました。かねがね結婚相手には「親に負担をかけるのもいやだし、親が苦労するのを見たくはない。自分も精一杯働きたい。船乗りみたいな人を貰いたい」などと言っていましたが、夫となった輝さんは貿易関係のお仕事で一一歳年上。インドネシア語とか五か国語ができました。「日本にいただけではだめだよ。現地へ行かなければ」と言っていましたね。海外出張が多く、家を留守にすることが多かったですね。二人は意外と淡々とした夫婦でした。

美津江が夕方勤めを終えて帰宅すると、家の中に何か、ピンとした緊張感のようなものが漂ってきました

ね。子どもたちには父親の役割も担っていました。
美津江が幼稚園に行っていた頃、幼稚園の芋ほり、お遊戯会などの際は、「お前は仕事をしていればいい」と義母が行き、私は一度も行ったことはありませんでした。
そして、美津江の子どもたち二人の芋ほり、お遊戯会はすべて、私が行きました。美津江は「私は仕事をするから、幼稚園へはお母さんが行ってちょうだい」と、小学校、中学校、高校の保護者会などもすべて、祖母の私が美津江の代わりをやってきました。

闘病生活

乳癌発病は一一年前、その頃は常人と変わりなく平気な顔して勤めていました。
しばらくして、咳が出るものだから見てもらうと、肺と心臓の間へ転移していることがわかり、県立総合病院で、手術をしました。その折はうまく取れました。
脳に転移した頃からは、一家をあげて、県内また東京の病院通いを続けました。しかし主治医の指示に忠実に従っていたにもかかわらず、病状は悪化の一途をたどりました。
退職の二年ぐらい前はふらふらしながら通勤していました。嫁が朝送って行くと、職員が玄関のところで車いすを持って待っていてくれました。トイレへ行くときも男ばかりの部下が、柱の陰に隠れちゃあ待っていてくれました。倒れると困ると思って。いい人たちでした。
「気を使ってもらって悪くてしょうがない。今季で辞めるよ」と言って辞めたのは五九歳、おととしの三月のことです。
ある年の暮れに信頼していた主治医から「今年中命が持たない」と宣告された時はさすがにショックだったようです。しかし友人、同僚たちに励まされ、その後二年生き永らえることができました。（死の宣告をされた美津江さんはどんな気持ちで日々を過ごしていたのでしょうか。この間に父親と夫も亡くしています）

入院中、看護師の不手際を厳しく注意することもあり、ハラハラしました。仕事に関しては誰に対しても厳格で、正確さを要求しました。入院しているときも、息子が行くと仕事が大事だと追い返す。ぐずぐずしている人を見るとやきもきしてくるらしく、看護師さんたちにも世話を焼きました。「あなたたちそれが仕事でしょ。仕事は手際よくやらなくては駄目だよ」と厳しかった。リハビリのときなどしゃべりながらやると、「しゃべっていると手がお留守になる。貴女手も動かし、口も動かさなきゃダメだよ」と。

葬儀の後で、市役所の女性職員の方達が「親のように叱ってくれました」とわざわざ感謝を言いに来てくれました。

「血筋の者がいなくなってしまう」

静岡市の青少年海外派遣団の副団長として中国を訪問する同市教委婦人青少年課主査

近藤　美津江（こんどう　みつえ）さん

（静岡市三番町26）

静岡市生まれ。城北高から日大を卒業し、四十八年に市役所へ就職した。福祉事務所、人事課などを経て、四年前に新設の婦人青少年課へ。同時に幹部職員の登竜門である主査試験をパスした。二人の男の子の母親。三十五歳。

◇　◇　◇

団員は中学生、高校生が中心。副団長は大役だ。

「団長が父親なら私は母親役。潤滑油になれば、と思う。幸い中国は二回目で、訪問先の北京、上海は行ったことがある。団員が健康で日程を消化できるよう連絡調整に当たりたい」

子供たちが多くのことを学んでくれたらと願う。

多くのことを学んでほしい

「早いうちに外国との交流を持つことは素晴らしいこと。異文化を肌で感じることは本で読むのとまったく違う。特に中国は近くて遠い国。歴史の豊かさ、大陸の壮大さを味わってほしいし、その中に住む同世代の若者の生活ぶりをじっくり見てもらいたいですね」

これからは青少年だけでなく、婦人たちも積極的に国際交流の表舞台へと強調する。

「最近、婦人たちが留学生などを積極的に受け入れるようになっている。家庭の国際化が進んでいると言えるのでは。併せてどんどん外国へ行けたらいいですね。婦人がこうした取り組みを深めれば、最も大切なふだん着の交流が大きく輪を広げるでしょう」

婦人問題を担当して四年。女性の社会参加に熱い視線を注ぐ。

「婦人の意識は大きく変わってきている。仕事への考え方も例外ではない。その意味で国連婦人の十年は意義があったと思う。今後、夫婦間の協力という問題が、より重要なテーマとなってくる。そんなところを今回の訪中で勉強したいですね」

常に前向きの姿勢がすがすがしい。自身を含めて、ここ当分は婦人が働き続ける意味を追究していきたいという。

静岡新聞（1986年7月25日）

と言う私に、美津江は「子どもたちはおばあちゃんが小さいころから育ててくれた。絶対忘れることはないし、粗末にすることはないよ」との言葉を残して逝きました。今は、美津江に代わってひ孫育てをしています。

（二〇一三・六・七）

近藤さんと私

川井　陽子

五月のいつ頃だったか友人のSさんが、静岡新聞を持って家に訪ねてくるなり「近藤さんって中国へいっしょに行ったあの近藤さんだよネ」と言って、記事を見せてくれました。

「そうだよ、この人だよ。エッ、亡くなったの？」

もう四〇年も前に静岡県青少年友好使節団で中国へ行ったことがありました。彼女は小学生の息子さんと一緒に参加していました。団員は八〇名位。彼女はたぶん一〇人位の班の班長さんだったと思います。Sさんと私は団の役員でした。毎日、夕方、団の班長さんに集まってもらって、ミーティングをしました。訪問先で日中青少年の交流会がありましたから、班長さんになにかとお手伝いをお願いすることがありました。

Sさんは近藤さんの適切なフォローに助けられたことがあって、市役所の婦人青少年課に「気のきく良い職員がいる」と印象深かったと言いました。

私は中国旅行以来、彼女の清々しさが好きで、良い知人として、役所や街で行き会うと立ち話をすることが多くありました。

彼女の死の原因となったのが乳癌と知って驚きました。私自身二〇年前と昨年、二度の乳癌切除手術を受けましたが、のん気に「いまどき乳癌で亡くなる人はいない」と思い込んでいました。彼女の病名を知ってほんとうに残念なことだと思いました。

今回近藤さんを『しずおかの女たち』にとり上げることになりました。お母さんから、幼少期の彼女のことを聞き取りすることになりました。誰が担当するかということになって、その場にいた私は、私の知らな

かった「病気」のことをぜひ聞いてみたいと思い、ご自宅に伺うことにしました。

乳癌といっても、その部位や発見した時期などにより、いちがいに治る病気とは限らないことを実感しましたが、何といっても残念なことです。

私が近藤さんに最後にお会いしたのは、二〇〇六年の秋、名古屋大学へ来ていた中国人女子留学生が静岡に遊びに来たので、街を案内して県庁を訪問した時、東館前で彼女とバッタリ会いました。市役所の制服を着ていないので「もう退職したの？」と声をかけたら、「まだだよ」と笑顔で答えが返ってきました。彼女は私より一〇歳若かったから、まだ数年早い勘定です。「ゴメンゴメン！」と謝って別れましたが、あの頃彼女はもう病魔と闘っていた頃だったのですね。「元気でね」という言葉もおそらくかけなかったと思います。そんなそぶりは全然ありませんでしたから。白いブラウスを着ていつものように美しく凛とした彼女のあの時の姿が目に浮かびます。

（二〇一三年一一月）

アイセル21誕生前史

大塚　佐枝美

市役所の職員の中で、二五年ぶりの一番若い、女性係長ということを新聞紙上で拝見したのは一九八八年のこと。お隣に住む堀江さんから時々お話を伺っていました。近藤さんとはごあいさつ程度のお付き合いではありましたが、今回、美津江さんの母美代さんからお話をお聞きするという貴重なる出会いの機会を与えていただきました。

アイセル21の建設は美津江さんの力なくしては実現しなかったと聞きます。

女性会館づくりのきっかけは一九七六（昭和五一）年に始まった国連婦人の一〇年です。国連婦人の一〇年は平等・発展・平和の目標をかかげ、男女の平等の実現と女性の地位向上を目指して全国的な盛り上がりをみせていました。

静岡市でも「平和と住みよい地域、静岡を築く」という強い願いで様々な女性の活動が芽を吹き始めまし

た。

一九七三（昭和四八）年、大学を卒業し市役所職員となった近藤さんは、福祉課を二年、人事課、再開発室を経て一九八三（昭和五八）年六月に静岡市教育委員会婦人青少年課に配属になりました。婦人問題を担当し、以後、市内の女性たちの声を反映させる窓口の役割を演じることになります。時に三三歳、二児の母でした。

まずはＰＲが中心と宣伝を兼ねてレディーズサロンを七回、翌年には家庭にこもりがちな女性のための行政出前講座〝ふれあいセミナー〟を開き、女性たちのネットワークの意識の醸成に努めました。アンケート調査の結果では、市内には二〇〇幾組の女性団体があることがわかりました。

一九八四（昭和五九）年一一月には女性団体・グループ代表者会議が開かれ、それを機に三七団体・グループによる「しずおか女性の会」（代表・北條愛子）が発足したのは、翌年の七月のことです。折しも「国連婦人の一〇年」の最終年にあたります。会の発足は行政の支援があって実現したものです。

その中で見えてきたのは、女性のための活動拠点がないということでした。女性グループは公民館、県婦人会館、労政会館、職員会館など、会場を求めて右往左往していました。是非活動拠点をということで「市長と対話を広げる会」を一九八六（昭和六一）年の二月七日、静岡労政会館で開き、市政に提言、要望をまとめ提出しました。河合代悟市長は「六一年度スタートの第六次総合計画に盛り込み、そう遠くない時期に建設する」と約束。翌年の一月二〇日には再度「市民と対話を広げる会」を開催し、婦人会館は学習活動、生涯教育、再就職のための資格取得の場、あるいは憩いの場など、様々な機能を持たせ、設立や運営は是非とも女性の声を取り入れて欲しいなどとの要望書を提出しました。

その結果、婦人会館建設は一九八九（昭和六四）年

この人

開設一周年を迎えた静岡市婦人青少年課主査
こんどう　みつえ
近藤　美津江さん
（静岡市三番町二六）

婦人に望みたい「積極性」

静岡市生まれ。市内の小、中学校から県立城北高校を経て日大の法学部へ。四十八年卒業と同時に同市役所職員となる。福祉畑を二年、以後人事、再開発室を回り、五十八年六月、婦人青少年課開設に合わせて同課へ移る。婦人問題担当。市内の婦人たちの声を行政に反映させる窓口はこの人だ。二児の母。三十三歳。

◇　◇　◇

昨年一年間の同課の事業はPRが中心。

「まずは市と婦人青少年課ができたことを知ってもらうのが先。と昼休を兼ねてレディースサロンを開いてきました。計七回の開催で、さまざまな分野の婦人の声を拾うことができ、それなりに効果は上がったと自負しています」

二年目の今年は、いよいよ内容が問われる。

「今年は少し対象を絞ってみました。二十代、三十代の子育て期に当たる主婦は、どうしても家庭の中にこもりがち。そんな婦人たちのための行政出張講座〝ふれあいセミナー〟（仮題）が新事業のメーンです」

これからの婦人に望むのは積極性と自主性。

「夫が何もしてくれない、周囲が自分のことを分かってくれないといった受け身の態度は感心できません。静岡の婦人は特に静か。反応は少ないし、中道を行き過ぎると思います。問題解決の視点を支えるのは個々の心にある不満。今のままではいやだ、と言える婦人が多くならなければ」

男性の側の意見も問題解決には重要なカギとなるのでは？

「河合市長の考えは『私はよきパートナーになりたい』です。社会の中で婦人はアシスタントではなく、あくまでパートナー。男性の側からもパートナー意識の高揚を図ってほしいですね」

休日は一人の家庭婦人に戻って二日中子供たちと遊ぶのが楽しみという。

静岡新聞（1984年6月9日）

の市制一〇〇周年を迎える年の記念事業と位置付けられました。一九八六年九月、「しずおか女性の会」は活動拠点施設の建設に向けて――婦人の活動拠点の場をつくろう――と市民のつどい・シンポジウムを開催し、名古屋婦人会館を見学し、プロジェクト学習会を重ねて（仮称）婦人会館基本構想をつくりあげました。それを「仮称婦人会館基本構想について要望書」として一九八七（昭和六二）年一二月に市長に提出します。

仮称婦人会館は静岡市駿府町の市民文化会館の西側に、ワンフロア、半地下一二〇〇平方メートルとして隣接の地に計画されました。一九八九（昭和六四）年オープンを目指して、一級建築士望月美佐枝氏に設計を依頼し、設計図が出来上がりました。

その頃、女性は、子どもと同等に扱われ、担当部局は教育委員会婦人青少年課でありました。その中にあって婦人問題担当の近藤さんは、孤軍奮闘。当時、県内の三市に女性の課長級が任命されていましたが、

市制一〇〇年を迎える静岡市には女性係長すら存在しませんでした。当時の女性職員は、朝は男性より早く出勤し、各職員のお茶の支度、夕方は後片付けと掃除などで遅く退庁していました。また、共稼ぎの職員は夫の昇進のために妻は退職させられていました。全市的・全庁的に女性問題解決へ向けての政策を推進するには、一人の職員では到底不可能であるからと同課に所属した堀江剛氏は女性政策係の設置と近藤さんの係長登用を天野市長に提言しました。

それが認められ、一九八八年、初代の係長となった近藤さんは静岡市における二五年ぶりの女性の若い係長誕生ということでメディアにも再三取り上げられ、話題になりました。それを筆者も目にしております。

一方、国政の方は、一九八九年七月の参院選では、日本社会党が大躍進しました。宇野総理の女性問題が発生した年でもあり、女性が過去最高一二人が当選し、「マドンナ旋風」とも言われ、五五年体制下の参院で初めて与野党が逆転しました。八月の参議院で土井たか子が内閣総理大臣に指名され、「山が動いた」との名言が残された年でもあります。

仮称婦人会館の建設予定地は城内風致地区内にあり、許可権者が知事にあり、同地区の建ぺい率は四〇パーセントであるのに対して設計図は四一・六パーセントであるからとの理由で建設許可が下りませんでした。一九八八年八月一四日に建築着工が半年延期になったと報道されました。同月二五日にしずおか女性の会代表一〇名は天野市長を訪問し、今後の見通しについて説明をうけ、「風致条例はクリアできるはずだ」との回答を得ます。しかし結局は市民会館隣接地での建設は断念せざるを得なくなります。支出済の設計委託料一億六一一二万円が無駄遣いに終わったのではないかとの住民監査請求が提出されますが、これは退けられました。

その間の担当者であった近藤さんの葛藤たるや、計り知れないものがありました。その後、婦人会館の候

補地を単独で交渉したといういきさつについて、堀江氏の言葉を借りますと「コンちゃんは孤立無援の中で武蔵坊弁慶のように一身に批判の矢を受け、そしてたった一人で県庁に乗り込み、県知事と直談判し、知事から『県の職員会館用地を市に譲るから市の中央公民館と合わせて婦人会館を考えてはどうだ』という答えを引き出し、市政の危機と難局を乗り切った。その気迫と豪胆さは当の市長以上でまさにジャンヌダルクのようでした」と。

以後、現在地に女性会館「アイセル21」が建設される過程については、高野康代氏の書かれているところを参考にしていただきたいと思います。

「しずおか女性の会の活動と並行して、忘れてならないのが行政の力である。世界の趨勢をキャッチする行政パースンが複数存在していたことである。女性たちが官民一体となって、社会を変革する一歩に参画した」という、当時の「しずおか女性の会」のメンバーの言葉があります。

女性の社会参加を目指して活躍する女性の声を結集し、女性たちの拠点づくりをという熱い女性たちの思いと行動がなければ、女性会館の誕生もなかったし、それを吸い上げる行政ウーマンとしての近藤さんたちの手腕がなければ、今日のアイセル21の誕生はなかったと言えます。近藤さんは「仕事としてやった」のだからと、あくまでも黒子に徹し、自らの功績とすることを望みませんでした。

生みの苦しみを味わった人たちのことを深く心に留めておく必要があると思います。

近藤さんは役所の中にあって、男性女性からも支持され、若くして管理職に就き、後輩たちを育て、引き上げるにことに情熱を捧げてこられました。その原点がどこにあるかをまずは母親の美代さんからと尋ねてみましたが、まだまだ語りつくせない思いがしております。今後影響を受けた方々の実績や掘り起こしの中で解明されていくことでしょう。

「親や夫を見送るのは当たり前のことだけど、娘が先に死ぬほど切ないことはない」と涙ながらに語る美代さん。「こうして人が訪ねて下さって、娘は幸せものです」「夫と娘夫婦の霊も併せて弔うことになった」と言われる。

ひ孫を相手に「いい子、いい子」と言葉を掛けながらお話下さった美代さん。庶民的な、あたたかなお人柄で「この親にしてこの子あり」の思いを胸にお宅を後にしました。お父さんの手になるというご仏壇はとても立派なものでした。

菩提寺の松源寺のお墓からは静岡市役所の建物がよく見えるそうです。美津江さんは遠くから市役所で働く同僚・後輩を叱咤激励していることでしょう。

「あんなにも市政発展のために命を削って尽くしたのに、あんなにも全女性の権利と地位の向上のために、身を挺して闘ったのに〈人生の春〉を待たずに、桜の咲くのを待たずに〈千の風〉になって、一人で歩いていってしまった」との堀江氏の嘆きと悲しみを、静岡市民一同で共有したいと思いました。

「一粒の麦もし地に落ちて死ななければ、ただ一つのまま残る、死ねば多くの実を結ぶ」

（ヨハネ伝一二章二四節）

《参考資料》

静岡新聞（一九八六・二・七）（一九八六・七・二六）
（一九八七・一・二一）（一九八八・八・二六）
（一九八八・九・二二）（一九八九・八・二四）
（二〇〇二・五・三一）（二〇一三・五・一〇）
しずおか女性の会一〇周年記念誌・二〇周年記念誌

《協力者》

堀江剛　松下光恵　守屋秀子

近藤美津江さんと「婦人係」のこと

元静岡市職員　高野　康代

「婦人問題担当」から「婦人係」誕生まで

近藤さんと初めて出会った時のことを、実はあまり

覚えていない。仕事で関わる機会もなかった頃に、市役所女性職員の自主研究グループ（自主研）に誘われて、いつの間にか一緒にいた。ほとんど面識がなかったのに、最初から、かなり長く付き合ってきたような錯覚を持っていた気がする。この人は私をよく知っている、と誰にも自然に感じさせてしまう人だった。

この自主研は、発足当時、静岡市が初めて設置した「婦人問題担当」の主査であった近藤さんが呼び掛けてできたものである。

一九七五（昭和五〇）年の国際婦人年以降に国や地方自治体で進められた、女性の地位向上と差別撤廃の動きの中で、静岡市の動きは遅れていたが、一九八三（昭和五八）年、教育委員会の婦人青少年課婦人青少年係に近藤さんが配属され、市初の「婦人問題担当」としての役割を担

招待席

女なるが故の責任

静岡市教委婦人青少年課婦人係長
近藤美津江

女性が働く場合、家事も育児も完ぺきにこなし、仕事も男性と同等にやる。そしてあくまでも控えめに…そうでなければ一人前とは認めないという上司がいた。

一方、別の上司からは「女性であるが故に、少し頑張れば目立つ、それが評価されるかもしれないがそれでおごってはいけない。君がやっていることは男なら普通である。女の意識を捨て、意見は積極的に言い、仕事から逃げてはいけない。時には、生命をかけて仕事をしなければいけないこともある。高いレベルに果敢にアタックせよ」としった激励された。

前者について言えば、私は親と同居しており父母に支えられての家事・育児であり、完ぺきとは程遠い半人前ということになる。

後者についても、仕事から逃げないかといえば自分の力ではいかんともしがたく思い悩む時があり、これも失格である。

こんな状態にもかかわらず、二十五年ぶりの女性係長誕生などと報道され、祝電や激励が庁の内外から寄せられた。女なるが故に話題にされるのであり、責任をずっしりと感じている。

女なるが故に言われることがある。能力は別として、女の係長の下なんかで働くのは絶対嫌だと言う同僚がいる。本音であろう。私のもとに配属された男性職員の心情いかにと思う。

しかし、当係は新国内行動計画に沿って男女共同参加型社会の形成を推進するのが仕事である。半人前の私が言うのもおこがましいが、足元からの実践のために“やるっきゃない”…誠実に働くのみである。

静岡新聞（1988年5月11日）

うことになった。配属後程なくして近藤さんが自主研の呼びかけをしたのは、市役所内に分散している数少ない女性職員が情報交換したり励まし合ったりできるネットワークを創りたい、という趣旨からであったが、同時に、それまで全くレールの敷かれて来なかったこの仕事に取り組むにあたって、「婦人問題」の当事者である女性職員が自由に語ることのできる場を確保し、その意見やニーズを婦人問題担当の仕事に活かそうとしたからだと思う。自主研メンバーは近藤さんをリーダーとする一〇数名。講師を招いて学習会を開くほか「女性職員の働き方に関する意識調査」を行うなど、ささやかながら市役所職員が自らの問題として「婦人問題」に向き合う取組をして来たと言えるだろう。

婦人問題担当としての近藤さんのミッションは、従来の「婦人教育」（社会教育事業としての婦人学級等の開催や地域婦人団体への支援等）から「婦人問題行政」（女性の地位向上や男女共同参画をめざした総合的な取組）へと施策の幅を広げることであった。近藤さんはまず、新たな女性のネットワークづくりに取り組んだ。大小を問わず多様な団体に呼びかけてネットワークづくりのきっかけをつくり、行政としてその支援に力を注いだ。そして一九八五（昭和六〇）年、「しずおか女性の会」（以下「女性の会」）が発足する。

「女性の会」は、翌一九八六（昭和六一）年、市に女性の活動拠点についての要望を出し、市はこれを受けて第六次総合計画の中に「（仮称）婦人会館」の建設を位置づけた。以後、「婦人会館」建設に向けた活動を開始することになる。一九八七（昭和六二）年には、「（仮称）婦人会館基本構想」を作成して、あるべき「婦人会館」の姿を明らかにし、市に提出した。

この構想は、近藤さんが行政側の中心として全面的に支援し、市民女性と市職員がともに練り上げたものであったと言えるだろう。構想づくりは、会館の建設実現に直接つながっていっただけでなく、「女性の会」の構成メンバーが、思いを一つにし、知恵と力を結集することによって、近藤さんが何よりも重視した女性

たちのネットワークづくりが確実に進んでいくことにもつながったと思われる。一九八八（昭和六三）年に「婦人係」が誕生し、近藤さんが初の係長となった。市役所の女性職員は、自主研メンバーはもちろん、近藤さんより年上の人も含め大いに沸いたものである。近藤さんは婦人係の仕事について「女性のネットワークづくり、婦人会館の建設、女性行動計画の策定」という三つの柱建てをして進めていった。私が近藤さんの部下として婦人係に異動したのは翌一九八九（平成元）年。三つの柱のうち、ネットワークづくりは「しずおか女性の会」として一応の結実をみたが、「婦人会館建設」と「行動計画策定」は、この年に始まる。二つの事業はいずれも市として初めての取組であり、それを同時進行させるのは、たった三人（翌年四人に）の係にとっては質量ともに途方もない大仕事であった。大量の仕事を抱え、遅くまでの残業は当たり前という中で、近藤さんも疲労困憊していたはずだが、めげそうになる私たち部下の気持ちを引き立てることに何かと心を砕いてくれたことを思い出す。

婦人会館建設と女性行動計画

婦人会館は、後述する女性行動計画では「女性問題の解決と『男女共同参加型社会』の実現に向けて、男女がともに学習し、交流するための拠点施設」と位置づけられている。

相談室、図書コーナー、子ども室、あるいは喫茶コーナーや団体活動室等々、それまでの市の公民館等にはない機能を持つスペースも、上述した「婦人会館基本構想」を基に配置された。

建設事業は決して順調に進んだ訳ではない。建設用地の取得、国庫補助金の申請、起債等予算管理等々公の施設建設に係る煩雑な事務に加え、地元への説明、「女性の会」の思いと建築担当の意見との調整、国や県への働きかけ等々対外的な交渉事も多く、近藤さんは係長としてこうした交渉事を一手に引き受け、いつも忙しく走り回っていた。その一方で、この仕事を「役

所の事務」としてこなしていくだけではなく、常に目的を意識して進めることを私たちに求めた。それは、仕事の楽しさを味わうことにもつながった。会館完成後の姿をイメージし、そこでどんな事業をどんな風に展開するか、どんな人たちがどんな思いでやって来るか、利用しやすい雰囲気づくりにはどんな備品（椅子やテーブル等）がよいか……などと近藤さんを中心に話し始めると、何だか楽しい気分になったものである。

女性行動計画の策定は、ほとんどゼロからのスタートであった。ただ、策定の核となった計画策定委員会（有識者や市民代表）と庁内会議メンバーの人選には、それまでに近藤さんが市役所の内外で築いてきた人脈と人を見る目の確かさが生き、いずれも、ほぼベストメンバーと言ってよい構成となったと思う。この策定委員会と庁内会議とがキャッチボールをしながら、計画案を練っていった。

当時、市役所の役職職員はほとんど男性で占められており、「男女平等」「男女共同参画」といった言葉にもなじみが薄かった時代である。庁内会議では「家事や育児の負担が女性に重い」「管理職の女性が少ない」「男は仕事、女は家庭意識が根強い」等の話題が出てくると、自分の生き方が否定されているかのような印象を持ち、抵抗感を示す人もあった。つい真正面から「あるべき論」を振りかざしてしまう私に、近藤さんは「そういう時は『あなた方の娘さんの将来を考えてみて』と言おう」とよく言ったものだ。次の世代のための計画でもあることを強調しよう、と。

計画の内容等については、上司ともよく議論した。上司たちも、計画の当事者（女性）でもある私たちが自由に意見を述べることを許容してくれた。私たちの意見が受け入れられない時、近藤さんは粘り強く何度も繰り返し説得した。「これはダメだったかな」と諦めていた私たちの意見を、当初は渋っていた上司が他の幹部たちの集まった会議で、しっかり表明してくれたこともあった。私たちは思わず顔を見合わせ、「諦めずに言い続ければわかってもらえる！」と確信した

ことである。

計画策定のための会議は、毎回、盛り沢山の内容を抱えてメンバーが右往左往しつつも終始活発な議論を交わしていた印象がある。近藤さんは、その中心ではなく傍らにいて、絶妙のタイミングで絶妙な一言を、時に鋭く、時に冗談めかして投げかける。メンバーは「あ、そうか」と納得したり、「なあんだ」と笑ったり、何となく元気になって再び議論に熱中する……そんな風に進んでいったように思う。近藤さんは「背中を押す人」であった。

女性行動計画は一九九一（平成三）年一月に策定され、その年の四月に近藤さんは広報課広報係長となって婦人係の仕事を離れる。女性会館と中央公民館の複合施設である「アイセル21」の建設もようやく軌道に乗せた上での異動であった。

近藤さんは、その後も「先頭を走る人」という役割期待に応えながら様々な分野で活躍する。行政の職員としての近藤さんが大切にして来たことは、一つひとつの仕事に真摯に向き合うことであったと思う。常にその仕事の原点に立ち返って考えること、様々な角度から柔軟に粘り強く可能性を探ること、何よりも「人」を大切にすること等々、近藤さんから学んだことは数えきれない。私は不肖の部下・後輩であったが、近藤さんの思いと姿勢を継承する後輩職員は、男女を問わず多いはずである。

女性会館は現在、理想的な指定管理者を得て、その運営は全国的にも注目されているという。近藤さんや「女性の会」がめざしたものが、着実に受け継がれ豊かに実りつつある。が、新たな課題が絶え間なく出てくるだろう。

市の行政職員に対しても、女性会館についても、もう少しの間、その行く手を見守って、時にあの絶妙なアドバイスをしてほしかったと思うのは、私だけではないだろう。

《近藤美津江さん　プロフィール》

一九五一　二月二五日、近藤長吉・美代の長女として静岡市三番町に生まれる　三番町小学校

一九七三　末広中学校　城北高校　日本大学法学部卒

一九八三　静岡市職員に採用

一九八八　婦人青少年課に配属　女性行動計画、女性会館建設に従事

一九九一　婦人青少年課係長（女性係長は二五年ぶり）

一九九五　広報課広報係長

一九九九　静岡市国際交流協会事務局長

二〇〇〇　西部公民館長

二〇〇二　健康文化部部付主幹

二〇〇三　女性政策課長

二〇〇四　国際交流課長

二〇〇五　静岡病院事務局医事課長

二〇〇七　福祉部参与兼葵福祉事務所高齢介護課長

二〇〇八　子ども青少年部理事（一般行政職初の女性部長級）

二〇〇九　福祉部理事兼葵福祉事務所長

二〇一一　生活文化部理事兼生活文化局調整室長

退職

女性施策の功労者知って

故近藤美津江元静岡市理事

故近藤美津江さん

6月に開館21周年を迎える静岡市女性会館「アイセル21」の1階図書コーナーに、ささやかな追悼の展示が設けられている。2月にがんのため51歳でこの世を去った元市生活文化局理事の近藤美津江さん。同館開設に尽力し、女性のための施策をけん引した功労者を知ってもらおうと、スタッフが自画像や写真、同館記念誌を集めた。

市女性会館開設に尽力　写真や記念誌展示

会館開設に尽力した故近藤美津江さんの遺品展示を見る母親の近藤美代さん（左）らー7日、静岡市葵区の市女性会館「アイセル21」

近藤さんは同市生まれ。日本大学法学部に進み、1973年に同市職員となった。「一般採用は1人か2人ご時世。女性職員の勉強会を組織し、台頭前に旧市職員は「コンちゃん」ほどの勉強家は見たことがない」と回想する。

中でも心血を注いだのは同館開設。女性市民の思いを生かそうと、準備段階から女性団体、グループに声を掛け「しずおか女性の会」の発生を促し、市民と市職員が時間をかけて構想を練り上げる先頭に立った。男女共同参画の必要性を役所内外に広める努力も惜しまなかった。

係長、課長、部長級と昇級には、「何十年ぶり女性」「女性初」の冠が付いた。夫は海外出張が多く、2児の子育ては母美代さん（85）に託し、帰宅は時に深夜に及んだ。乳がんに気付いたのは50歳の時。幹部候補生が参加する自治大学での研修を終えた日だった。

定年1年前に退職するまで仕事と闘病を両立させた。「職場の皆さんが支えてくれた。仕事一筋の人生」と仏具の漆塗り職人だった父親を見て育ったからでしょうと美代さん。1年後の高野康代元葵区長（61）は「調整能力に優れた行政職員のお手本。本年度は女性の部長が1人、参与が2人、薫陶を受けた後輩はさらに育っていくはず」と期待する。展示は6月末まで。

静岡新聞夕刊（平成25年5月10日）